

「そんな馬鹿な事を言つてる間にや、食ふ物が無くなつて死んで了ふぞ。」
「それも面白えだ。どうせ地主どもに一分一分、黽り殺しに逢つてるだから、餓死んで了やア結局氣樂だ。」

「太い事を言ふ野郎だ。貴様等の死ぬ前に牢屋と云ふ處があるぞ。」
「それも可えだ。地獄と監獄とは格別の異ひも無いだから、何方でもお望み次第の方へ行くだよ。覺悟すりやア何でも無い。さア何時でも待つてますだ。此うして死ぬより辛い其日を過すよりや、其方が何程幸福だか分らない。」

音右衛門は悪びれもせず捨て鉢の身には怖いものは無いの、村長の言葉を益々買ひ募つて、手も付けられぬので、落合も遂に其日は其儘音右衛門を歸したのであつた。

六 死の村

音右衛門が村長を罵つた顛末は直ぐ非常な評判になつて村中へ傳はつた

「落合の泥棒野郎、如何な面アしやがつたか、見たかつたなア。」

「音右衛門さんは旨え事始めただ。」

と、云ふ様な話して、甲も乙も丙も丁も、次第に鍬を投げ出した。

「地主が降参するか。役場が謝つて来るや、それで無きやア吾徒が餓死ぬか、なに一か八か、やる處までやつて見るんだ。人生五十年だ。幸福に生きるか、不幸に死ぬか、二つに一つだ。幸福に見離されて加之に死ぬ事も出来ねえなんて、眞ッ平御免だ。死ぬ迄戰鬥アしてやれ。」

と、人民の心は期せずして一致した。
鍬や鎌を投げ捨てた人民は、續々として他の村や町へ出稼ぎした。鐵道の土方に雇はれて行く者もあれば、茶師になつて行く者もある。運送屋の馬力追ひになつたり、郵便配達を志願したり、中には商家の番頭になつたり者などもあつた。娘たちは又、少し學問のある者は電話交換手になつたり學問の無い者は女工や下女や茶摘女になつて、續々として村を出た。後に残つた女房や老人たちは、僅かな田畑の一部分を耕して野菜物の大根や葱

や菜を作り、其傍らには麻つなぎの内職やマツチの箱張りや、少し氣の利いたものはレースやボタンなどをして、辛くも糊口を凌ぐことになつた。村の人口は俄然として半数になつて了つた。八百餘戸の家はあり乍ら、どの家も一々半ば空屋の様に、座敷などは年中戸を開かず、全切にしてある處も少なく無かつた。中には家内中出稼ぎして了つて、全くの空屋になつて居る處もあつた。小供は少し大きいのは、大抵父に伴はれて町へ行つたり、他村の親類に預ける様に奉公させられたりして、小學校の生徒も三分の一は減つて了つた。村に残つて居る小供も、多くは子守になつて、日々の出席は全體の三分の一にも足りない程であつた。教場は老人の齒の抜けた様に、どの机も皆な空いて了つて、教員は手持無沙汰の餘り、度々二學級三學級を集めて、修身の談しや唱歌や遊戯體操の様なもの計り教へ、手の空いた先生は、教員室の火鉢を圍んで、空談と欠伸に其日を消した。出席の督勵も戸主が居ないので、多くは如何する事も出来なかつた。村内の地所は段々に荒れが見えて來た。田にはペンく草や金平糖や田

がらしや紫雲英などが時を得顔に蕃殖した。畑には明治草、はこべ、薊、オーチャードグラスなどが遠慮もなく蔓つた。縣道から里道の方へ歩いて見ると、見渡す限り草が青々として一大牧場の様に見えて居る。稻は植ゑ付けてあるけれども曾て草を取らぬので、どれが稻か草か見別けもつかぬ。さしものに養鶏區として名高かつた小川も、多くは鶏を賣拂つて了つて、今では時を告げる鶏の聲も極めて稀である、犬や猫は瘦せて野良に捨てられ、見る影も無い姿を折々田畑山林に現はして居るが、漁るべき食物も無いので、日に死滅して行つて、彼處の納屋の蔭、此處の大木の下に、屢々その死骸を見出すことがある。

民家の簷は傾かざるは殆んど無い。茅の屋根は大抵何處かしらが傷んで、死人の腸の様な煤が釣下つて居り、凄まじく落ちた壁の隙からは、貧しい家内の様子が覗はれて、障子は紙も破れて骨立つて居る。納屋も物置も入れれる物が無いので、ガランとした處に蜘蛛の巣のみ十重八十重に掛り、庭は流石に草に埋もれては居らぬけれども、掃く人も無ければ、小さい雜草

が離々として既に地を這つて居る。

凡そ亡村の光景、死滅の徴候は、一つとして現はれざるは無い。之を譬へて言へば、暴風雨の前の静けさ——此う云ふ寂しい悲しいそして物凄景色が堪へられぬほど轟々と此村の空気に充ち満ちて居た。人々は全く絶望して、村の改革とか、又之れの反對の不平とか云ふ様なものを唱へる者は一人も無くなつた。地主たちは眼前に迫る収入の減少——皆無——を見て、如何か云ふ方法を運らさうとしたが、それさへ人民の非常な決心の威力に蹴壓されて、空しく田畑の荒れるのを見るばかりであつた。心のある者は此有様を眺めて、無心の田畑の爲めに萬斛の熱涙を濺いだ。

明星村はモウどうしても滅亡するより外に行く道は無かつた。此上は信託會社は買占めるだけ買占め、賣るだけ賣つて、村役場は税金を搾れるだけ搾つて、學校の建築や村の行政費に出来るだけ浪費して、人民は出来るだけ滯納處分をされ監獄へ入れられ他郷へ流れ出し、出来るだけ貧乏に陥ひつて零落して病氣になつて發狂して自殺して、土地は荒れられるだけ荒

れ、川は出来るだけ大水が出て、天からは雹が降つて雷が落ちて、家も村も木も山林も、さながらの地獄になつて、此儘に滅亡するより外仕方が無くなつた。實際、人民が此う滅びに急ぐ時、明星尋常高等小學校の工事は一萬五千圓の工費を投じて立派に出来上つた。半ば倒れ掛けた幾百の人家を傲然として睥睨しつゝ、明星村の中央に聳え立つた。

もう税を納める者は半片も無い、怠納處分も競賣も、村民の神経を驚かすには餘りに平凡であつたのである。入獄も刑罰も、餓死の前の一つの賞與慰勞としか人民には受取れなかつた。

明星村は遂に教員の俸給が拂へなくなつて小學校は休校した。村吏の俸給も拂へなくなつて役場員も多くは他村に稼ぎに出た。村會を招集しても一人の出席者が無く、強いて催促すると言ひ合せた様に、誰も彼も辭職を申事でて、終に村會も成立せぬ事となつた。

流石剛復の落合村長も遂に辭表を提出した。助役も収入役も辭任した。けれども其後任を選擧する村會すらも最早勿論招集手來なかつた。もう何

もかも滅茶苦茶である。
 この死の村に唯だ一人生々の活氣を示して居たのは春日の小澤九郎助と云ふ爺であつた。彼は村人の自暴自棄を慨いて色々之を救ふ方法を考へたのであるが、情弱の風が朝寝に基くと云ふ事を知つてから、人の止めるのも聞かず、毎朝、夜の引き明け方に、背戸の小山に登つてポウ〜と高く法螺貝を吹いた。澄んだ曉の空氣を震はせて、民家から民家に響き渡る貝の音には、村人も其良心を刺激されて、次第に早く起きる様になつて來たが、それでも未だ睡りから覺めぬ連中は、爺さんを『お世話御苦勞助』など縛名して、憐ない惰眠を貪つて居た。罵詈や嘲弄の中にも法螺貝は昨日も今日も、今月も來月も、天地を動かさねば止まぬ如く義人を呼び集へる天鼓の如く、相變らず朝な朝な空氣を劈いて居た。

第十三章

一 義人

村長も、助役も、収入役も、村會議員も、村の自治機關の總ては村を見棄て、了つたけれども、之を見棄てない者も、一人や二人は未だ村の中に残つて居た。前の村長の大和宗八翁がそれであつた。青年會長の草村文平がそれであつた。

明星村の自治機關は全く休止して了つた。郡書記が村長事務管掌として此村に臨んだが、それは單に蜘蛛の巣だらけな役場の留守番に過ぎなかつた。折々出て來る戸籍の届出を受けける位ゐの用事の外には、村の書記さへ出勤せぬ役場に、大きな欠伸をして、煙草をふかすのが毎日の仕事になつて居た。
 大和草村の二人は亡び行く村の有様を見て、聲を放つて泣いた。村民を思ふ誠の心は、二人を安閑とさせては置かなかつた。朝に晩に村の内を見

廻はつて業務を失つた者には職業を心配して遣つたり、或は衣食を恵み、心掛けの間違つて居る者には能く懇ろに説諭した。が、時の間に斯くも人の心は遷り變るものか、道理とか正しいとか云ふ事は、彼等の頭には三文の値打もある様には響かないか。唯だ食ると云ふ心ばかり長じて、人さへ見れば、哀れつぽく見せ掛けて、只管に其同情を惹き、何等かの恵みに預からうとした。糞と言はれても味噌と云はれても彼等の關する所では無かつた。一つや二つ頭を殴られても、一錢でも手に入るのを喜んだ。人の妻でも處女でも五錢か十錢で淫を賣るのを何とも思はなくなつた。男と男とは僅かの金の事から能く血まみれの喧嘩をした。墮胎とか窃盗とか云ふ現象は少しも珍らしい事ではなかつた。

村内には殊に病人が多かつた。概して胃腸病が多いのは、食物の攝り方のムラなのと、粗悪なものを攝るとの爲であつた。その次には過勞と粗食から來る營養不良の病氣、たとへば肺結核や肋膜炎なども多かつた。夫等の多くは醫者に掛からずに、ドン／＼死んで行つたが、慈悲深い宮田醫士

は、暇のある毎に村内を廻つて、病氣は無いか、悪るい處があつたら藥をやらうと親切に見て歩いた。併し猜忌深い村民は、此うして醫者が歩くのは藥禮を儲ける爲めだらうと、失敬な推量をして、折角親切の診察を拒む者すらもあつた。その癖藥禮は少しも醫者の處へ持つて來る者が無かつた。『ナニ出來る人なら催促せずとも呉れますよ、私は催促なんて大嫌です。』と、宮田は平氣で藥を呉れて居た。

此うして乏しい生活をして居ながら、如何云ふものか博博が村中へ盛んに流行り出した。昔しからあつた博徒の親分は盛んにテラ錢を儲けて、日となく夜となく家の中、畑の番小屋、山林の中などでそれを開帳した。すると女たちも三錢五錢を出し合つて、頻りに骸子を轉がした。富籤の様なものも拵らえて、それに當ると、帯が來たり、前掛が來たり、大袈裟なのは火鉢が來たり、箆筒が來たりするものもあつた。その博奕が始まると、女も男も夢中になつて、夜の更けるのも目の暮れるのも一切忘れて、或る妻さんなどは、我子の爐に落ちて大火傷をしたのをさへ知らずに居た程である

奥田久夫と云つて、春日神社の禰宜さんがある。此人は六十歳と云ふ高齡をして居るのであるが、深く此風俗の亂れたのを歎いて、五つの大字をば一軒残らず訪ね歩いて、淳々として博奕の人心を毒する次第を説いて居た。女は女の勤めとして家を守り良人を勵まし、男は男の勤めとして人を導き村を齊へるのが人間の道であると、舌の爛れるまでもと毎日〱村を歩いて居た。

此様な義人も、時が致らねば、此村を救ふのに何の力も無かつた。

二 黙々として何か研究

此頃この村に不思議な事が現はれた。腐敗した民心の中にも、聊か未だ道義の光りが残つて居て、貧しい内にも孝行をするとか、貞節を盡すとか云ふ、善い行ひをする者があると、其人の門口には、何時とは知らず「天賞」と書いた紙片が貼付けられて居た。そして其行ひの特に奇特な者の戸口には、金銭や米などが、「天孝子を助く」と云つた様な貼札をして置いてある事

も少くは無かつた。之に反して、善からぬ行ひのあつた者の門には、朝起きて見ると「善心に返れ」と云ふ貼札がしてあつた。或る女は或朝我が菩提寺の宗泉院——これは朝日に在る臨濟宗派のお寺であるが——へお参りに行つた儘、久しく経つても歸つて來ぬので、息子が心配して迎へに行くど、女は本堂の佛の位碑の前に座つた儘動けなくなつて口も利き得ないで居る。息子は大に驚いて、庫裡の方へ行つて住職を呼んで來たが、其住職に助け起されて、女は漸と口が利ける様になつたが、其目からは涙が流れて、自分は今墓参りの序手に、誰も居らぬのを幸ひ、此本堂から銀の燭臺を盗み出さうとして手を掛けたら、此通り動けなくなつたので、佛様の罪は眞に恐ろしいものであると、住職と息子との前に眞心から懺悔するのであつた。

斯様な噂は村中に廣がつて、悪人たちは何れも安き心はなく、次第に竊盗とか放火とか云ふ悪事が其數を減する様になつた。それにしても此不思議の現象は、何者がするのであらう。或者は神様の所爲であらうと云つた。

或者はイヤ、誰か人間の爲す事に相違ないと主張した。すると又神様説を執る人々は、そんな神變不思議な天眼通が人間業で出来て堪るものか。誰も知らぬ人間の秘密を知つて誰も知らぬ間に賞罰を下す事などは到底神ならでは出来る筈のものでは無いと反駁した。すると又人間説の側では、そんな事は何でも無い。人間にだつて千里眼と云ふ能力もある。催眠術には神通力と云ふものもあるし、強制催眠、随意の暗示が出来るでは無いかと論じ返へした。そんなら其の催眠術をやる人は誰かと云ふ議論が起つたが、村で之を研究して居ると云ふ様な人も無いので、現象は遂に不思議のまゝで月日と共に流れたが、誰言ふとなく、宗泉院の和尚が怪しいと云ふ評判が立つて、善人も悪人も皆な一樣に和尚を一種の恐れと尊崇の眼で見様になつた。

此の宗泉院の和尚と云ふのは大月得珠と云つて、當年三十七歳、佛教大學を卒業して將來我が宗教界の大立物となるであらうと囑目された秀才であつたが、卒業後何か悟る所があるとの事で、提供された名譽の地位を断然として抛ち去り、我が幼ない時から養はれた此村の宗泉院に歸つて、老衰した前住の跡を繼いだのである。爾來十年になるけれども、得珠は別に之と云ふ名も擧げず、凡俗の田舎僧侶と肩を伍して、黙々として何か頻りに研究して居るので、何か哲學か心理學の大著述でも企てゝ居るのであるまいかと世間からは見られて居るのである。

三 救はねばならぬと覺悟した

愛村心の強い大和、草村、宮田、奥田の人々は此事實を黙つて見ては居られなかつた。悲憤の血を沸かした四人は、幾度も大和の家を集まつて、如何かして斯民を救ふ方法はあるまいかと相談をして見たが、四人が四人今迄に精を枯らして村内を巡回し、出来るだけは教へもし、施こしもしして見た末の今であるから、その姑息の慈善や救済では何の役にも立たぬ事を十分に理解して居たので、モウ此上に方法は無い。所詮、なる様になるより外は仕方があるまいと云ふことに、動もすれば議論は決着しそになる

のである。けれども今こゝで此四人が村を見捨てて了つたら、未來永劫その村の再興は望みが無くなるのであるから、如何か其内には方法を發見したいものであると云ふ、唯だ一縷の望み——それも殆んど當ての無い望みではあるが——を維いで、日一日と送つて來た。此上は大偉人の力に依つて村民を導くか、天地も顛覆る様な大變災でも出來て、人民の氣風が一變し、會社と云ふものや、利慾より外に何も無い地主と云ふものが一掃されるのでなければ、望みは到底絶えたるものである。何卒その時が來れかしど四人も今は涙乍らに半ば絶望して、幾月かの光陰を徒に過こした。

そこに或日フト又報徳教の傳道者石井洋が此村を過つた。

石井は此村に足を踏み入れると、荒れ果てた田園の有様に大層肝を潰して、大正の聖代に斯様な野蠻國があつうかと、吾ど我が眼を疑つたのであるが田園の荒蕪したのは何處までも荒蕪である。軒は傾き壁は落ちた、田も畑も草茫茫として、何處へ行つても足の踏み處さへなく、山は赤く禿げ、道路にさへ雜草が五六寸の長に生え、微かに轍の跡を残す計り、丁度無人

の村に均しい光景であるので、石井は此前この村に來た時の事を思ひ出して、如何に人事の頼み難きかを胸に描き、感慨頻りに到つて涙の落つるのを覺えないのである。彼は聽て此前の宿所なる秋山區の神宮寺勇の門を叩いた。

神宮寺は石井の顔を見ると、

「いや、先生、どうも面目次第も御座いませぬ、御覽の通りの次第になつて了ひまして。」

と、面を伏せるのであつた。

「一體、神宮寺さん、如何したと云ふもんです。」

と、石井の問ふのをも待たず、神宮寺は、

「如何の此うのと云つて、村はモウ滅亡して了つたのです。秋山の區や永安社は勿論のこと、明星村と云ふものが、全然亡びて跡形も無くなつて了ひました。私の様な力の無い者は此成行を如何する事も出來なかつたのです。」

と、激越な調子で、彼時から今までの學校問題や怠納處分や小作料値上の
 實行や、それから人民の失望落膽が聽て自暴自棄となつた事、住民が此村
 を捨て、續々他郷に去つた事、それが他郷で無理な労働と不攝生をした
 結果、僅か二月か三月の間に續々病人になつて、二進も三進も行かなくな
 つて村へ歸つて來る事、村の共有地問題も解決し掛かつて未だに其儘にな
 つて居る事、耕地整理も途中で止めて居る事、春蠶は上簇間際になつてと
 う／＼桑の不足の爲めに大部分失敗して了つた事、信託會社の主任が村長
 になつて、役場は事實上會社の事務所同様になつた事、會社は村に對して
 生殺與奪の絶対權力を握つて居て、村民はモウ之に抵抗ふだけの力が無い
 事、非買同盟が大失敗に終つた事などを、太息と共に残る隈なく話して聞
 かせた。

石井は聞き終つて、

「ぢやモウ此村を昔の様な幸福な村にしたいと思ふ人も無くなつたのです
 ね。」

と、尋ねた。

「然いふ譯ぢや有りません。元の村長さんであつた大和さんなどは、熱
 心に村を再興したいと云つてるんですけれども、一人や二人の力で此村が
 如何なるでもありませんから。」

「それが不可ん。」
 と、石井は叫んだ。

「それが不可んのですよ。至誠です。至誠さへ眞に發露すれば如何な事で
 も出来るですよ。御覽なさい。急流に船が流されたとするど、乗つてる人
 たちは、顔色を失つたり勇氣を沮喪させたりして、もう到底助からぬと絶
 望して了ふでせう。其結果は如何ですか、大海へ流し出されて實際生命を
 失ふか、海まで行かぬ中に巖石に衝突して、舟は微塵に碎け、乗組は水底
 に葬られるより外仕方が無いでせう。けれども茲に唯一人……唯だ一人で
 可いのです……決然として此舟を救はねばならぬと覺悟した人が、矢を射る
 様な急流を睨んで、舷側に立つたとしませう。此人の生命を限りに漕ぐ櫓

の力は、遂に舟を何處かの岸に着ける事が出来るではありませんか。さア神宮寺さん、此うして空しく考へて居る時ではありません。大和さんの處へ行きませう。大和さんに必死の覺悟をして貰ひませう。大和さんが此村を救ふ爲めに必死の覺悟をしたら、貴下も必死の覺悟をしなければなりません。私は見ず知らずの他人ですけれども、もう此村は決して去りません。此様な氣の毒な有様を見て、如何して見捨てゝ行かれませう。私も此村で死にます。さア神宮寺さん、貴下には必死の覺悟が出來ますか。神宮寺さん、如何です。」

神の命の如き壯嚴な石井の言葉に、神宮寺は此時ツト頭を擧げて、「します。致します。確かに致します。必死……宜しい、名譽も財産も總て投出しませう。生命もお入用なら何時でも差出す事に決心しました。」と、叫んだ。

「よし、それでこそ神宮寺君、さア行かう。三人の至誠は鬼神をも動かすぞ。」

石井と神宮寺は、直ぐ朝日の大和宗八の家を訪れた。

四 廢村興復の會議

大和の家には忽ち廢村興復の會議が開かれた。出席したのは大和宗八、神宮寺勇、石井洋、それに青年會長草村文平、醫士宮田良太郎、神宮奥田久夫、それから大和の家の世話になつて居る元巡查の長谷川鈴之助と休職女教員桑田照子と村長の娘の大和あひ子の九人であつた。照子と愛子は、女の身で此様な會議の席に出るのを鳥辭がましいと考へたので、唯だお茶を運んだり火鉢を出したりする積りで此處に來たのであるが、女ながらも村を憂へる心の淺からぬ二人は、するとも無しに一座の相談に耳を傾けるので、進歩主義な傳道者石井は、婦人にも働いて貰ふべき役目があると、二人をも強いて會議に列席させたのであつた。

「是れだけの決死隊があつたら、もう明星村の再興は出來上つたも同様です。」

と、石井は一座を見渡して、凱旋の將軍の様な風で快活に言つた。

『然でせうか。』

と、宮田醫士は覺束なさそうに石井の面を見詰める。

『人情は腐つて、人民が懶惰者になつて、風俗が亂れて、病人が多くなつて、田畑が荒れて、それでも再興の望みがありますか。』

と、奥田神官は白い髯を撫でながら、痛憤に堪へぬ面色をして石井を見た。

『それで結構です。二宮尊徳先生は天保の年間大饑饉の際にすら櫻町を再興して彼の様な立派な村にしたではありませんか、其時に比べると、今は經濟や社會の學問の發達は何れ丈か別らない。この位ゐの村が恢復出來ないで如何なるものですか。』

と、石井は既に胸中に成算のあるかして、悠揚迫らざる態度を示して、一座を心強く感せしめたのである。聽て石井は徐ろに説き出した。

『何事をするのも人が根本です。どうぞ皆さん誓つて下さい。村の爲には凡ての事を犠牲にして盡すと云ふことを。それが出來た上で、私は今後の

方針をお話ししようと思ひます。』

一座九人は一通の誓約書に自署して連判帖を作つた。石井は又説き進むのである。

報徳教の至誠、勤勞、分度、推讓と云ふ四つの綱領は、此場合皆さんに

服膺して戴かなければならない金科玉條です。私は報徳教の傳道者であり

ますから、此事は特に強くお望み致して置くのであります。けれども私

は報徳教を、二宮先生直傳の儘に今日に傳へようとするものではありませぬ。天明、天保の學問を基礎にした報徳教を、其儘大正の時代に實行しよ

うと企てるものでは御座いません。いや實行しようとしても、それは出來ないであります。時代が違ふのですから、根本に於ては何等の相違が無

くとも、其方法に至つては、自から今少し進歩したものを採用しなければならぬのであります。それで私は報徳教の思想を行ふに産業組合の方法を以てする事を主張する。經濟即ち道德、道德即ち經濟と云ふ報徳教の大

精神の上に立てられたる産業組合の組織を以て、此村の再興を圖らうと思

ふのです。」

産業組合と云ふ言葉は、明星村の有志の間には、疾の昔から聞き慣れて居る響であつたけれども、其實質が如何なるものであるかと云ふ事は、嘗て経験されては居なかつた。而も近村で實施して居る産業組合と云ふものが何の役にも立たぬのを知つて居る一座の人々は、こんな陳腐な平凡な方法で、此難村を救はうと云ふ石井の大膽さに、稍や失望して、『産業組合で？』

と、小聲に咳く者さへあつたのである。石井は語を續けた。

「然です、産業組合です。私は此明星村は勿論の事、如何なる町村も市街も、此産業組合に依つて救はれるより外には道の無い事を絶対に信ずるものであります。然るに世の産業組合なるものは、多くは理事者其宜しきを得ないのと組合員の無智な事に依つて、一向成績を挙げ得ないのみならず中には反つて害毒を流しつゝある者さへ實例に乏しくない。正宗の名前も狂者に持せれば無益の殺傷をするのと同じなのです。」

一處は

「正宗 狂者」

と、反響した。

「例を舉げて見ると、産業組合四種の一なる信用組合です。是れが大抵の組合では唯だ世間有來りの銀行の用しゝして居りません。貯金と貸金をの貸金も、銀行へ行くときヤレ擔保ヤレ連印と喧ましい面倒な手数が要るけれども、信用組合だと一判で借りられる。これは便利だからと云ふのでつまらぬ事にまで金を借りる癖が付く。それから期限が來て返さなければならぬ時になると、どうも困つた。仕方が無いから又百五十圓借りて、百圓だけ前の元金を返し、五十圓は新規の借りにすると云つた風で、信用組合がある爲めに村民は段々借金が多くなつて行く、と云つた様な有様で、これでは信用組合は全く其存立の意義を失つたものになるのです。又販賣組合にしる、生産組合にしる、購買組合にしる、多くはこんな風に誤用されて居るのですから、其成績の舉らないのは尤も千萬の語で、私の言ふ産

業組合は、斯様な有らゆる誤用から脱した、眞の産業組合であります。』

五 無限責任報徳産業組合の組織

石井は話頭を轉じて實際問題に入つた。

「然らば其産業組合を如何に此處で實施するかと云ふと、先づ此産業組合を利用して資金を作る事に努めるのです。何をするにも先立つものは金であります。殊に廢村を再興する原動力は人の教育と資金でありますから出来るだけ先づ此方面に心を注がねばなりません。人の教育は小學校を始めとして、各種の教育的會合を作らねばなりません。それは別に論ずる事として、茲には資金の造成法を研究致しませう。それには先づ購買組合を始めとする事です。購買組合は問屋から安く仕入れて、普通の値段で組合員に小賣をして、其儲かつた金を組合員の幸福の爲めに使ふのですから、組合員は知らぬ間に貯金が出来ると云ふ事になります。その貯金が集まつて村の再興の第一の出發點になるのであります。此外尙ほ出来るだけの貯金を扱ふ爲めに信用組合も作らねばなりません。それから組合員の産業を出来るだけ少ない費用で多い収益を擧げる爲めには、生産組合を拵らえて、機械を用意せねばなりません。出来た品物を出来るだけ利益を多く賣るには販賣組合も作らねばなりません。そして目前の利益に眼を晦まされず、永久の爲めに飽くまで此の産業組合に信頼して、皆さんは易らぬと云ふ決心が出来ますか。」

石井は此う言つて一寸言葉を切つた。

「出来ませう。出来ませうとも。」

と、云ふ聲が口々から漏れた。

「そんならば是から直ぐ組合を作らうではありませんか。」

「宜しい、然しやう。」

と、一同は異議を云ふ者は一人も無い。

明星村報徳信用購買販賣生産組合は無限責任組織で即座に茲に成立つた。そして組合長は、大和宗八が推されたのである。

「ところで組合の仕事です。」

と、石井は一座を眺め渡して、

「購買の部では、先づ最初から何でも入用の物一切と決めて置くが便利でせう。何せ終にはそうしななければならぬのですから。それから生産部では馬耕機械を二組も買つて組合員の地所を順に耕作するが可いでせう。今迄小作が荒らして居た處も、よく小作人に話して引上げて此方の手で耕作するか、又は其小作人をも眞面目の者なら組合に入れて耕作するが可いでせう。何して馬耕にすると、今迄の三倍位ゐの廣さは同じ手間で耕作が出来るとせうからね。すると其人夫賃だけでも既に餘分が出て來ると云ふものです。」

それから石井は細目に涉つて細かに自分の考へて居る計畫を述べた。八人の者に勿論異議のある筈はなく見掛けに寄らぬ石井の學識の豊富なものと博愛心に富んで居るのには一同感服して、一切を石井の指導に任せられた。

組合の出資金は幾何にしようかと云ふ相談になると、一同は少しも見込

が付かなかつた。それで兎に角毎月どの位の出せるか、出來るだけを書いて見ようでは無いかと云ふ事になつて、一同に紙を廻はしたが、八人の出資し得る處は僅かに左の通りであつた。石井は村民で無いかからの理由で飽くまで傍觀指導の位置に立つと云つて、此組合には加はらなかつた。

氏名	加入口數	第一回拂込金
一大和宗八	十口	二十圓
一草村文平	十口	二十圓
一神宮寺勇	十口	二十圓
一宮田良太郎	十口	二十圓
一奥田久夫	五口	十圓
一長谷川鈴之助	二口	四圓
一桑田照子	二口	四圓
一大和愛子	五口	十圓

合せて百〇八圓に過ぎなかつた。石井は此十倍即ち千〇八十圓を當座の

總資本額として、一ケ年の間に之を組合に拂込む事とし、出資一口を廿圓と定めて、大和、草村、神宮寺、宮田の四人は十口、奥田と愛子は五口、それから長谷川と桑田とは二口づつを持つ事にした。

組合の仕事は購買部に桑田照子と大和愛子を頼む事にした。それから生産部には長谷川鈴之助を、信用部には草村を、販賣部には神宮寺を、そして傳道者の石井は組合の顧問に頼む事となつた。そして此石井以外の五人と組合長の大和とを理事とし、宮田と奥田の二人は監事の任に就いた。

知事の許可があつて組合の登記を終つたのは大正二年二月十日、東京では憲政擁護の大騒動が突發した其日であつた。

六 女性の口から化學の名

組合員九軒では成だけ先の入用の品を考へて置いて、早くから組合へ買入れを注文する事になつて居た。食物でも、藥劑でも、日用品でも、無くならぬ中に注文して置くとき、一週間に一度ぐらゐづゝ、照子と愛子は清水

市まで大和の家の男に車を率いて行つて貰つて、自分がついて行つて仕入れをして來るのである。そして二人で大抵の物は組合員の家へ配達して届けた。

「まア先生、態々恐れ入りましたねえ。」

「あら愛子さん、濟みませんのねえ。お父様に宜しくねえ。」

と、云ふ様な挨拶を、えらい配達夫は方々で受るのであつた。

何せ二ヶ月経つたところで資本は僅か二百十六圓に過ぎない。これに賣上の利益が二十五圓ばかりあつたので、三月には併せて二百四十圓餘りの品を働かす事が出來たが、未だこれだけで村を恢復しようなど云ふ事を考へると、心細くもあれば、寧ろ滑稽な程であつた。

追々農業の期節になるので、大和や神宮寺や草村の様な地面持ちは、今年耕作すべき地所の面積を決めて置かねばならぬので、三人は額を鳩めて相談した。大和は十町歩の田畑の内、自分の處では男を三人使つて二町歩計りを耕作し、草村は八町歩計りの田畑を全然小作人任せにし、神宮寺は

六町歩の畑を男女二人の雇人を相手に我手で一町五反歩許り耕して、後は小作人に任せて居たのであるが、此處で馬耕機械を二組買ふ事になると、如何しても七町歩位は餘分に耕作が出来ぬ。既に荒蕪地同様になつて居る小作地があるので三人は静かに小作人を説いて、人情に訴へて、やつと荒れ果てた地所を謝る様にして返して貰つた。不納になつて居た小作料は勿論全部免除すると云ふ條件で。

此う地所が決つて見ると、肥料を買入れねばならぬと思つて居る所へ小川の區長の息子の樋口要一が組合に入れてくれと申込んで來た。要一の父は無能な好人物に過ぎぬけれども、要一は父親とは違ひ何處やら頼もしい處があるので、青年會にも幹事の一人として人望を荷つて居たのである。樋口要一の加入は異議なく一同に迎へられた。樋口の加入に續いて鈴木福島等の眞面目な連中も加入することになつたので、組合の事業は益々盛んになつて來た。

肥料の入用高を調べて見ると、六軒の合計は五百圓餘りであつた。前に

は皆な信託會社から買つて居たのであるが、今度は組合で買ふ事になつたのである。處が桑田、大和の二人は組合には仕入れの資金が無いと云ふ。成程、三百圓そこらの金では五百圓の仕入れは出來ないのである。そこで肥料代は前金で組合へ拂つて貰ふ事にした。照子と愛子は直ぐ其金を持つて清水市の肥料問屋へ行つたのであるが、鹿髪の若い娘が二人ツト入つて行つた肥料屋の帳場は、急に番頭たちの話が止んで、幾つかの視線が正面に二人の上に注がれたのである。二人は顔の火照るのを覺えたが、勇氣を鼓して用件を滞り無く述べた。

「へえ、貴女方が明星村の報徳産業組合から……成程、肥料をお求めに……」番頭は呆れた顔をして未だ二人の顔を見較べて居た。

「それで磷酸肥料と窒素肥料には、お宅では何が有りませうね。」と、照子は尋ねた。

「へえ、磷酸……窒素……」何處を押せば此う云ふ難かしい學問上の言語が何にも知らぬ女性の口か

ら出るのであらうかと云つた風に、番頭は碌に返事もせず照子の顔を穴の明く程見るのであつた。

「は、加里のは要りませんのですがね、何々があるか燐酸と窒素の分を伺ひたいと思ふんですが……」

「完全肥料になつたのが御座います、如何で御座います、それでは……之れですと何の手数も入りませす。極く安全なんで御座いますか。」

「此時番頭は初めて口を利いた。『そうです。ね。けども色々地質も違ひますし、矢つ張自分で混せて勝手に拵らえた方が得用の様ですから……』」

照子の師範學校に於ける四年の修業と、豫てから理科に興味を持つた性質とは、思はぬ處に用立つて、並み居る番頭を驚かしたのである。

照子は愛子と共に必要だけ肥料を仕入れ、馬力に挽かせて歸つて來たが、類ひ稀なる女性の活動に面喰つた番頭の思ひ切つた勉強と、照子の巧者買物との結果、いよゝ組合で肥料に仕上げて配達した時には、組合

の純益は實に三割五分以上で、金にして百五十何圓と云ふ高、つまり其買入れた値段よりも是れだけ安いものが手に入つた譯である。

此くして三月の末には約五百五十圓の資金を組合は持つ事となつた。

七 組合の活動、行道樹の植付

生産部の長谷川は、將來組合の財源の一つとして、道路の畔に果樹の様なものも植ゑ付けたいと言ひ出したけれども、道路の兩側にそんなものを

植ゑたら、往來の邪魔になつて仕方があるまいと云ふ意見があつたので、長谷川も一時其考へを捨て、居たが、他に目星しい財源を得る道が無いの

と、何處の道路を見ても兩側は大抵草が生えて居るので、端の一尺ぐらゐは全く使はれては居ないので、又その説を主張

する様になつた。すると今度は、果樹を植ゑても到底収益はあるまいと云ふ説が起つた。それは公德の發達して居ない今の世の中では、果實が熟す

るまで其儘にしては置かぬ、通行人や村の子供が屹度皆な叩き落して了は

うと云ふのであつた。長谷川も之には一時閉口したが、それなら取つて喰へない果樹を植ゑる事にしようと思ひ出した。

「食へない果實を植ゑた處で何にもならないでは無いか。」

と、皆なが笑ふと、長谷川は眞面目に辯解して、

「いや製造すれば食へる様になる果實をです、一寸取つても食へないもので……」

「そんなものがあれば可いけれど。」

と、云ふと、大にそれがあると思ふ。そんなら君に任せると云はれて、長谷川も翌日直ぐ市の植木商會へ行つて、遊柿の苗を一千本買つて來た。この金は生産部から融通して貰つたので、長谷川は其の接木した計りの小さな苗を、朝日から小川へ行く田圃道の兩側に切々と植ゑ付けた。それから又残りの金で茶の實を三十俵ばかり買つて來て、小川から春日への道の畔へチヨポリと播き付けた。

道端の草の間から、茶の木が可愛らしい芽を出し初めた頃、豫て農工銀

行へ借入を申込んで置いた一千圓の金が來た。長谷川は直ぐ此金を持つて町へ行つてプラオやハローの如き馬耕農具を二組仕入れて來た。それから夫を牽かせる馬は、隣村に安い馬の賣物があると云ふのを聞いて、出掛けで行つて八十圓づつで逞ましい四歳の馬を牝牡二匹買つて來た。

愈々農が始まつて、馬もプラオも田や畑に出る事になつたが、困つた事には之を使ふに馴れた人が無い。仕方が無いので大和の處の男を二人頼んで、之を使はせたが、初めの内は随分危険つかしい手つきで、人も骨が折れば、馬も大汗になつて、而も仕事は思ふ様に捗らない。これでは不可ぬと長谷川まで野良に出て、彼アしろ此うしろと怒鳴り歩いた末に、漸くどうやら満足に仕事の出来る様になつたが、今度は田や畑の畦が餘り近くて、折角少し眞直に歩いたかと思ふと、直ぐ馬の鼻面が支へて、又方向を變へなければならぬので、プラオを押さへて行く男は、年中それを持上げては方向を直すので、一日仕事をすると、明日はモウ兩方の肩や腕が痛んで、迎も仕事は出来なくなつて了つた。

そこで之は田や畑の一枚が餘まり小過ぎるから悪るのであると氣が
 付いたので、中途の畦を除いてモ少し大きくしたら可からうと云ふ事にな
 つたが、困つた事には、他人の地所と入交つて、飛々に方々に地所がある
 ので、如何する事も出来ないのが多かつた。幸に五六枚も續いて大和の家
 の田があつたので、先づ此の畦を悉皆取除いて一枚の田にして耕作する事
 になつた。それで五六本の畦を一時に崩して、大きな一枚の田にするど、
 如何したものか急に水が一方に流れ出して、半分ばかりは水がカラ／＼に
 乾き、流れ込んだ方の田は滔々として水が畦を越して隣の田へ流れて居
 る。五枚にも六枚にもなつて居た時には、頓と心付かずに、平らな田だと許
 り思つて居たのが、此うして畦を取つて見ると、幾らか傾斜があつたもの
 と見えるのである。失策つたとは思つたけれども、今更何とも仕方が無い
 ので、水下の畦を今少し高くして、上の方の土を下の方へ持つて來る事に
 した。

馬を其處らに繋いで置いて、男たちは鍬や鋤簾を持つて土を掻き始めた

が容易の事では無かつた。二坪か三坪の土を掻くのにはさへ、男たちは精を
 切らした。そこへ大和が此事を聞いて出て來て、尻を端折つて這入る。石
 井が見物に來て手傳を始め。神宮寺や草村も鍬を持つて飛んで來る。長
 谷川も見て居られなくなつて、泥の中に入ると仕舞には、大和の妻君や愛
 子や照子や婢たちまでが尻捲りになつて入つて行つて、鹿髪もハイカラ頭
 も一列になつて、キヤツ／＼と笑ひさいめき乍ら、泥を下へ搔いて來る。
 道路には見物人が立つ。馬まで遠くの木の下で勇ましい聲を揚げて、田は
 春の空氣を殊更に賑かにした。

其内に照子や愛子や長谷川が先づ閉口して田から上がるど、次第／＼に
 皆な疲れて畔に出て休んだ。晴れた空に、モウ雲雀が呼子の笛を鳴らす様
 な聲して舞つて居る。吹くどしも無き春風は、人々の煙草の煙を緩く靡か
 せて亡びた村の景色には餘りに活々とした平和の象を見せるのである。
 其日は遂々此の小さな耕地整理は出來上らなかつた。翌日の晝まで掛つ
 て漸ど地均らしが出來た時、土の香を待ち焦れて居た馬は、勇ましく田の

面へ飛込んだ。進むわ、進むわ、見て居る内に廣い田は限なく鋤き返され
て、忽ちに小さな稲苗が植ゑ付けられて、緑の波を漂はしてゐる。
一同の人は皆な此美しくしい景色と抄の行つた仕事とを見惚れて、今更乍
ら耕地整理の効果の大なる事に感じたのである。小川や秋山の様な、山の
手の段々の耕地にこそ、費用も餘分に掛り土地も荒れて、整理の効果は寧
ろ少いと云よりは無益とも思はれるのであるが、夕月や朝日の様な平地に
は、割合に手数も少なく、整理の結果はドレ程耕作に便利になるか知れ
ないのである。村の財力が一時に此經費を支辨する事が出来ぬとしたなら
ば、十年二十年、乃至五十年掛つても百年掛かつて、耕地整理はしたい
ものであると、口には出さねど、居合す一同の胸には確い〜黙約が出来
たのである。

八 自然に貯金が出来て行く

馬耕機械一組の使用料は一日一圓と決められた。組合は二百日で原價を

取返へして、それで更に次の機械や馬を買入れると云ふ豫算なのである。
それを借りて耕作する組合員の方でも、一日一圓は安いものであつた。
人夫一人を雇つても五十錢や六十錢は拂はなければならぬのに、馬耕機械
では、日々少くも人間の六倍の仕事はした。それで人が一人ついても尙
は五倍の仕事が出来て、それで費用は倍まで掛からぬのであるから、經濟
の上から言つて頗る得用であつたのである。

六月の植付を終つた時には、組合にはその使用料が百圓入つて居た。一
匹の馬が平均して五十日づゝ働いて呉れたのである。一人の人夫賃を日に
五十錢づゝとして、一匹の馬が二倍の賃金で五倍を働くものとすると、差
引三倍だけは耕作人の利益になつて居たのであるから、百圓の使用料を拂
つた人は、五百圓の仕事をして貰つて、人でした時よりか四百圓の利益を
得た事になつたのである。

その内に購買部の資金も漸次裕かになつて、六月末にはモウ四百圓から
の金を運轉する様になつた。

資金が少し餘裕が出来て来ると同時に、石井は村の人を成るだけ組合に入れて、希望ある生活に導きたいと言ひ出した。それで段々に人々を説いて加入させようとしたが、始めに出資金と云ふものを出すのが馬鹿くしいと云つて、誰も加入する人は無かつた。最も出資金と云つて、十圓が一口と定めてあつて、それを一年に拂込めば可いのであるから、貧民でも如何か工風をすれば出せない事も無いのであつたらうが、何を言ふにも産業組合と云ふ思想の無い人たちであるから、現在よい實例を見て居ても、それは地主たちの爲めに便利なるもので、何にも無い我々が加入した處で、結局出資金を誤魔化される位のものであらうと、譯も分らずに疑つて居たのである。是等の人に向つては、逆も六かしい事を言つた處で分りつこないで、

「ぢや如何だね、物は試と云ふ事があるから、誑されたと思つて組合へ入つて呉れないか。資本も出さなくつても可い。唯だ組合で何でも買物をしと呉れるんだ。それで會社で賣るのより高くないと云ふ事が分つたら、奮

發して本統に組合へ入つて貰ふ。若し又品が悪いとか高いとか言ふ事があつたら、其時には組合を脱けても仕方が無いが……そうして皆さんが組合から、買つて呉れるなら、組合ぢやア儲けだけ別に積立て置いて、年の末になつて買つてくれたお客へ、買物の値段に應じて分けて上げるのだ。而してそれが皆さんの貯金になるのだから、皆さんは買物をしながら自然に貯金が出来て行くと云ふ。面白みがあるのです。」

と、説明すると、
 「そりや面白い、旨い事を考へたもんだ。」
 と、それから段々に三人五人と組合へ加入する人も出来て来た。大和や他かの發起人は此人たちの名前で各出資金の最初の拂込分を拂込んでやつて置いたのである。

各自が社會共同の力をかりて居ながら共同の精神を忘れて居るから自治は發達せぬ。

(趣味の統計表)

吾等日本人の箴とすべし
獨逸國富源十誠

- 一 如何なる支拂をなすにあたりても常に自國人の利益をてうことを念頭に置べし
- 二 外國品を購ふに際しては常に爾の國が更に貧弱の國なることを忘るゝ勿れ
- 三 爾の有する金錢は獨逸人を措て他の何人をも利するべからず
- 四 外國製の機械を使用して以て獨逸の製造場を汚すこと勿れ
- 五 外國産の食料品を爾の食卓に上すこと勿れ
- 六 獨逸製の紙に獨逸製の「ペン」と「インキ」を以て書け而て獨逸製の吸墨紙を使用せよ

- 七 爾の身體に眞の獨逸人的精力を附與するものは獨り獨逸産の麥粉獨逸産の果物及び獨逸産の麥酒あるのみ
- 八 爾若し獨逸産のモルト咖啡を好まずんば獨逸殖民地より來る咖啡を飲むべし
- 九 爾の衣服としては獨り獨逸産の布帛を用ふべく爾の頭には獨逸製の帽子を戴くべし
- 十 外人の甘言に惑はされて是等の訓言を忽せに思ふこと勿れ假令他人は何と言ふとも獨逸祖國の人民が使用すべきものは獨り獨逸國内の産物にのみ限ることを確信せよ

第十四章

一 神か佛に感謝して居る

賣新亭に奉公して居たお峰は、一旦墮胎の嫌疑で内儀や落合と共に警察に引かれたが、飽くまで其事實を否認したのと、落合一派の運動が其功を奏して、無事に放免になつてから、賣新亭で引續いて養生をして居たが、墮胎の時以來酷く損なつた健康は容易に恢復せぬのみか、平常から餘り暑さに強くなかつたお峰は、此度は一層の弱り方で、熱が來したり去いたり、夜は盗汗をビッシヨリ掻いたりする事が多くなつた。そして涼風が簾を訪れる様になつても、少しも全快の様は見えず。却つて或日少し風邪を引いたのが原因で、大變な熱が出て、擦れる様な力の無い咳をする様になつた。瘠せた面色は一層瘦せて、青白い顔は七八つの小供の様に小さくなつたのである。

枕の少し擡がる様になつた時、内儀は細くなつたお峰の顔を覗き込む様

にして、

「峰ちゃん、悪いわね。どうです。少しは良いかね。それでね、私色々考へたけれど、如何しても此處は一度、峰ちゃん實家へお歸りの方が可いわ。お父さんには妾から熟くそう云つて上げるから。」

お峰は内儀の言葉を聞くと、弱い心に早くも涙を催はして、

「然でせうか。妾お父さんに合せる顔は無いんだけれど、内儀さんが然仰言るなら歸りますね。どうせモウ長い事は無いんだから。」

「そんな事は無いけど、矢張親子だもの如何に喜んで待つてるか知れはしないわ。」

「いゝえ、妾知つてます。妾死にゝ行くんですわ。」

お峰はヨ、と泣き沈むのである。

廳て内儀は俵を一臺雇つて呉れて、それに衰へたお峰の肉體と、手廻りの風呂敷包とを載せてくれた。

「それぢや峰ちゃん、送つてつて上げるのだけれど、今日は少し手が明け

られないから、何卒お父さんに宜しく言つて下さいよ。これはホンの…何か好きな物でも買つてお喰んなさい。何れ其内にお見舞に行きますよ。」

車夫が轡棒を上げようとするとき、お峰は、

「梶を下ろして下さいな。」

と、求めるのである。車夫が一足歩き出すと、内儀は、

「ぢやアお大事にね。」

と、送つて呉れる。

「有難う。長々御厄介になりました。」

と、お峰は挨拶した。花ちゃんもお勝もお良も、友江も松枝其他の酌婦たちも、皆な軒下に立つて、

「さよなら。」

と、俵の後から聲を掛けてくれた。お峰は其聲の終つた時に、我が死に行く運命を思つて、袂に其顔を掩うて了つた。

一時間足らずに俵は春日の我家の簾に停つた。父は何處へか嘉十を伴れ

て口儲取りに出て居て、病みほうけた母が獨り納戸に小さくなつて臥つて居た。

「お母さん。」

と、お峰は其枕元に走り寄つた。

「お、お峰。」

と、母は目に涙を湛へて其細い手を薄い夜具の襟から出した。身體は起返る力も無かつた。

「お峰、汝ア苦勞したつてなア。」

と、母はホロリと涙を落した。

「お母さん、私歸つて來たの、死……」

と、云ひ掛けたが、瘦せ衰へた母の、言ひ知らぬ寂しい目の中を見ると、

お峰はモウ跡を言ひ得なかつた。

「俺もなアお峰、生きてる内にモ一度汝に逢ひたいと思つて居た……」

念が届いて……」

と、母は眼を瞑つて、神か佛かに感謝して居る。確く閉ぢられた其双の眼

の臉の間には、隠し切れぬ露の玉が、短かい疎らな睫に傳はつて、一雫、

二雫と枕に落ちて居る。

「お母さん、これから私がお世話しますから、何卒、心丈夫にして、早く

快くなつて下さいよ。」

「快くはなりたいと思ふけど、早い三年越しになるだで、所詮駄目だと

此頃ぢや諦めて居るだ。」

此う云ふ聲の下に、母に例の激しい咳に捉へられて、ブツと吐き出した

血痰の小さな塊まりを、口から古新聞紙に移して、それを枕の下に挿んだ

「見てくんな、此う血が固まつて出るだ。肺は大方無くなつたかも知れな

い。」

實に其喘々たる氣息から見ると、崩れて出る肺の實質は、口に胸の

中を空露にして居るのであらう。

お峰は我身の病を忘れて、先づ母の枕元の汚れ物を處置したり、火を起

こして母のお粥を温ためたりした。母と子の不幸の二人が、時忘れ越し方の憂き物語をしては、交互に涙を搾つて居る處に、日暮れ近く兄と父とが歸つて來た。

二 最早餘程進んでる

兎にも角にも、一度は醫者に診て貰はなくはならぬ。それに宮田醫士は情に富んで、貧民からは決して金を食らぬと云ふ事であるからと云ふので、翌朝お峰は宮田醫士が回診の折を見付けて、立寄つて診察を乞うたのである。

醫士は型の如く、體温、脈搏から胸、腹など一切を診察し終つて、

「うむ、こりや餘程モウ進んでる。」

と、獨語を言つて、

「お大事になさらんと不可い。大切な病氣です。兎も角藥を上げますから夕方誰か取りに來て下さい。」

と、立たうとするのを、父の喜助は戸口まで送つて、

「先生、何の病氣で御座んすでせう。」

と、問掛けた。宮田は、

「肺です、よく世話してお上げなさい。それから痰や唾を矢鱈の場所へ吐かせない様に、壺へでも入れて消毒するのです。消毒の藥も後で上げますから。」

と、氣の毒そうに答へるのであつた。

「え？ちやア彼も!!」

と、喜助は殆んど失神した様子。

「どうです。然しお母さんの方とは違つて未だ望みはある方ですから……」

「あゝ。」

と、喜助は宮田醫士を送つてからは、モウ明日から仕事に出る勇氣も無くなつて了つたのである。

「お父さん、お醫者様は何と言つて〜。」

ど、お峰は聞く。

「うむ。」

ど、父は行詰つた。憐れなお峰に肺病だと知らせて、所詮死なねばならぬと思はせるのは、父としても如何しても忍び難いのである。

「うむ、先生は大した事ぢや無いと云つた。」

「あら、でも大切な病氣だと云つたぢやありませんか。」

「大切な病氣だけれど、今の内に養生しないと不可いつて言ふだ。」

「然ぢや無いわ。もう妾の病氣は治らないつて仰言つたんでせう。ねえお父様、隠さずに話して下さいな。」

「何も隠しはしないだ。實際何でも無いと云つたよ。」
では、何病だと仰言つて？」

「うむ、それは……。」

「お父さん、矢つ張隠してゐるんだわ。」

「隠すもんなかな。」

「いゝえ隠してよ。妾ちやんと知つてゐるわ。妾モウ治らないんだし、三月ど生きてゐる事も出来ないんだわ。妾死に家へ歸つたんですもの。」

「そ、そんな事があるもんな。な、治る見込があると先生も言ふだ。」

「駄目よ、そんな氣休め。妾これから先生の處へ行つて聞いて來るわ。」

「馬鹿な事言ふで無いだ。薬は嘉十に取りに行かせりや可い。」
「でもお父さんが隠して居るんだもの。」

お峰は七つ八つの子が拗かる如くに泣いて拗ねた。

「そんな事言つちやア困るぢや無いか。病氣の名を聞いた處で何にもなるもんぢや無い。」

「いゝえ、なつてよ。聞かせて下さらなけりや、妾死んで了ふから可い。」

「困るなア。それぢや言ふけれどな、氣を落すぢや無いよ。」

「氣なんか落しやしないから、さ、早く聞かして下さいよ。」

「ぢや言ふが、肺が些と悪いだよ。」

「え、肺が？」

お峰は矢庭に其處へ突伏して、

「口惜しいわ。肺病になんかなつちまつて。」

と、歎歎げた。

「だから聞かせないツて言つたわ。」

と、父も慰め兼ねて目を屢瞬いて居る。

三 野蠻人の儘の無邪氣な農夫

お峰が肺結核になつて歸つて來たと云ふ事を聞いた春日の人たちは、譯も解らずに其事を評判した。

「肺病つて傳染るもんだて言ふぢや無いか。え、五作どん。」

「はア何でも然云ふ事だ。口を利いても傳染るだアし、面を見ても傳染るツて言ふだ。あんで怖ねえ病氣になつたもんだ。」

「俺ア三日ばかり前に野良で仕事してたら、お峰どんが俵へ乗つて通るのを見たわ。車ア見た丈けぢやア傳染りやアしめえと思ふだけんど如何すら。」

「何でも知んねえが、はア大變なものを見たのう。禰宜さんさ行つてお積のうして貰つたら可かんべえに。」

「やれ〜飛んだ目に逢ふだ。お賽錢損でも仕様が無え、そうして貰ふべえ。喜助どん處にやアおツ母も然だちう事ぢや無ねえかよ。」

「怖ねえ、怖ねえ、何んだら怖ねえ病氣になつたもんだ。長い月日にやア又顔を見ねえとも限らねえ、俺アはア喜助どんの方の畑にやア仕事に行かねえ事にした。」

「汝はそれで濟むべえが、彼方にばかり地所のある者ア行かねえ譯にやなんねえだから、俺閉口して了ふだ。」

「そんだら喜助どんに何處かへ行つて貰ふが可えだ。」

「と云つて俺ア言つた處で、喜助どんは肯きやアしめえよ。」

「そんだら區長さんさ行つて、區長さんに口を利いて貰ふべえ。」

「一人や二人の言ふ事ぢや、區長さんも取上げはなさるまいでのう。」

「そんだら大勢して區長さんに頼むべえよ。太三郎どんも、松右衛門さん

も、儀作さんも、皆な然言つてた、怖ねえものが、へ入つて来たで、何
どか仕てえもんだがど、皆な首を括つて居たいから、區長さんに皆なでそ
う言つて見てよ、それで肯かなきや、鉄でも鎌でも持つてつて、皆なで喜
助どんの家を叩き毀す迄の事だ。」

「だがの、五作どん、然すりやアお峰どんもお母どんも出て來べえぢや無
えか、そんな時、見ねえ譯にや行くめえかの。」

「そりや目を瞑つて叩ッ毀して、一生懸命に逃げて來たら可かんべえぢや
無えか。」

「化けて來る事アあんめえか。」

「未だ生きてるだで、まさか化けて來る事もあんめえよ。」

「ぢや五作どん、皆の衆に相談のう打つべえ。俺はア隙ア潰しちやア間職
に合はねえだけんど、之も災難だで、今から組合の衆を廻つて相談するだ
そして明日の朝區長さんさ行つて頼むだ。」

「然しべえ、俺も組合さ廻るべえよ。」

二人の無智な農夫——二十世紀の科學の光りを曾て仰がぬ太古の野蠻人
その儘の無邪氣な農夫たちは、これから歸つて其組合くを廻つて、部落
の輿論を取纏めるのであつた。そして二三十の春日區民は、翌朝ドヤ
と區長の家に押掛けた。

財産があるど云ふより外、愚昧な農民に何の勝つた處も無い區長の中川
利吉は、忽ち衆愚の愚説に雷同して、使をやつて岡本喜助一家に立退を迫
るのであつた。

立退かうとて立退かれようか。二人の重病人と一人の白痴とを擁へて、
働き手は唯だ一人、慣れた土地に居てさへ思ふ様に日傭も取り兼ねる今の
身で、他郷へ彷徨つて行つて、どう生計が立てられるものか、喜助親子は
此請求に遭つてハタと行詰つた。お峰は今更に泣くのであつた。

母は此時フト口を出した。

「お峰、汝ア太して悪いでも無いから、お父さんと一緒に何處へなり行つ
て、兄さんと三人して暮らす可え、俺は逆も助かる生命ぢや無いで……」

言ひさして喉に支へる痰をガラ／＼と音させて紙に吐き出し乍ら、
「のう喜助さん、永々お世話になつたが、どうか貴下、俺は此儘打捨つて
何處へなど行つてお峰と嘉十を頼みますよ。」
息も迫つて言ふのであつた。

「飛んでもねえ、そんな真似が出来るか。
喜助は驚いて、頓狂な聲に叫んだ。

「なに、今日も知れない身で、俺や何處へ行くも厭で御座んす。先祖代々の地所にも家にも離れて、行く處も無い位ゐたら、俺や此處で死ぬで御座んす。」

骨立つた顚顚の邊りをビリ／＼と頭はせて、母は夜具の襟に顔を掩つた。

「そうとも、何處へも行くこんぢや無え、安心して居るが可えだ。誰が何と云つたつて、此處一寸でも動くこんぢや無え。」
父は肩を聳かしたが、顔は恐れに戦いて居た。

そこへ外から訪なふ者があつた。誰も彼も恐れて寄付かぬ有様であるのに、誰が又何しに來たど、お峰は怖々上り口に顔を出すど、
「あら先生！」

桑田照子が宮田醫士の話を聞いて見舞に來て呉れたのである。

四 融通の利かぬ組合では無い

照子は歸つて來てから、岡本一家の慘狀を具に大和に物語つて、如何して彼れを救つてやりたいと言ひ出した。

「もし彼を救つてやる事が出来すなら、妾の上どんな事でも致しますが、大和さん、何とかならないもので御座いませうか。」

「それで立退きまで請求されてると云ふんですね。」

「え、全く可哀相なんで御座いますよ。行く處もないのに、春日の人は薄情ぢや御座いませんか。それでね、お母さんは死にかゝつて居るのですから、追出される位ゐなら首を縊つて死ぬつて言ふんですよ。」

「成程、氣の毒なもんですな。それを助ける事が出来ると、組合の信用も増すと云ふもんですから、出来るものなら救つてやりませう。兎に角草村君や皆な相談して見ませう。」

「え、何卒そらなすつて下さいまし。」

大和は翌日皆な集まつた時に、此話しを持ち出したのであつた。長谷川は聞いて、

「あア岡本ですか、私が駐在所に初めて居た時から随分残酷な生計をして居ました、そんなになりましたかなア。」

と、嘆息した。石井は、

「助けてやりたいですね。が其方法は如何すれば可いか、産業組合として定款の上から救助の法は無いでせうか。」

と、難かしい顔付をした。

「助けてやりませう。定款には明文が無くとも其位ゐの融通が利かぬ位ゐ非常識の組合では、組合存立の價値が無いです。信用部で助けてやる事に

しませう。」

と、草村は断然決心の色を示した。

「どうぞ何とか願ひますよ。」

と、照子は嘆願する様に言つた。

「組合の力を村の者に見せる好い機會ぢやあるまいかと思ふんですが。」

と、大和は附加へた。

「勿論です。どうか私に任せて下さい。」

と、草村は益々決心を示すのである。

石井と草村は春日へ行つて、村の人に餘り冷酷な事を言はぬ様に頼んで暫らく立退の請求を緩めて貰ふ事にした。そして岡本家の借金を調べて見ると、米屋の借金が七圓計りと、醫者の藥禮が二十何圓と、味噌醬油の類の借が三圓なにかし、近所の人に融通して貰つた古い負債が元利を合せて三十八圓五十錢、それから地代の滞りが三年ぶりで六圓であつた。それを草村は奔走して、米屋と味噌類の借は拂つてやるし、藥禮は宮田の方で快

よく皆な帳消にして呉れる。近所の債主と地主には事情をよく話して、今日以後は無利息として貰ひ、それを年賦で返済する事にした。貸した人達はモウ到底取る見込が無いと諦めて居たのが、草村の盡力で取れる事になつたので、大層喜んで、苦も無く承知したのであつた。

それからお峰とお母の爲には、宮田醫士が隔日に見舞つて、永久に薬は無代で呉れる事になり、喜助と嘉十は、冬中は清水市と明星村の間を通つて組合の荷物を運搬させ、春になつたら草村の田地を反歩十七圓の小作料で五反歩貸して耕作させる事にした。

全體小作料は是迄皆な米で納める事になつて居たが、組合の人々の考へでは、米で納めると、取扱が大層面倒で、其上小作人の利益を減ずる事が多いから、如何しても金納制度にしなければならぬと云ふのであつた。それで草村は率先して、岡本喜助の爲めに一番低い割合で之を實行したのである。

五人の不幸を救ふ此世の神様

母は此事の決つたのを聞いて、大變喜んで、餘りの悲みや喜びに其心を使つたので、其晩俄かに容態が變つて、曉前には既に冷たい骸になつて居た。お峰は勿論、喜助も心の無い嘉十まで泣いたが、漸と心を取直して草村や照子の世話になつて、寂しい野邊の送りを済ませた。

それやこれやが終つてから、豫定の通り喜助と嘉十に毎日組合へ通つて来て、車を挽いては町と村との間を往復した。頭腦こそ役に立たないが、力業では嘉十は普通の人間と同じ仕事が出来るので、父子は二人前の賃金を貰つて、日々一圓づゝ手に入るので、以前よりは見違へる様な生活をす

る事が出来た。それにお峰は無代の薬を貰つて居るのであつたから、親子三人は、此の取る金の半分もあれば、如何やら生活が立つて行くので、一月二月と経つ内には、三十錢四十錢の貯金が溜つて二十圓計りの金を組合に預けてある様になつたので、此内で組合の出資金の一部を拂込む事にし

て、それから米も味噌も總て組合のを買ふ事になつた。組合から物を買ふと成ると。一つ買へば買ふだけ、それだけ貯金が殖えて行く。それは組合では町で賣る値で賣つても、儲けは組合に取らずに、總て組合員に分配する事になつて居たからである。

よく世の中の人には咽元過ぎて熱さを忘れると云ふ事を言ふが、岡本喜助は少し生活がラクになつたからと云つて、直ぐ昔の貧乏を忘れる様な男では無かつた。一方では一心に儉約をして以前の様な身代に立歸りたいと云ふ望みを起すと同時に、よく大和組合長を始め皆々の恩を記憶して、組合の徳を逢ふ人毎に談つて聞かせた。自分たちが一家擧つてモウ死ぬより外に道は無いと思つて居た時に、救つてくれたのは組合である。組合は人の不幸を救ふ此世の神様である。姿も見えず形も無い神や佛に御祈禱やお願ひをするより、此の現在目に見えて居る組合と云ふ神様にお縋り申せば、御利益は靦面である。誰でも直ぐ其徳を受ける事が出来る。其生きた證據は自分であると、熱心に村の人に組合へ加入する事を勧めて居た。

「神様だら、お峰さんの病氣も治すべえ。お峰さんの病氣は誰でも治らぬえ肺病だと云ふだが、これが治せぬえ様な神様ぢや、俺ア信神が出来ぬえだ。眞に神様だら、お峰さんの病氣も治してくれるだ。」

と、村の人は未だ組合を疑つて居た。喜助は、「治してくれませう。追付けお峰も丈夫にして貰へるだ。」と、信じて居る様な口吻で言つた。

「お峰さんが治つたら、俺も組合へ入るべえよ。彼のお峰さんの肺病が治る位むだら……如何な神様にお願ひ申しても治らぬえ肺病が治る位むだらそりや喜助さんの言はしやる通り、傑え神様に違え無えだ。」

と、無智な村民たちは未だ組合の價値を見分ける人は一人も無かつた。大和や外の人たちに勧められて、詮方なしに入つて居る人たちも、別に取立て、香ばしい事も無いので、心の底では脱退たいと思つて居る人さへあつた。

寒さが追々烈しくなつて、空氣が乾いて來ると、お峰は段々多く咳をす

る様になつたを、一寸風邪を引いたかと思ふと、もうドツと寝込むのであつた。喜助は床に就いた娘を一人置いて稼ぎに出る事が出来なくなつた。岡本家の破滅は又襲つて來たのである。

「それ見た事か。組合の神様もアテにやならぬえ。」

近所の人々は嘲けた。宮田醫士は此様子を見て、こりや此儘にしちや置かれぬと思つた。此儘にして日を過せば、第一に岡本の家は又以前の様に貧乏になつて、一家は自殺でもするより外なくなる。第二に無智な人たちでは看護の手が届かぬから治くなる者をまで死なせて了ふ虞れがある。この二つの理由から、宮田は色々考へて見るのであつたが、結局これは自分の家へお峰を引取るより外に方法は無いと考へ付いた。それで喜助に此事を話して、その通り直ぐ實行するのであつた。

宮田がお峰を引取つたのは他にも未だ理由があつたので、それは宮田は豫てから肺結核療法に就いて、一種の意見を懐いて居る。その意見を實地に

に驗して見るのは、斯様な機が一番都合がよいと思つたので、それで多少の費用を惜まらず、お峰を我が醫院に引取る事になつたのである。

六 不思議な病室

宮田醫士の屋敷は畑續きの小高い場所で、面積も随分廣く、家の背後には百坪餘りの松林が茂つて居た。今職人が入つて松の木を三四本切倒して四五間四方の空地を拵らえて居るが、何か此處に家でも建てるのを見えて、板や材木が其傍に積み重ねてある。患者が一寸隙いた間でもあらう。診察衣のまゝ庭下駄を突掛けて裏から出て來た宮田は、ニコニコしながら職人の方を見て、

「御苦勞、もう地が出来たんだね。では建物は此處へ此うして……中へよく日がさし込む様に、北の方を高く……そう、二間の柱を立てるのだ。それから南の方は一間の高さに、奥行が一間に間口が九尺で。」

と、暖かい日を兩方の肩に浴び乍ら熱心に指揮をして居る。丁度その時藥

局の書生が、

「先生、患者が参りました。」

と、呼びに来たので、宮田は家に入つて行つたが、後で職人たちは大きな聲で話をして居る。

「如何だい、此處に居ると丸で冬は知らねえ。見ねえ、北は塀と松林で、寒い風はソヨとも来やしねえんだ。時に由公、この家や何にする積りで建るんだか知つてるかい。」

「大方肥料でも入れるか、花でも作るだんべえよ。俺ア清水の農事試験所の仕事に行つたが、其處の促成栽培のフレームとか云ふ箱が此通りだア唯だ高さは之よりか低いけれどなア富吉。」

「そうだ、温室の代りにでもするすら。」

「は、それぢや落第だぞ。肥料でも無きや花でも無い、人間様を入れる病室だ。」

「何、病室だ。冗談言つちやア不可え。こんな狭苦しい處へ入れられて、

お溜り小法師があるけえ。」

「ところが有るから不思議さ。院長さんの考へぢやア、肺病は此う云ふ家で、日光によく當つて、善い空気を吸つて、旨い物を食つてりやア、どんなんでも必と治ると云ふんだ相な。それで之を建て、試して見なさると云ふんだ。」

「ぢやア峰ちやんが入るだかい。」

「然だど云ふ事よ。可哀相に、切めて氣をつけて鉋でも丁寧に掛けてやれよ。」

「は、大きに然云ふ事にしよう。」

職人たちの無駄話と共に早くも建前は始まつた。土臺を掘る土方、柱を立てる大工、藁を括り付ける人夫、やがて其日の夕方には早や此新病室は落成を告げたのである。

「御苦勞〜。」

と、又宮田は夕飯前に検分に出て来た。

家は總面積が一坪半で、北の羽目と東西の羽目の中程までは厚さ二尺ばかりの藁の壁で張り詰められて居た。外から見ると丁度稻村の大きなのゝ様に見えて極めて無格好であるが、南側の隅に設けられた硝子戸を開けて中へ入つて見ると、中は藁がキチンと拵へて刈込んであつて、丁度葺立ての茅屋根の様に塵一片も留めて居ない。床は根太を五寸ばかりの高さにして、其上に一尺の厚さに草を敷き、其上に新しい畳が二疊半だけ敷かれ半疊は西南の隅が入口の土間になつて居る。見れば南側と東西の兩側各三尺は、土から上二尺が腰板になつて、其上は總てが硝子障子になり、屋根も北側半分は亞鉛葺であるが、棟から南は温室の様な硝子張りで、蝶番ひが棟木に付いて居て、南の端を自由に上げ下げせられる様に出來て居た。そして其の硝子屋根は十分締め切つても鳴居と屋根との間に未だ一尺程の空がある様に出來て居た。

「これで上等、光線も空氣も申分なし。是れで滋養分をウンと食はせる。夜も新鮮な空氣が自由に入つて來るが、身體へは直接に當らぬから温かい

事此上なしだ。まづ之でお峰さんの生命も捨つたといふものだ。」

と、宮田は跡へついて見に來た書生を振返つて、「ニコ〜獨語を言つて居る。」

「安いもんだ。四十圓でこれだけのものが出來るんだから。こんな理想的なものがある。」

と、宮田はソロリ〜母屋の方へ返つて行つた。

七 富の極點と貧の極點

信託會社明星支店では、本社ほんしやの資本しほんの大きいのに任せて、盛んに業務の擴張を行つたのであるが、その業務擴張が又大いに當つて、日に月に會社の手に入つて來る明星村の富は、殆んど磁石で鐵屑を吸ふ様であつたので會社の支店は何處までも何處までも、其擴張發展の方針を延ばすのであつた。先づ清水輕便鐵道を明星村朝日に終點を置いて、明星村の產物一切を吸收すると同時に、其隣村の花澤村や平山村の富を吸收しようとした。明

星と花澤の奥から出る材木や蜜柑なども、唯だ其一手に占めようと試みた。そして其計畫は着々成功して、遂には他の一の競争相手も無い迄に進んだ。それから明星花澤の兩村は勿論、鐵道沿線の村々の小賣業を一切併呑して、デパートメントストアを経営しようとして企てた處が、それも見事に思ふ壺に嵌つて、今は賣るも買ふも、與ふるも奪ふも、總て會社の自由自在に、殆んど村々の死命を制して了つたのである。殊に明星村は會社の支店の所在地だけに、一つの遺漏も無く、會社の手は上の端から下の隅まで行渡つて、村民は會社の憐れみを乞はずには生活も出来ぬまでになつたのである。

會社は此の大得意に乗じて、魔王の如き威を村民の生活の上には揮つた。有らゆる手段、有らゆる方法で、村民の財布を搾り上げた。村民は最早抵抗する力を持つて居はせぬ。命せられるが儘に高い品物を買ひ、言ふが儘に無法な賃錢を拂つて、そして死ぬ様なミジメな生活をした。この盛大な光り輝いて居る素晴らしい權力を見て、其暴虐に倣つたものは、第一は地主と云ふ悪魔であつた。第二は村役場と云ふ無頭の怪物であつた。そして是

等の三個は、始め思ひ／＼に生きてる人を虐げて居たが、果ては一團となつて——會社が地主になつたり、會社の主任が村長になつたり——そして思ふさま協同せる資本の暴力を見せてくれた。

其結果は如何であつたらうか。村民は見る見る貧困に陥つて行つた。零落した。食へなくなつた。最後の反抗をした。憤激した。自殺した。争闘した。そして或者は縛られて牢屋に送られた。或者は病の床に倒れた。或者は村を出奔した。或者は出稼ぎした。残つた者は意氣地の無い者か、弱い者ばかりになつて了つた。

併し資本の怪物は、それでも未だ魔の手を緩めない。搾つて、吸つて、食つて、村も人も滓にして了はなければ承知しなかつた。そしてそれは長い後の事では無かつた。今その時が来たのである。會社の賣店には美しくい呉服が燦爛として咲き亂れた花の如くに陳列してあつた。そして村民は荒布の様に破れて縞も型も分らなくなつた様な着物を着て居たが、一人も此美しくい呉服を買はうとする者は無かつた。會社の賣店には又滋養に富

んだ食料品やら芳香馥郁たる飲料水があつた。村民は瘦せ衰へて今にも死にそんな元氣の無い營養不良の顔色をして居ながら、一人も此美味しい物を買ふ者が無かつた。會社の鐵道は清水市と明星村の間を日に何回となく往復して居たが、乗客は日に益々減少して來るし、貨物は殆んど無くなつて了つた。そして重い荷を小さな車に乗せて、エッチラオッチラ率いて行く筆々の年寄や、杖に縋つて辛くも旅する病人などを、其鐵道の沿線に見るのであるが、その人等は自分の勞力を減らす爲めに鐵道の便を借りようとは曾て思はぬのであつた。會社の人たちは大に之を怪んだ。そして之は屹度「明星村報徳産業組合」の煽動に違ひないと、組合に對する惡意と敵意のみを強めて居た。

けれども之は飛んでも無い見當違ひの推量であつた。村民は搾られ吸はれた揚句、最早今日では一滴の吸はれる露も無い様に枯れ萎びたのである。着物が破れても、食物が粗末でも、新らしいもの爲めになるものに代へる事は、全く出來なくなつたのである。打つても叩かれても、此上には一滴

の血も出ないまで乾涸びて了つたのである。

資本の破滅が來たのである。富の極點が貧の極點に一致したのである。丁度蚊か人間の血を腹一杯吸ふと、その満腹の血の爲めに身體が動けなくなる様に、又北海道の熊が乾數の子を食ひ食つて、終に腹が破裂して死んだ様に、富は富それ自身の發達満腹の爲めに、今やそれ自身を亡ぼさねばならぬ時に到達したのである。食つては瘦せ、食つては瘦せる脾肝病者の様に、今はその食ふ事を止めるより外に、會社の助かる道は無くなつたのである。併し主任の落合も其他の人も、そこに氣の付く様な道理の眼は開いて居なかつた。

八 冒險的の一大競争

信託會社が猜疑の目を以て暗に其發達を妨害したにも係はらず、報徳産業組合は一月一月に大きくなつて、翌年の三月には、組合員は五十人になり、資金も二千圓餘に増して、新らしく馬耕機械や其他農具を幾組も買入

れた。荒れて居た田畑は次第に鋤返されて、耕作は倍々進んだ。他村へ出て居た農民でそろり〜と返つて来る人もあつた。

宮田醫士の熱心な治療を受けたお峰は、彼の新發明の治療室へ收容せられてから、メキ〜と快さを覺えるのであつた。寒い日には硝子越しに室一杯の日光を浴びて、心任せに起きたり寝たり、暑ければ室の隅の齒車一つ廻はせば、硝子屋根も上がるし、カーテンも引けるし、それから又硝子戸全體を開け放す事も出来るのである。お峰は此處に居て。天氣のいゝ時には直ぐ前の小さな花壇に花を植ゑたり、鶏を二三羽飼つてそれに餌をやつたり、小さな毬をついたり、編み物をしたりしながら、有りどあらゆる滋養物を宮田醫士から與へられて居た。それで、寒風が吹き止んで、ソロソロ風が東に廻る頃になると、もう咳も止み、痰も止まり、熱さへ三十六度八分位ゐるに下つて、頬の肉も幾らかづゝ増して來たのである。もう通常の人と餘り變りも無くなつたので、宮田の勧めに従つて、お峰は少しづつ藥局の方へ出て、藥の調合法や名前を教はつたり、看護婦の仕事を見習つ

たりして居た。

此うなると氣力もついて、グン〜快くなつて來るのが目に見える。蒼かつた顔に血の氣が上つて來て、十六の娘の若々しさが又その眉の間にホノ見え初た。目の縁のドス黒い斑紋は消えてポツと赤味がさして來た。薄い生際に新らしい短かい毛がソク〜生え出した。今迄恐ろしく目立つて居た頭が段々に兩方の頬に埋まつて短かくなつた。ゲッソリと兩肩が落ちて鎖骨ばかり現はになつて居たのが、首の廻りが肥ると同時に見えなくなつて來た。そうして身體ばかりか心も活々した調子が付いたと見えて、折々はサモ面白そうに藥局生や看護婦と笑ひ興じて居るのを見る様になつた。五月になると、宮田は改めて數回に渡つてお峰の全身診斷と略痰の檢査鏡検査をしたが、多幸なるかな結核菌は遂に見るに由なかつたのである。さしも難病不治と稱せられた肺結核の全治と聞いたとき、お峰は天に歡び地に喜んで宮田醫士の恩を謝した。父の喜助は氣も狂はん許りに雀躍したが最も驚き最も感じたのは、春日の人たちであつた。無智にして單純なる

彼等は、肺病となつたが因果決して人は回生の幸を得る事は出来ぬものと確く信じて居たのであるのに、お峰は遂に此確信のレコードを破つたのである。神の業であらうか魔法であらうかと疑つたのも、蓋し無理ならぬ次第である。彼等は此萬能力ある宮田の前に蹲いた。そして宮田醫士と其同志との組織する報徳産業組合の威力に全く屈服して、續々として之に加盟を申込んだ。組合員は忽ちにして百二三十戸を増した。そして組合は凡そ四千圓の資本を擁して、肥料の共同買入、食物衣服日用品の小賣、産業資金の融通、農産物の共同販賣、田畑の共同耕作などを行つた。

此成行につれて、さらでも振はなかつた信託會社の明星支店は一大打撃を蒙らざるを得なかつた。賣店の賣上高は益々少なくなつた。買出しは一向思ふ様に賣放す人が無くなつた。此有様で進んだなら、會社の支店は遂に閉店する外ない趨勢になつたので、落合は茲に畢生の勇を揮つて、一大冒險的の競争手段に出たのであつた。

會社の小賣値段は米麥、雜貨、呉服、日用品、何でも半値で賣出される

事になつた。そして三十錢以上買つた者には景物として輕便鐵道の無賃乗車券を一枚呉れた。貧乏に艱んで居る村民は景物と聞けば目が無い、出来るだけの工面をして、必要で無い品まで買ひに出掛けた。果ては報徳産業組合の組合員まで、組合の規則を破つて、隠れて盛んに其方へ買ひに行く始末となつた。其結果として、組合の品は俄かに賣れなくなつて了つた。大和組合長を始め他の理事達は頻りに此趨勢を食止めようと努めたけれども、未だ組合の精神をよく知らぬ、そして無智な組合員には何と云つても駄目であつた。詮方なく組合も非常手段として其競争に應じて、茲に劇しい戦争が開かれた。

組合が半値に下げると會社では三分の一に値下をして賣つた。組合が仕方なく又之に應ずると、今度は殆ど無代で賣つた。競争を二ヶ月の豫定で其間には四千圓を投じるのだと會社側は言つて居るか、僅か半月の内に報徳産業組合は早や二三百圓の損失を招いた。僅かの資本では到底やり切れぬ事になつて來たのである。

それで組合の内部に議論が起るのであつた。一つは何處までも此競争に應じて此處暫らくの損失を辛棒して居れば會社も早晚競争を断念しようと思ふ説で、一つは報徳産業組合として營利會社と競争するのは法の精神にも反するし不見識極まる。それに先方は莫大な資本を持つて居るのであるから、此儘競争を續けて行けば、組合は破産より他無くなる。だから此際はモウ競争を断念つて、暫らく時機を待つ事にしようと思ふのである、此二つの議論は何方にも相當の理窟があつて、甲論乙駁、なか／＼果てしも無かつたのである。

此時丁度、先頃來、本村の特産物たる蜜柑茶等の販路の擴張と又水力電氣事業等の視察を兼ねて、東北地方から北海道樺太方面へ旅行して居た石井顧問が歸つて來た。そして組合が信託會社と競争して少なからぬ損失を招き役員間に紛争さへ起きて居る有様に驚かされた。

産業組合が營利會社と競争するのは、組合法の主義精神に反することであつて、組合自身にとつても此位い危険なことではない、然るに斯ういふ事が出來たのも畢竟自分の指導が日頃行届かなかつたからの事であると大いに耻もし其不覺を切齒したが、時を過ぐれば過ぐる程組合の損害は尙ひどくなるので、急に其前後策を構せんがために役員會を開き臨時總會を開かんとことを要求した。

臨時總會は開かれた。組合員は何れも不安の顔をなしつゝ參會した。其出席者は凡そ百四五十人計りであつた。

大和理事長は今回、各地旅行中なりし石井顧問の歸村されたるを幸ひに本日臨時總會を開催したる次第を述べ、次に石井顧問は今回の出來事たる要するに指導員たる自分が不明の致す處なりとて只管陳謝し、今後は各自一層相警戒し互に慎重なる態度を持して、苟くも再び敵の計畧手段に乗せらるるが如き輕舉に出でざる様組合員各自に警告し、其の前後策としては此際脱退する人は遺憾ながら脱退させても、組合の眞精神を了解する人ばかりで堅實に固めた方が、永遠の爲めに得策であると思ふ意見を述べた其意見が遂に組合員多數の賛成する處となつたので、斷然組合は競争を打切

る事になつた。

臨時總會が開かれた結果、組合は營利の目的では無く、組合員永遠の利益を考へて居るのであると云ふ事を組合員一同に了解させる方法を取つて、それからからは賣品は一切元の通りの定價に復した。それで眼前の利益に目の眩んだ組合員の一部は、續々として組合を脱けて、組合員は又五十人許りに減じて了つた。

會社では組合を全滅させる方針で競争を始めたのであるから、中途で組合が競争を断念したと聞いて、寧ろ意外に感じて失望した。けれども、百何十人と云ふものが脱けて、組合員は三分の一に減つて了つたと云ふのを切めての持みにして、此上は更に一人も残らず脱退する遙に誘惑してやらうと、半値賣却を尙は續けるのであつた。

併し、組合に残つた五十幾名は、そんな目前の利益に付く様な輕卒な先の見えぬ人間では無かつた。會社が今安く賣るのは後に大に高く賣る爲めの用意である事を知つて居た。漁夫が鯉を釣る爲めに鱒の撒餌をするのと同じ意味であると云ふ事をよく承知して居た。それで三月経つても四月経つても、後は動かざる事巖の如く山の如くであつたので、會社も遂に千圓餘りの損失をして、競争を止めて了つた。

九 蛭が十分に人の血を吸つた様に

歳暮大賣出しとか中元大賣出しとか言つて、方々の商店が樂隊で囃し立てたり、提灯や旗で美々しく飾つたり、景品附きで賣出したり、すると世間の人はツイ其景氣に釣られて、さまで必要で無いものまで買込むものである。それが又實際必要である物でも、少しづつ餘分に買込んだり、早く買ひ溜めたりする事が多いものである。信託會社の大割引賣出しも丁度こんな工合で、賣出し中は毎日店頭に人の山を築く様な大景氣で、輕便鐵道にも盛んに乗るお客があつたのであるが、さて賣出が終ると、丁度今迄赫々と熾つて居た炭火が灰になつて音もなく崩れる様に、店頭は急に寂然閑として了つた。輕鐵も日に一人か二人のお客になつて了つた。會社が賣出

中の損失で財布に疲勞を覺えた様に、お客の方でも出来るだけ工面して必要に迫つても居ない物まで買ひ込んだ疲勞を、シミムと財布に感じたもう買ふにも財源が盡きて居る。工面の精力も盡きて居る。需要の慾望も盡きて居る。死んだ様な静けさが明星村全體を襲うたのである。

會社の小賣店は開いてあるけれども、買ひに行く人は無い。會社の輕便鐵道は運轉して居るけれども一車に五人とお客は無い。報徳産業組合の購買部も殆んど休業同様である。創立滿一年の今年の二月には、洋々たる希望を懷いて日に盛大に向つた組合も、哀れ半年後の其秋には、孤城落日、殆んど又起つ可らざるかと思はれるまでに、業務が沈衰した。もう此村は如何しても蘇生する見込は無い。購買力を恢復する時は再び來さうに思はれない。信託會社の賣出は遂に鎖された。輕便鐵道は其運轉を休止して、明星支店は清水市の本社に引揚げた。丁度蛭が十分に人間の血を吸つてポロリと離れ落ちる様に、會社は明星村を離れ去つた。大正三年は寂しい寒さの裡に、此うし暮れて行くのであつた。

第十五章

一 曙光

會社が倒れると、モウ「報徳産業組合」で買ふか、他村へ行って買か、この二途だけになつて了つたので、村の人は一軒二軒、次第に又組合に入りたいと云ふ者が出来て來た。併し加入金や出金資が出来ぬものが多いので、夫は組合の理事や監事の人たちから一時立替てやる事にして、大正四年の二月、創立滿二週年と云ふ時には、組合員は三百人に殖える事になつた。併し組合の幹部の人たちの意見に依ると、會社が營業を斷念して居る今は組合の擴張に最も好い時機であつて、此際を外しては好機は再び來らぬ八百戸の村に就て二百や三百の組合員では實に心細い至りである。村の改良は二百や三百の組各員の力で出来るものではない。一人残らず組各員にして、そこで始めて一致の仕事が出来るのであるから、こゝで何とか大に組合員を勧誘したいものであると云ふのであつた。これが爲めに理事會が

開かれて、様々に組合の発展策が講せられ、遂に次の様な廣告をする事に評議が一決した。

緊急廣告

常組合に加入した明星村民は左の大利益を受ける事が出来ます。

一、肥料を買入れるのに安く買はれます。

二、小作料と肥料代を差引いて一年百圓の儲けが無かつた場合には、組合は其人に百圓を差上げます。

三、土地の無い人には土地を安く借りる周旋を致します。

肥料代の無い人には肥料代を貸して上げます、暮しの出来ぬ人には秋の收穫まで生活費を貸します。

早く組合員におなりなさい他へ出てゐる人は早く歸つて農業をお始めなさい、明星村は之から新らしく村を建て直すのです。

大正四年二月

明星村報徳信用購買販賣生産組合事務所

この廣告は随分思ひ切つたものであつた。組合長の大和も、理事の草村も神宮寺も、この廣告を出す時には、モウ其財産を全然投げ出す覺悟をして居たのである。

此の必死の覺悟を包んだ高價の犠牲は、村民から驚きを以て迎へられた。驚きと云ふよりは寧ろ不思議の眼で迎へられたのである。久しい間の苦しい生活に良心を爛らして、猜疑や嫉妬の心ばかり増長させた村民には、此至誠の言葉は、實際に有り得べからざる、餘りに旨き詐欺的の甘言どしか聞き做されぬのである。

もう瞞されるのは御免である。會社に瞞され、隣の人に瞞され、今では家内同士ですら經濟上の事では瞞し合つて居る不實の村に、そんな牡丹餅で叩かれる様な旨い事がありやう譯が無い。これも亦旨い事を餌にして、何か村民を搾る積りであらうと、これ程の誠意をも中々酌んで呉れる人は無いのである。組合の石井顧問も理事監事の人たちも、これには殆んど手の付け様も無く、あゝ天命かど、空を仰いで長大息する外は無かつた。

此時宗泉院の住職大月得珠は突然村へ現はれた。朝日の或家へ訪れて、『お宅では何故報徳産業組合へお入りなさらぬ。』

と、訊いた。都合があつてとか、金が無いからとか答へると、それは斯うすれば可い、彼すれば可い、何處までも親切に説明した。そして其主人がでは明日にも入る事に致しませう。』

と、言ふと。

『明日と云はず、今日これから行つてお出でなさい。』

と、イツカナ承知しない。そして其家の主人が組合へ出て行くのを見送つて、満足して其家を去つて、次の家に行くのであつた。

若し主人が不在でと云ふ様な事でもあると、得珠和尚は幾日でも毎日其家を訪れて行つた。風が吹いても雨が降つても若し檀家の佛事などがあつて日中暇が無いと、夜になつて出掛ける事もあつた。そして一日に五人以上の組合員を作らぬ中は、どんな事があつても寺に歸りはしなかつた。夜が更けて人が寝て居れば叩き起して説き付けた。

日として得珠和尚の姿を村の道に見ぬ日は無かつた。朝日から夕月へ、夕月が済むと小川へ、小川から春日へ、春日から秋山へと、一日の休みも無しに出歩いた。

『やア今日も自動車を通る。』

と、村の人は和尚の精根の良さと脛の強さを『自動車』と綽名して、半ば嘲り半分感じて言罵つた。

『今日は未だ自動車が通らないぢや無いか。』

『うむ、今朝早く一回見えたが、もう二度目が廻つて来そうなもんだよ。』
など、此綽名の治ねく全村に通用する頃には、お蔭で村民は一人残らず報徳産業組合の組合員になつて居た。

『自動車』の功績を組合では深く感謝して、或日大和組合長は組合を代表

して宗泉院へ謝禮に赴いたのであるが、和尚は唯笑つて、

『お禮を受ける様な事ではありませぬ。』

と、一向手柄らしい顔もしないのである。

何處へ行つても餘り香ばしい事も無い出稼人たちも、次第に村の改革を聞傳へて、歸つて來るのであつた。此機を逸せず、石井は傳道者の本務として、各大字を盛んに遊説して、自治體改善の必要から、その改善には「道徳と經濟」の併進の必要ある事をば、嚙んで啣める様に説き示した。流石頑迷愚鈍の村民も、今は漸くに其永き眠りから覺めて、心底から石井の論に耳を傾ける様になつた。

丁度この時、豫て村内五區の人等から夫々裁判所へ出訴してあつた共有地所有權確認の訴訟が、村民側の勝利になつて、今迄我物顔して居た朝日の平山、夕月の古橋、小川の今田、春日の中川、秋山の中畑向後等は濫々その土地を村民側に差出さなければならぬ事になつた。五區の村民は其新たに我物となつた山林百町歩畑九十三町歩を、報徳産業組合に任せて經營する事となつた。

これに勢を得た組合長以下は、六千圓の資本金を以て益々力を盡して奮進するのであつた。が茲に一番困つたのは、小作人に貸してやる安い地所の少ない事であつた。

大和も草村も神宮寺も、それから樋口要一の様な組合の精神の善く解つて居る地主たちは、組合の希望して居る低い小作料で満足して喜んで貧民に貸してやるのであつたが、多くの地主は組合に加入して居るものでも、大抵は昔の無法な小作料の反歩四俵五俵と云ふのを忘れ得ないで、如何しても之を低める事を承知しない。中には草を生やして荒らして置よりは可いからと云つて、當分割引を承知する者もあつたが、又中には草を生やしても關はないから、負ける事は出來ないと云ふものもあつた。此う云ふ連中に遭つては組合も如何ともする事が出來ない。と云つて、折角組合の手に絶つて幸福な生活をしたいと云ふ貧民たちに、土地を與へぬ事も出來ぬので、組合では出來るだけ地主に勸めて三俵どまり位にして、村民には馬耕道具を使はせて成るだけ広い地所を耕作して、副業をも盛んにして、收支の償ふ様な方法を立てゝやつたのである。

その年組合で扱つた肥料の買入高は四萬圓に上つた。その資金は半ばは

農工銀行から一時低い利で借入れたのであつたが、例に依つて三割以上も安く仕入れる事が出来たので、一萬二千圓は組合員の所得として、組合の資本に足されるのであつた。

二 千萬無量の感慨

『報徳産業組合満三週年記念式』と書いた紙札は、大和宗八の家の低い門柱に貼付けられて、國旗は勢よく日に輝いて居る。今朝から役員や事務員は忙がしげに出たり入つたりして居たが、お晝頃にそれが片付くと、ガラガラと六臺の人力車がその門に停つた。俥から初めに下りて来たのはフックコートに山高帽子を被つた、五十恰好の肥つた官員らしい人々で、それに續くのは、同じくフロックを着た當郡の郡長、それから縣廳勸業の屬官らしい人と、若い郡書記二人であつた。大和組合長は飛んで出て、恭しく一同に挨拶して、廳で大廣間の式場へと案内するのであつた。式場は座敷から客室居室までを打抜いて、床の間の前に三脚の机を据ゑ

それに幾脚かの椅子を添へて、來賓の席に充て、正面の床間には石摺の大きな『報徳訓』の軸が掛られ、前の机には大きな花瓶に白梅の枝が生けられて、根締の水仙と共に床しい香りを放つてゐる。

やがて大和組合長は花瓶の傍に立上つて一場の演説を試みるのであつた。來會者は拍手して之を迎へた。

『今日は當組合の満三週年に當りまして、聊か記念式を催しました處、皆様の御賛成を得まして……殊に御多忙中をも顧みず、お寒い處を、遠路知事閣下並に郡長様の御臨場を頂き、且つは我産業組合中央會よりも遙々副會頭閣下の御來臨を恭く致しまして、面目身に餘る次第で御座います。』

と、來賓の方に一禮すると、會衆は一時に拍手した。
『さて、當組合の過去に就きましては、實に多難多難のものが御座います。私共は幾度倒れようと致したか、實に今思ひ出しても、よくまア今までやつて來られたものだと思ふ位であります。幸に天祐と組合員及組合役員との協力に依りまして、此春以來次第に順調に向ひ、今日では御承知の

通り最早確固不動の基礎を据ゑる事が出来たので御座います。一通り昨年中に於ける組合の成績を述べますと、購買部で取扱ひました品物の延金高は約十四萬圓、この内の重なる物は肥料で御座いました。販賣部で扱ひました高は四十萬圓、この内の重なる物は無論米であります。それから生産部では農具、工場、土地などを用意して居りまして、其使用料が三千餘圓、信用組合の貯金は現在三萬八千餘圓、貸出は三萬餘圓で、これは何れも産業の資本になつて居ります。是等取扱金高の内、組合の純益即ち剰餘金は約五萬圓に達して居ります。當組合は今後尙ほ業務を擴張して、飽くまで明星村の恢復を圖らねば止まぬ決心であります。否、衰へたる明星村を『理想の村』にする迄は斃れても止まぬ決心であります。それにつけても我が村民及び本組合の最も忘る可らざる恩人は、此席に居らるゝ所の本村顧問石井洋先生であります。本村が疲弊の極に達して、殆んど恢復の望みの無かつた時に、先生は偶々本村を過ぎられて、慨嘆措かず、本村の爲めに其長き生涯の前途を抛つ御決心を成されまして、本村に定住し、有りと

有ゆる衣食の缺乏困苦を忍耐されて、遂に本村及び本組合を今日の光輝ある成績に導かれました、是れ偏へに先生の愛他心公共心の然らしむる所で本村歴史のあらん限りは記臆すべき方で御座います。本日の式典を舉げまするに就いても、本組合は此高恩を忘れざるの意を以て、聊か先生に感謝状を呈したいと考へます。』

と、述べて、大和は雷の如き拍手に送られて壇を退くのであつた。

次いで、壯嚴なる式の下に、左の『感謝状』は恭々しく石井顧問に贈呈された。

感謝状

謹而本村無限責任報徳産業組合顧問石井洋先生に白す。

本村先に、村治の方針を過まり、施設其處を得ざるもの蓋し一二に止まらず。就中村教育の如きは毎年莫大の費額を投ずるにも拘らず、徒らに形式のみに走り、教育の神髓を忘れ、只其一小部分なる兒童の教育をな

すを以て教育の能事終れるが如くに思推し、最も緊要なる一般村民の教養指導を無視したり、爲めに村民の多数をして文明の趨勢に後るゝの不幸を來し、精神的に智識的に恢復す可からざるの損失を與へたり。又産業に於ては徒ら舊式なる經營法を墨守し、科學の應用を忘れ、協同勞作の利益を蔑視し、殊に作物栽培の如きも、社會の需要販路等に就て顧念する所なく、且つ種苗の撰擇栽培法の改善等を毫も試みられずして、時勢に適應せざる經營を爲せるがために、生産物の價値は其要する經費の騰暴する反比例に下落し、遂には村と家とを擧げて産業は年一年と衰頽萎縮し、兩者齊しく其の經濟を困難疲弊に至らしめたり。又我等村民一同、常に四海同胞博愛平等一村一家を口に唱へながら、過去數年間、各自の行動は一も其の言ふ所に一致せず、村民互ひに搏噬陷擠し、宛どして仇敵を迎ふるが如く、隣人を遇すること飛禽走獸に對するが如く、道心地に落ち、人和眞樂の情誼を失ひ、父母は子に離れ子は父母の恩誼を思はず、婦女子は眞節を守らず、父兄は放縱酒色の奴となり、家庭は破

壞され、一村内恰かも百鬼夜行の地獄境たるの觀あり。之が爲めに我明星村は一時自治の機關を休止するの止むなきに至り、廢村同様悲痛慘憺の境遇に沈淪したるは、今尙我等村民の記憶に新たなる處なり。斯の如く悲しむべく憐れむべき一村の前途暗慘たるの秋に當り、天神か神助か、幸ひにも我等の尊敬する報德教の傳道者石井洋先生の來村せらるゝに遇ふ。至誠赤心の先生は、あたかも慈母が滿身の愛を以つて赤子を慈しむが如くに、我等村民を愛撫し、一時は理非善惡曲直正邪の判斷をすら失ふまでに道念の失墜したる實に憐れむ可き我等村民に博愛相助共同自治の新精神を吹鼓され、我等をして茲に再び、一村一家眞に和睦み合ひ、相助け合ひ、救ひ合ふの共同心を喚起せしめられたり。我等明星村民が今日自治の機關を新にし、村治の改善と人心の廓清と併せて産業教育其他萬端に涉り、前途將さに發展せんとするの光明を認め得るに至りたるは、是れ實に石井先生の賜に外ならず。我等明星村民老幼の末に至るまで感激の至りに堪へず、本日の盛典を擧ぐるに當り、村

民一同切々の至情を表し、謹んで此の感謝状を石井洋先生足下に呈す
首恐惶再拜

大正五年二月十日

明星村村民總代

明星村無限責任報徳産業組合長 大和宗八

參會者の内には古い難村時代を思ひ出して、轉た今昔の感に堪へず、そのハンケチを濡らす者すらもあつた。

茲に石井は起つて一場の答辭を述べ、不省の如き者も尙且つ指導顧問の任を全うし得る所以のものは、一に諸君が至誠協同の賜に外ならぬと、謙遜の言を以て、更に一同の今後に對する奮勵を望んだ。

産業組合中央會副會頭小杉男爵は、其質素な老成の體驅を壇上に運んで産業組合の我國に於ける發達を説き、終りに日本に於ける産業組合の精神は、最もよく明星村に於て發揮され、明星村は其名の示す如く、眞に産業

組合中の明星であり、日本全國自治町村の仰いで以て範とすべき所であると激賞し、我中央會は遠からず本村の表彰を爲す積りである。諸君願くは此天下の輿望に背くこと勿れと結んだ。

知事は此時やをら身を起して演壇に進んだので、會衆は又手の痛い程の拍手を吝まなかつた。

知事はコツプの水に口を濕はして、眞白なハンケチをポケットから出して口を拭きながら、扱て

『諸君』

と。説出すのであつた。

『諸君、私は斯様な式典に列するのを無上の光榮と思ふ。聞く所に依れば當組合は大和組合長以下の御盡力に依つて、未曾有の好成绩を示し、創立口尙は淺きに拘はらず、村治上に貢献する事が少なくなないの事でありませす。私は滿腹の同情を以て、本組合の進運を祝賀せざるを得ない。就きましては此際諸君に望むは、どうか今日の勤勉と勞苦と協同とを何時までも

忘れず、昔日の悲運を再びする事なく、再來月に始まる大正五年度からは圓滿完全なる自治村となつて、昔の衰運を一場の夢物語とされる事を希望に堪へませぬ。」

と、述べて自分の席に歸つた。

草村は此時感に堪へぬ調子で演壇に現はれた。

「私は今中央會副會頭閣下並に知事閣下の御話を承はつて、實に千萬無量の感に堪へぬのであります。願はくは諸君と共に、地上の理想國を此處に建設する事を誓ひませう。」

會衆は皆感奮して、口々に『明星村萬歳』を唱へた。

記念式は纏て夕暮になつて散會を告げたのである。

三、復活の新機運

翌日から村長事務干涉の郡吏は新らしい村の復活について事務を執り始めた。そして其の第一の事務は村會議員の『選舉被選舉有權者名簿』を作製す

る事であつた。

四月末になつて村會議員の選舉が行はれた。そして村會が成立した時に第一に行はれたのは役場員の選舉であつた。

村長は大多數を以て大和宗八が當選した。助役には草村文平、収入役には神宮寺勇が選舉された。

大和村長は就職の際、村民の戸主一同を學校に集めて、年來我が抱いて居る村治の抱負を語り、『村長の職責』なる宣言を爲して自己の職務を規定すると共に、村民一同がよく協力して、自分を助け、以て此職責を全うせしめられん事を望んだ。その宣言は次の如くであつた。

村長の職責

明星村の村長たる者は、常に左の要旨を服膺して其職責を全うしなければならぬ。

一、自治體の本體

個人が圓滿なる家庭を造り子孫永安の計を爲すと同じく、自治體も亦其名譽と財産とを増進するを本旨とす。個人が健全なる身體の養成に努めて、社會公共の爲めに盡すと同じく、自治體も亦現在の生活を健かにして、社會の進運に寄與する所なかる可からず。

一、村治の方針

至誠勤勞分度推讓を旨とし、躬行實踐以て一身一家を修め、之を大にして一村に及ぼすに在り。謂はゆる華を去り實に就くの方針を以て凡ての無益なる形引を打破りて、簡素の風習を養はん事を期す。

二、執務の方法

村固有の事務に周到なる注意を用ひ。委任事務を濫滞なからしむ可し。一舉一動すべて模範的なるを要し。自然に村民を風化す。積極的に善行を奨励し、自然に悪行を消滅せしむべし。

一村一家の實を擧げ村の内容を巾廣ならしめ、細長ならしむ可らず。消極的の節儉貯蓄を過度に奨励する事なく、専ら有利なる資本の運用を計り村民の生活に綽々として餘裕を存せしむること。

一、武士道の涵養

大正の御代の武士道は多數の利益を尊重して私利を後にする事なり。個人の利益と公共の利益とは、常に相一致せしむべく、止むを得ずんば、一村の爲めには一家を、一家の爲めには一身を、喜んで犠牲に供するの同情心決斷心を養成するに努むべし。社會の制裁を健全鞏固ならしめ、自重他愛の精神を養成せしむべし。

此宣言の朗讀が終つた時、大和村長は新たなる喜悅の聲を勵まして又語り出づるのであつた。



村是の發表

村是

（正五十年迄完成）
 村是 六十餘戸
 基金五萬圓
 土地二百町歩
 公會大庫
 各字員住宅
 完全なる道
 水道電燈電話
 小軌道電燈電話
 農藝試驗場
 揚棒所乾燥場
 精米所及理髮所
 私立共済所
 自動飛行機
 蒸氣鍋筒其他

家
 一五六八二封
 宅地五一反歩
 田五一反歩
 畑五一反歩
 山林四反歩
 有山四反歩
 證券五千圓
 小土蔵及物置
 外土蔵及物置
 肥舍豚舍

道德

勅語（報德報恩）
 詔書

學校教育 小學學校 補習學校 少年會 少女會（各每週日曜日開催）

通俗教育 戸主會（月次會） 青年會（月次會、夜學會）
 主婦會（月次會） 婦女會（月次會、講習會）
 老人會（月次會） 各總會年一回

宗教改善

諸宗派の普勸、神社合祀、寺院合併、祭禮及供養儀式等の矯正

實業獎勵

耕地整理、堆肥舍助成、牛馬耕助成、試作、視察、品評會、競技會、其他

娛樂機關設備

常設 俱樂部、圖書閱覽所、遊戲所等
 臨時 巡拜、遠足會、歌留多會、擊劍、盆踊、假裝行列、煙火、

政策

細民保護

職業助成、學業助成、財產助成、移民助成、疾病災害救助其他

衛生及警備

村醫、衛生講話、健康診斷、清潔法勵行、夜警、火防、水防其他

諸團體の整理

農會、教育會、在郷軍人會、衛生組合、勤儉貯金組合、赤十字社、愛國婦人會、武德會、救濟會、其他諸會の改廢、及會員加除、

基本財産蓄積

村費一定積立、國庫交附金、諸産業の純益、街道の果樹植

個人生活・分度經濟

村 村費一定積立、國庫交附金、諸産業の純益、街道の果樹植

共同の機關・産業組合

信用組合（金銀の圓満）、販賣組合（収入の増加）
 購買組合（生活費節約）、生産組合（生産費節約）

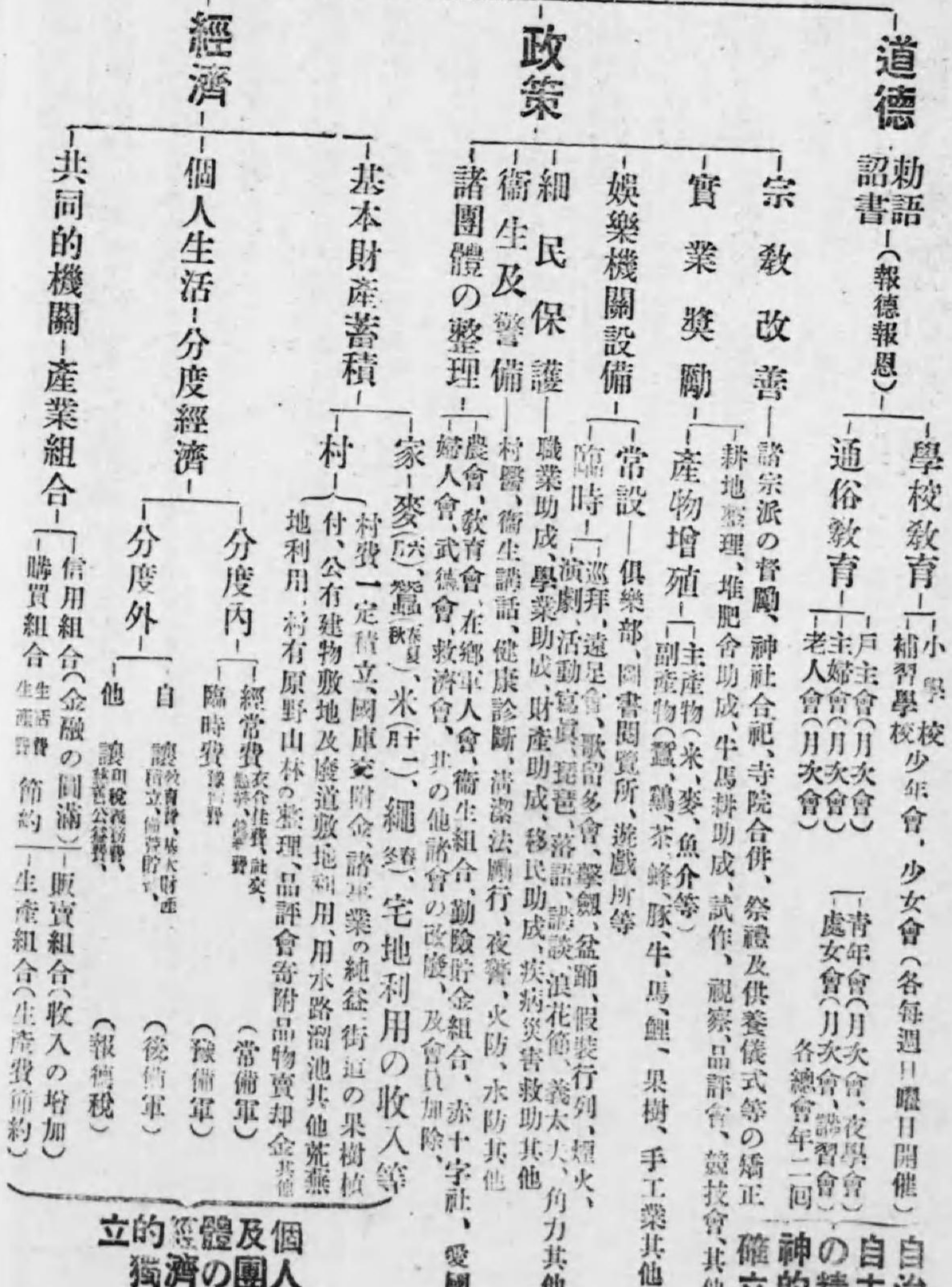
分度外

自 讓教育費、村費、
 讓田稅、地稅、
 讓田稅、地稅、

分度内

經常費（衣、住、食、交、
 臨時費、
 豫備軍、
 後備軍、
 報德稅、

自治 精神 確立 個人及團體的經濟 獨立



「皆さん、私は如何にして前申上げた職責を遂行するか。それは私も十分考へたのであります。唯今御手元へ配附しました所の明星村『村是』あれを御覽下さりますると、私どもが將來本村を如何にして行く決心であるかと云ふ事がお解りになると考へます。吾々村民が全力を盡して村の改善に盡すならば、明星村を何の位にまで改善して行く事が出来るかと云ふ事を私は深く研究して見ました。段々研究して見ますと、其關係する所が非常に廣いので、短日月に研究する事は到底出来ないと知りまして、本村の恩人たる石井先生を委員長と致しまして、吾々同志數人が調査委員となり村内各種の方面に涉りまして委しく取調べました結果が、唯今御覽下さる通りの村是となつた次第であります。私は此村是を村民諸君御一同からは是非承認して戴きまして、此理想を實現せんが爲めには死力を盡して一大奮闘を試みようかと決心致しました。數字其他に付きまして、石井先生から唯今村是の御説明を願ふ事に致しますから、どうか諸君に於かれては十分御熟考の上、熱心なる御賛助を仰ぎたいと希望致します。」

村長は此う述べて壇を下つた。そして石井顧問は熱誠面に溢るゝ姿を壇上に運んだ。

「唯今村長さんのお話になつた『村是』に就いて、少しく説明を致します。先づ此明星村を理想の村とするに就いて、如何なる目標を以て進み、又如何なる事を爲す可きかに就いて、吾々調査委員は熟慮を重ねました結果、村是の上欄に記載して御座います通り、『家』と『村』との二つを富ますの必要を認めました。大正五十年まで約五十年計書を以て此村を完成する、此く方針が定まつたのであります。そして其五十年の曉には、村の状態を如何様にするかと云ふ事は、現在の家と村との財力を考へまして、當然出来得べきだけの計算を立てたので、其の家の欄と村の欄とに列記して御座います数字は、無論この位は少なくも出来ると見極めの付いた數であります。即ち大正五十年に至ると、村内の家は如何なる小民と雖も少くとも宅地一反歩、田五反歩、畑五反歩、山林四反歩の土地の外に、有價證券二千圓の財産を持たせる、又村としては、基本財産二十萬圓、土地

五百町歩の外に、公會堂、病院、完全なる道路、各字に教員住宅、淨水道、耕地や村落を聯絡する爲めの小さい軌道これは村民が随意にトロッコを走らせる事の出来るものとす、それから電燈に電話、測候所に農藝試験場、製乳場、屠場、精米所、揚柁所、乾燥場、理髮所、共同浴場、蒸氣唧筒、これ位ものものを備へると云ふ事にするのであります。一寸見ると、此計算は餘りに旨い——畢竟空想に過ぎない様に見えるのであります。それは現在を改善する事が出来ぬと云ふ様な考へから見た事で、若し眞に努力して一歩一歩改良して行くならば、五十年の後に此位の結果を得る事は、寧ろ餘りに少ない位のものなのであります。之を具體的に細かく説明して見ませう。

「先づ家の方であります。之に掲げてある財産を造るのに、其財源は何處から出て来るかと云ふに、先づ産業組合の設立であります。今迄組合を有せぬ人は高い金利を拂つて金を借りて居ります。本村民が一ケ年に如何位の金を借入れて使ふかと云ふ事を調べたら、一戸平均二百四十圓と云ふ事になります。そして現在では大抵一割五分の利を拂つて居るのであります。

すが、之を信用組合で融通すると、唯だ五分の利で借りる事が出来ます。すると此一割づゝの利益が一月に就いて二十四圓出て参ります。次に村民の買入れます日用品は極々内輪の勘定で一月一年に付百圓、それを購買組合の手で拵ひますと、少くとも一割即ち十圓の利益を生じて来る。次に村内から生産される産物は従来は一月平均三百五十圓でありますが、産業組合を利用すると、肥料代が安く上る事と機械の應用等に依つて、少くも一割は生産費が安く付く、此利益が三十五圓あります。尙ほ此出来た産物が組合の手で賣ると高く賣れる、生産物三百五十圓の内二百圓を自宅で消費して百五十圓だけ賣るものと見て一割即ち十五圓の儲けがある。以上の利益を合計すると一月に付八十四圓になり、之を全村に積れば正に七萬千四百圓と云ふ金が一箇年に儲かるのであります。

「次は報徳主義に依る分度生活であります。二宮先生の報徳教の趣旨に従へば、吾々は収入の四分の一を貯蓄すべきであります。村民諸君が能く此分をお守りになると、ソコにも莫大の餘裕が生じて参ります。一月現在

の所得は一ヶ年三百五十圓で、その貯蓄する所は一村を通じて七萬四千三百七十五圓と云ふ巨額に上るのであります。

「次は物品積立と宅地の利用であります。農産物の收穫に際して、諸君がお初穂を供へる心を以つて、一ヶ年五圓乃至二十圓の品物を貯蓄にすると五十年の後には此額だけでも、堂々たる三十八萬圓と云ふ大資本が村内に出現するので、此物品積立は農家としては最も苦痛なく出来る貯金法であると考えます。

「以上は今日只今から直ちに實行し得る方法でありますが、尙他に村は今後全力を盡して實業の奨励を致すのであります。在らゆる善良なる耕作法、科學の應用、産業の開發、經濟機關の完備、こう云ふ方面に意を用ひて参ります。例を擧げて申しますと、唯今では米の收穫と云ふものは、其耕作法の不完全な爲めに平均一反歩に二石しか取れて居りません。之を十分改良致しますと四石ぐらゐる迄は收穫が出来るのは確實で、此增收が一ヶ年に一萬二千七百七十石、一石二十圓替として二十五萬五千四百圓の價に

なりませす。麥なども米と同様で、本村の作付反別五百丁歩に對して一萬石の増收、代價十二萬圓に達するのであります。以上は主業の方であります。が、副業としては新たに蜜蜂を飼ふ事にして、一戸十五圓の年收があるものとすれば全村で一萬二千七百五十圓、賃機を織て居るのをモ少し獎勵致しまして一ケ年二千圓の増收も容易な事と考へられます。それから又現在では鶏は一戸二三羽しか飼つて居りませんのを、平均五羽にしますと、之が四千羽の増加、一羽一圓の利益と見て四千圓の收入が増す譯であります。尙此外細かい項目は一々述べ切れません。

「右に述べた金額を、一方では貯蓄し、一方では盛んに運轉して行つたならば、事業の利益や利子で、最下級民一戸が一町五反歩の土地に二千圓の有價證券を持つ位は、實に易々たるものと謂ふ事が出来るのであります。「更に村は如何にしてアレだけの財産を積む事が出来るかと云ふ事を申しませう。先づ村の豫算を執行するに當りまして、精々引締めた考へを以て餘分な支出を致さぬ様にするは勿論の事、今迄使ひすてゝ居た國庫や縣の

交附金三百三十圓と云ふものは、今後は一切使はずに積み立てる。それから村役場、學校、避病院などの敷地を利用して果樹の様なものを栽培する。と一ケ年百圓くらゐの收入は難かしくない。溜池を利用して堤には楮、三椏、果樹、水中には鯉、鮒、鯰の類を養成すると此の收入が毎年約三百圓。用水路に柳を植ゑると之も約三百圓の收入があります。次は里道の整理で道路に沿つた兩側の田や畑が段々道路に喰ひ込んで來て居る地積を調べ出して、其小作料を徴收すると、少くも百五十圓ぐらゐにならうと思ふ。それから又其里道の兩側に茶桑又は果樹類を植ゑる、此收入が一千元、共有山の草場以外の處や荒蕪地の様な處を利用して植林や開墾をする收益がモ圓ぐらゐになる。それから桐の苗木を各戸へ二本づゝ托して、成長の上一本は各戸に與へる約束で、屋敷の隅にでも植ゑて置いて貰ふ。之を五年目毎に伐として、此收入が一年八十五圓位には當る勘定になります。その他在來ダラシ無く催はされて居た興行物などを村の監督の下に行はせる事にすると、風教の上にも利益がある計りで無く、經濟の點から言つても村

「これは一年に四五百圓の収入が増す事になります。」

「此く擧げて参りますと、尙此他にも随分澤山の財源はあるので、一ヶ年に約四千圓の蓄積は差して困難で無い。之を事業資金として運轉するのと、複利法から言つて計算して見ると、五十箇年の後には百萬圓以上の數字が厭でも應でも出て来るので、數種の營造物や基本財産位は必然の結果として容易に出來上るのであります。」

「これで家と村との財産造成が敢て空想で無いと云ふ事がお解りであらうと考へます。之を成功せしめると否とは、唯だ至誠の存在す事と否とに依る事で、既に村長さんが十分の決心を爲された以上は、諸君も一大覺悟を以て之を助けられん事を望んで止まぬ次第であります。」

「さて以上の理想の村を建設する方法としては、『道德、經濟、政策』の三つに依つて之を行ふので、お手許に廻してある表の面に其細目が記載してあります。之を一々説明して居ては、尙ほ數時間を費す虞れがありますから、之は機を見て更にお話し申す事として、今日は村是中經濟の目標に就

いてお話し申した次第で御座います。」

石井が熱誠の説明を終つた時に、流石長夜の眠りを貪つて居た村民の頭脳にも、響き應へるものがあつたと見えて、會衆の間には盛んなる拍手が起つて、一人の異議を唱へる者も無いのであつた。

至誠は神に通ずとさへ言ふ、長い間の石井大和等同志の苦心が一般村民に了解されて、唯だ一場の演説に興奮した聽衆の面色には、雷に此村是を是認したのみならず、必ず之を實行せでは止まざる可き頼もしき決心の漲ぎるを見て、欣々として再び壇に上つた大和村長は、抑ふ可らざる喜びを以て、目出たく其閉會を宣したのであつた。

農家五訓

- 一 家を富すは國家の爲と心得奢侈を戒め勤儉の心掛肝要の事
- 一 家の富は事業の改、良に基き事多きものなれば學理を應用する心掛肝要の事
- 一 家の幸福は社會の賜なれば公共の爲には應分の勤勞を盡し公德を修むる心掛肝要の事
- 一 共同體力は最も大切の事なれば小異を捨て大同に合し個人と共に公共の利益を進る心掛
- 一 肝要の事
- 一 農民たるものは國民の模範的階級たる可きものと心得武士道の相續者を以て自ら任じ自重の心掛肝要の事

(農學博士横井時敬選)

神の直轄の下に住む天領の民

○ 土の上に生れ、土の生むものを食つて生き、而して死ん、土になる我輩は畢竟土の化物である。……土の化物に一番適當した仕事は土に働くことであらねばならぬ、あらゆる生活の方法の中、最もよきものを選り得たるものは農である。

○ 農は神の直轄である。自然の働に、自然の支配の下に自然を賛じて働く彼等は人間化した自然である。神を地主とすれば、彼等は神の小作人である。主宰を神とすれば彼等は神の直轄の下に住む天領の民である。

○ ナイル、ユウフラタの畔に木片で土を掘つて野生の穀を蒔いて居た原始的農の代から精巧な器械を用ひて大仕掛にやる米國式大農の今日まで、世界は眼まぐるしい變遷を閲した。然しながら土は依然として土である。歴史は青人草の上を唯風の如く過ぎ去つたに過ぎない。

○ 農の命は土である、諸君は土を亡ぼす事は出来ない。……土は無感覺の如く見える。然しながら其無感覺のやうに見える土にも恐しい地震があり、深い心の底には燃ゆる火もあり、沸く水もあり、清しい命の水もあり、燃せば力の黒金剛石、石炭もあり、無價の寶石も潜んで居ることを忘れてはならぬ。(以上、徳宮廣花氏著「みづのたばこと」の抜粋)

第十六章

一、村是發表の翌日

新らしい村が成立つと、石井洋は村條例の規定する所に従つて、明星村顧問となり、同時に明星村無限責任報徳産業組合の顧問を兼ねた。固より誠心誠意、公共の爲を計つて我身を知らざる石井は、之より更に身を粉にして村内を遊説した。寺院、學校、區長の家、有志の宅、苟くも機會さへあれば、人を集めて、報徳教の精神と、産業組合の智識と、町村自治の方法とを、彼等の頭に吹き込む事を努めた。葬式があつて人が集まると聞けば其處へ行き、祝ひ事があつて三人五人の人が寄ると云へば其席へ出て、朝から晩まで少しの油断も無く村民の思想を改革するに努めた。降つても照つても、鴉の鳴かぬ日はあつても石井の其熱烈な辯を聴かぬ日とて無かつた。

村是發表の翌日、

石井は夕月の寺院で、「村是の實行に就いて」と云ふ一

村是の實行に就て

今や我が國の發達は前古未曾有とも云ふべく、國運隆々、旭日昇天の勢を示して居るのは、お互日本國民として、名譽此上も無い次第である。併し今から僅か四五十年の昔を回顧すれば、未開の狀態は今日と比較して、野蠻國と文明國、子供と成人ぐらゐの相違が其間に認められる。従つて國情の變革發達の勢ひが素晴らしいものであつた事が認められるのである。具體的に之れを言へば、先づ國の面積が明治初年には二萬四千方里であつたのが、一躍して四萬三千方里となり、人口に於ては、同じく三千三百萬人が六千八百萬人(大正年)に達して居る。又米の産額は、同二千五百萬石が五千六百萬石となり、蠶糸の生産額は同百六十萬貫が四百七十七萬貫に殖えて居る。鐵道線路の延長を見ても、長足の進歩は明瞭で、明治五年に僅か十八哩の處から、今日では七千八百哩になつて居る。其外船舶噸數の増加、銀行會社資本額の増加は實に莫

大なるものである。又六千噸の海軍力は今や五十萬噸となり、六箇師團の常備兵は十九箇師團となつて居る。外國貿易は、輸出入を合計して卅億圓以上に登り、政府の歲入出は、明治四年の歲入出が四千九百萬圓であつたのに對して、大正十一年度の豫算は歲出入合計二十九億三千二百十二萬圓と云ふ巨額を計上してゐる。

以上は國家財政と云ふ側の發展の梗概であるが、民間商工業の發達も亦甚だ盛んなものであつて、謂はゆる都市の膨脹は、此趨勢を示す一大現象に外ならない。試みに思へ、諸君が汽笛一聲東京へ、或は上野新宿兩國南千住あたりへ着いた時の感想は如何なるものであらうか。遠い以前の事を考へるに及ばず、僅十七八年前の日露戰役頃、或はモ少し溯つて日清戰爭前後の東京と比較して見たら、諸君は其發達の激しいのに思はず驚嘆の聲を發せられるであらうと考へる。予の如きも、明治二十七年の春、まだ消え残る雪の肌にうすら寒き三月と云ふに、僅か三圓の金を懐中して、美濃の山奥から上京したものであるが、其當時の東京と今日

の東京とを比べると、市街は全然一變したと云つても差支ないのである。此の如きは、獨り東京のみでは無く。凡ての都市は僅少の時間に急激なる發展を爲して、刻々に其面目を一變しつつあるのである。之は遠きに例を求むる迄も無く、諸君が程近き清水市の状態に就て研究を試みれば、直ぐに明瞭に分る事である。

商工業と國政とは斯く相並行して盛んなる進歩を遂げたのに對して、お互農業者の居住する農村の現状は如何あらうか。局外者は定めて之を怪しむであらうが、農村は前述の商工業や一國財政の状態とは全然反對に、日に疲弊困憊に陥りつゝあるのである。此様な道理は頗る有るまじき事であるけれども、而も事實は枉ぐべからず、農家の經濟は年一年と困難を感ずる様になつて行くのであるから仕方が無い。今之を數字にして示すと、全國農家の總負債額が九億四千萬圓であつて、之を五百六十萬軒の農家に平均すると、一戸百八十圓弱の借金を負つて居る事になる。こんな驚くべき負債が何故出來たのであるかと云ふ事を知るには、

先づ其負債金の種類を區分して見る必要がある。即ち生計困難の爲に生じたものが全體の三割五分、不測の障害の爲に生じたのが一割五分六厘、農業資金の爲に三割一分、其他二割と云ふ事になる。而して其利率は比較的に高い一割以上二割、謂はゆる高利貸の手に搾られる事になつて居るのである。以て其生計が如何に困難であるかと云ふ事が観察せられる。農家經濟の困難は又他の方面からも證據立てられて居る。即ち國家及農村の中心となるべき自作農は次第に減じ行き、土地は少數の富豪に兼併せられ、年々増加するものは獨り大地主と小作人のみである。之を數字に現はすと、全國で十圓以上の納税を爲し得る者が、明治十五年度には百七十八萬四千〇四十一人であつたのが、明治二十四年には百十七萬五千〇四十五人に減じ、其後人口は増加し、日清戦争で租税が増徴されたにも係はらず、同二十九年には百萬台を下つて八十五萬五千九百〇二人と減じたのである。又日露戦役後は諸種の税率租税が益々急激に増加したにも抱はらず、同四十一年には愈々減じて七十五萬七千七百八十八人

に降つて了つた。生活程度が世間一般に向上し、人口は増し、國內の貨弊は多くなつて居ると云ふのに、獨り農家の此傾向は驚くと云ふよりも寧ろ寒心に堪へぬ次第であるのである。又村會議員の選舉資格を有する者の如きも、明治二十五年に三百七十一萬餘人を數へたものが、同四十二年には三百四十五萬餘人に減じて居る。それで租税の滞納者の如きも年々其數が多くなり、殊に恐る可きは、日露戦争後、農家三百戸につき毎年一戸強の廢家を出しつゝある事で、日本は戦争に勝つても、毎年二萬軒の農家を破産させつゝあるので、農家滅亡の衰運は蔽はんとして蔽ひ能はざる事實であるのだ。何故に斯くも非運に陥るのであらうかと調べて見ると、種々の原因はあらうけれども、要するに農家が「經濟の調節」と云ふ事を誤つたからである。彼の商工業の如きは、日進の機械と文明の智識とを採用して、生産費の減少、販路の擴大と云ふ事に、日も維れ足らざるの用意をしてゐるのに、農業は依然として古來の習慣を墨守し、文明の利器と最新科學の智識とを採用する事を忘れ、知らず識ら

ずの間に謂はゆる時代遅れの情勢を馴致し、生活費生産費のみ徒らに嵩んで、收益之に伴はざる現狀に立至つたものと思はれる。今某専門家が全國十八ヶ國の自作農家に就いて調査した處に依ると、明治二十三年に於ける收支の各々を百と定め、之に對して其後の農家收支の全額を比較するに、明治三十二年に於ては、収入百五十、支出百五十五を示し、又同四十二年に於ては、収入二百〇七、支出二百十八と云ふ變態を示して居る。其困難の原因を想見するに足るでは無いか。今日農村が疲弊し、農家が生活難を訴ふるのは、無理も無い次第である。

然らば之が救濟法は無いであらうかと云ふに、前に述べる所の如く、科學を應用して、農業の經營法と農家の生活法を改善すれば、必ずしも絶望するに及ばぬのである。それには過日來諸君のお手許に廻はされてある『村是』表の示す處に依り、全村協同一致して村及家の改善を謀るより外は無からうと思ふ。村是に示されてある實行項目の如きは、徒らに定めたる謂はゆる机上の空論とは選を異にし、既に各地方の町村に於

て實行し相當の成績を擧げつゝあるもののみで、當村の事情にも適切であるを考へたものを選んだのであるから、其心得を以て見られん事を希望する次第である。

右の表に就き以下少しも説明を試みようと思ふ。先づ「家」の方面で一家の自活に足る土地と相當の資産を各戸に持たせると云ふ事は、静岡縣加茂郡稻取村入谷區及同縣庵原郡庵原村杉山區の如き既に十數年前より實行しつゝある所で、其効果も擧がつて居る實例が認められるのである。又村としての基本財産を作ると云ふ事は、既に之を實行して町村税を徴收する必要の無い町村もあり、或は近き將來に於て無税町村たらんとして努力しつゝある處が少なく無いのである。予は本年三月、千葉縣夷隅郡東村へ講演に出掛けた序手を以て、同村の村勢調査を試みたのであるが、若し同村にして全部予の立案を採用して確實に之を實行するならば村民の豫期せざる財源より十年目から毎年三千二百圓宛の収入を擧げる事が出來、従つて五十年の未來を待つ迄も無く、三十箇年くらゐの努力

で二十萬圓以上の基本財産を作り得られ、他の各種の理想的施設も之を完備する見込が立つたのである。惜むらくは何處の町村へ行つても、此頭を有する人が極めて少い爲に、折角の案も實行するに由ない次第である。何をすることも頭は大切であるが、町村遠大の計を立て、將來に理想郷を實現しようと思ふには、何よりも此頭が必用である。そして其頭は道徳、經濟、政策の三者に依つて開拓されねばならぬ。先づ道徳の部に就いて言つて見よう。それは自治自主の精神の確立を圖る爲めに、是非とも必要の事で、それには教育勅語戊申詔書の御聖意を實踐躬行すればよいのであるが、茲に至る道を指示し教へ導びく指南車は報徳教に勝るものは無いと思ふ。即ち報徳：報恩と云ふ極く入り易く分り易い方面から、人々を教化して行つたらば可からうと信するのである。それで通俗教育と云ふ色々な會合も既に實行されて居る所もあり、近頃始めたので成績の良いのは、千葉縣香取郡神代村、群馬縣名和村など云ふのがあり、次に經濟の部に示してある産業組合に就ては、世間に随分色々な物議

があつて、中には成程これでは有害無益であると思ふ様な組合も實例に乏しくないのであるが、結局組合そのものは元來結構なものであるにも拘はらず、全國一萬に近い組合が、唯だ産業組合と云ふ名ばかりで一尙其實質が不可い。其爲に成績は擧がらず失態は續出すると云ふ様な事、世の非難を招いたに外ならぬと思ふ。我々の理想とする産業組合は、そんな杜撰なものとも異り、精神を報徳主義に採り、運用を組合法に則り、謂はゆる和魂洋才で、道徳と經濟の調和を圖り、二十世紀の今日に適應させたいものである。特に注意すべきは、村内僅少の有志者のみを組合員とするに満足せず、民村一致一人残らず組合に加盟させるのを以て、本組合の理想とするのは、他の組合と趣を異にする所である。

次に個人生活の分度經濟と云ふ事であるが、此分度なるものは、將來如何に文明が進んでも、經濟學説が變つても、動かす事の出來ざる處のものであつて、之を守る者は富み榮え、然らざるものは貧に苦しんで遂に亡ぶる外は無ないのである。(頁参照)

次は基本財産の蓄積であるが、之は自然村と家との二方面に分れて居る。村の部に擧げた各項目は、處々の町村で實行してゐる例が既に乏しくないので、殊に街道脇に果樹を植付けると云ふ事は、千葉縣都村が卒先して實行して居るのである。其他諸事業の利益として著るしいものは、電氣事業を始めとして數多し事であるが、電氣事業で相當の純益を擧げて居る市町村も幾らもある。琵琶湖疎水の京都市、電燈市營の静岡市、電氣事業の如きは、頗る注目に價するものと思ふ。明知町は惠那山麓の一小都會で、昔明智光秀が窟起した處として有名な町である。戸數約五百、農業六割、商工業四割位、別に特色とても無い町であつたが、至幸にも町に先覺者があつた爲め、去る明治三十八年に三萬圓近くの建築費を投じ、今日の水電事業の基を開いたので、最早此資本の償却も終り、年々三萬圓近くの純益を得て、町費の半額以上を支辨して居るのである。然るに茲に面白いのは、同じ惠那郡で而も郡役所の所在地たる〇

○町は、明智町の三倍以上の共有山と人口とを有して居るにも拘はらず、又商工業の随分發達して居る土地なるにも關せず、それが全國千三百二十の町の内で町政甚だ振はずと云ふ非模範町の定評がある事である。その○○町には、縣下第一の高山たる惠那山(海拔七、三百餘尺)を水源とする四季共に水量の豊富と、而も落差に富んだ中津川と云ふ天與無限の寶庫がある。町民は何故に此の財源を拓いて水力電氣を營まぬのであらうか。いや、此寶庫は既に業に獅子身中の蟲なる町内四五の我利々々亡者の爲に占領され了つたのである。彼等は他町から資金を仰ぎ、株式組織として水力電氣事業を營んで居るのである。同町は有數なる生絲の生産地で、釜數五百以上を有する製糸場の四ヶ所も持つて居る信勝社の所在地であり、且又商業の盛んな土地であるのだから、若し此水力電氣を營利に汲々たる商事會社などの蹢躅に任せず、之を町營としたならば、町費を支辨して尙多くの剩餘金を得べき事は、疑ひも無き事實であるのにさても町民及有志に頭腦の無い程、憐れの事は無いのである。

尙ほこの○○町では、惠那山の中腹から裾野一體に亘り、數萬町歩に渉る大森林を共有山として所有して居たのである。此處は太古以來曾て斧鉞を入れた事の無い處で、巨木老樹翁鬱として天を掩ひ、類ひ稀れなる大財源大寶庫と見做されて居た。然るに明治三十七年頃、如何なる筋かの運動に依つて、町會は此立木を賣拂ふ事を決議し、呉れるも同様の目腐れ金を以て中央製紙會社に賣却されたのである。

あゝ廣袤數萬町歩の大森林、絶好の發電所たる中津川、是等○○町町民を富ますべく大自然の與へた二大賜物は、毫も町民に福祉を齎すすの財源とはならずして、縁もなき名古屋に本社を有する營利團の餌食と化し去つたのである。此惠那郡は、全國でも有數な模範村落合村、蛭川村、加子母村等を一郡の内に有するの名譽を荷つて居るのに、肝腎な郡役所の所在地たる○○町の自治政が斯くも振はぬのは、實に町民たるものも大なる耻辱ではあるまいか。○○町には今も吾が竹馬の友も少なからぬ事で、現に町政の重要なる機關として活動して居る人々がそれである。

殊に小學時代に同じ級で學んだ屋土助守君の如きは、最も名譽ある、町の大藏大臣とも言ふべき收入役に選任されたとの事であるが、何でも町民の信託を辱かしめた様な噂も風の便りに聞いて居る。それを聞くにつけても、彼の憂町心の熱烈なる半兵衛翁が今少し長命であつたならば斯くまでに町政も紊亂はすまいものを。切めては鷺郎君が生きて居られたならば、我が〇〇の町も、今頃は落合蛭川加子母の諸村と共に、全國一千二百二十の町政の模範となつて、名譽の『自治旗』を惠那山頭に揚げて天下に自治の模範を示して居たであらうにと思ふのである。故山とは云へ今は全然縁も無き他郷と異ならない。否、予が故舊の好みを振切つて、社會國家の爲に斯く流浪の旅に出立ちしより、郷黨は皆予を目するに謀叛人を以てし、惡魔の子よ、異端の者よと、罵詈譎笑を遣うし、人の子は故郷に枕する處もなき悲しき境遇になつて居るのである。けれども、あゝ然れど、天涯萬里、彼の雲水に身を任せて、行衛定めぬ行脚の僧にも似たる傳道者の、昨日は東今日は西と、限りなき放浪の旅の一

夜にも、流石に生れ故郷は忘じ難く、故山の自治の振はぬ事を聞くにつけて、實に千萬無量の感慨に打たれ、轉た悲憤の涙を禁せぬのである。いや、これは諸君に向つて飛んだ手前勝手手の愚痴をお聞かせ申して、甚だ失禮であつた。併し乍ら諸君、本明星村にも又激流豊量限りなき花澤川と云ふ無限の寶庫があるのである。又數百町歩の共有山もある。此の二大天惠物の利用其宜しきを得んか、本村の大財源となつて、單に其收益のみを以てするも、優に明星村を理想郷化する事が間違なく出来るのであるが、一朝其施設を誤らば、未だ〇〇町の覆轍を踏ますとも保證する事が出来ない。是れ予が特に〇〇町の弊政を擧げて諸君の参考とする所以である。

轉じて家の基本財蓄積の部に示されたる物品積立に就ては、既に之を實行して非常の好成績を擧げつゝある所は、群馬縣佐波郡名和村山王道區、埼玉縣入間郡宮寺村大森區等で、予が親しく實見調査した處である。それから宅地の利用と云ふ事は、未だ餘り研究されて居ない様である。

が、封建時代に既に之を試みた遺物としては、彼の鷹山公の領内では屋敷回りの垣根に多く桑を植ゑたのがある。又二宮先生と同時代に今の千葉縣中和村に居て、性理學なるものを説き、附近の豊民を指導して理想郷建設にも及ばんとした大原幽學と云ふ偉人があるが、此人の施設の跡を踏査するに、垣は山茶花を用ひて居る。又埼玉縣の狭山茶で有名なる入間郡へ行つて見ると、宮寺村大字坊と云ふのは、戸數約五十戸であるが、宅地利用に依つて、一戸平均年收三十圓の利益を收めて居る。其隣村狭山村二本木と云ふ所には、(本書の寫真にもある)二百年以上も経過した茶の大木があり、是亦一戸平均二十圓位の年收を宅地から上げて居る。是等は皆利用宜しきを得た結果と思ふ。近來宅地利用に着手した所を舉げれば、朽木縣足利郡筑波村大字高松、及群馬縣名和村東京府玉川村等であるが、中にも高松區は、戸數百二十四戸で、一戸平均一反二畝歩の宅地を有して居るのであるが、之を適當に利用する事に依つて、一ヶ年全區の利益が二千五百二十七圓二十錢を得ると云ふ調査が出来て居るの

である、それから廣島縣沼隈郡百島村は、戸數四十戸で、收益少くとも三百圓と云ふ事である。斯の如く、疑ふ可からざる實例が既に幾つもある事であるから、本村に於ては是非之を實行したいものである。次に衛生及夜警の部、この衛生に就いては、静岡縣加茂郡稻取村が好い手本を示して居る。消防組は大正の今日恐らく其設備の無い所は全國に無からうと信するが、處に依ると機械道具よりも組員の服裝を一定する必要があるなど云つて、法被、股引、兵兒帶、履物までも揃へる爲めに、随分迷惑を感じて居る様な向も少なく無いのである。予の考へる所に依れば、是は實に無益の事であつて、防火用具さへ完備して居たならば、服裝の一定などは必ずしも絶対に必要では無いと思ふ。尤も被り物の帽子だけは、何村の組合であるかと云ふ位の事の分明する爲めに、一定も必要であらう。それに就いて、自分の理想に近いのは、長野縣北佐久郡志賀村消防組(寫真參照)である。それに又某縣あたりでは、警察官が服裝の一定と云ふ事を矢笠しく云つて困るなど云ふ事も屢々聞いて居

る。實際小作人などの身分になつたら、之を調製する事は非常の苦痛であらうし、又村費で調製するにしても、結局は村民の肩に掛かるのであるから。假令警察で強制がましくしても、町村長たるものは、自治上の一見識を以て相當の主張をして貰ひたいものである。

次は娯樂機關の設備である。娯樂と云ふとドウでも悪い問題のように考へる人も多いが、實に之は農村の興廢に關する頗る重大の問題なのである。要するに今日の農村は非文明的であり、單調無趣味であり、又苦樂のみ多く不愉快な處から、自然有爲な人物は都會に出で、村に居なくなり、従つて思想は何時まで経つても進歩せず、産業も萎微振はず、戸數は減する、時勢の進運には後れる、實に無味乾燥極まる次第で、田舎と云へば直ぐ氣の利かぬ、間の抜けた人間の居所と考へる様になつて來たのである。それで予は是等の弊を改善する爲めに、農村に於ける娯樂機關の設備と云ふ事には、出来るだけの力を盡したいと思ふのである。中にも遠足會の如き直ちに實行の出来るものは、速かに實施して、一年

に一回又は二回宛、先づ縣内旅行から始め、漸次他府縣にまでも出掛けると云ふ事にしたい、蓋し見聞を廣めるのみならず、非常に趣味の多い事である。現に静岡縣田方郡田中村原青年會の如き、數年前から之を實行して居る所もある。

又圖書館であるが、之は近來の流行として、到る處の町村などにも其設けが試みられる様であるが、惜むらくは何れも書物の選擇を誤つて居ると云つてよい。その爲に豫期した程の効果も見えず、作るには作つたが中途で持ちあぐんでゐると云ふ様な箇所も往々見當るのである。之は其世話をする人が、兎角自分の學力や趣味を標準としてやるからであらうと思ふ。町村圖書館の如きは思ひ切り其程度を低くして、且つ一方に偏せぬ様多方面に涉らなければならぬと考へる。遊戯品等に就いても同じ事である。

次は實業の奨勵である。是も亦甚だ大切なる問題であるが要するに少費多額、村民に資金と勢力の無駄をさせぬ様よく手を引いてやればよい

のである。それから副業、これは十分に奨励保護しなければならぬ事であつて、下手をやると、副業では無くて全く覆業になるから、餘程注意しなければならぬ。又堆肥舎の設備の如きは、埼玉縣入間郡入間村報徳社に於ける方法などが、最も學ぶ可き良き方法であると思ふ。次に細民保護、移民助成、學業助成、宗教改善なども、今茲に説き盡し難いから、それらは皆別に参考書として諸君のお手許に廻す事にした。それに就いて十分御研究あらん事を望む次第である。

今回決定せられた「村是」なるものは、大略乍ら今迄述べた様な事である。今日の農村及農家の疲弊は實に其極に達して慘憺たる光景を呈して居るのであるけれども、之を改善して富有愉快なる理想郷と化せしむる事は決して難事では無い。唯だ諸君の決心と實行の如何にあるのみである。幸ひ過日の村民大會に於て、全會の同意を以て此村是を決定したる以上は、飽くまでも此定むる所に従つて、協同一致、一村一家の念を須臾も忘れず、相共に勵まして村是の實行に努力せられんことを、切に希

望して止ぬのである。

堂々二時間に亘る大演説は、一絲亂れざる整然たる條理を以て、聴衆の腦裡に深き印象を刻み付けた。是迄とても、一度石井に會つた者は石井の熱烈なる態度に動かされぬ事とては稀なのであつたが、況して説き去る平易通俗の議論の底に、科學の基礎あり、經濟の數字あり、然なくては叶はぬ村の前途を、情理兼ね至つて切々諄々村民の良心に訴へた今日の講演には、泣かぬ鬼神もあるまじと思はれた。固より磨かぬ玉の泥に塗れて在るが如く、世の塵に汚れて光りこそ無けれ、天然の良心を中に包める夕月區民の顔の色に、今し現はれ來つた一種の表情は、聽て今夕の此講演を夜あけの鍾にして、ほの／＼東の空の白みかゝる徴候とも見られるのであつた。

二 小繁華の田舎町

夕月に於ける石井の熱辯は、思ひも掛けぬ多大の感動を區民に與へて、

演説會場で直ちに報徳産業組合に加入を申出でる者さへあり、其の効果は少くで無かつた。之に一段の勇氣を得た石井は、前日の疲勞をも厭ひなく其翌日更に講演會を朝日區の集會所で催はした。

朝日は以前學校の所在地でもあり、役場その外すべて村の首腦たるべき機關が備はり居つて、殊に清水市から若松町を経て隣縣に通ずる縣道の要衝に當るので、村落には似合はぬ町並を爲して、小繁華の田舎町を形造つて居るのである。殊に信託會社は、以前若松町まで輕便鐵道を延ばす積りで、先づ以つて此處を終點驛にしたので、一段と賑ひを増して、最初六七軒の小料理の外に、蕎麥屋とか牛屋とか言ふ怪しげの飲食店なども殖えて一しきり賑ひを極めたものであるが、その爲に風俗は亂れて、人心も日に月に輕薄に赴き、一致とか協同とか云ふものは侮辱せられて、兎角實行が困難なのであつた。殊に弊村以來、人の心に益々疑ひの雲が掛つて、表を言へば裏と悟る、誠にやりにくい部落であつたのである。されば此の朝日の人心が改革されて一致を見る様になつたら、もう明星

村の改善も半ば其功を奏したものであらうと、此處の改革には村長以下も殊更に力を入れて居た。石井は今此處に其威力ある熱辯を揮うて、人心を統一しようといふ。一大泡負を以て、『産業組合と報徳主義』なる演説を試みたのである。

産業組合と報徳主義

組合を設立する事になつた。又た村民諸君は是非とも加盟しなければならぬ、ゆえに此際産業組合の性質及事業且つそれを運用する上に於いて最も肝要なる精神の修養等について、諸君の御了解を願うて置くといふことは急務中の急務であると考へたので、本日はそれに就いて一場の御話を申上る。最も當村の一部には既に三年も以前から「報徳産業組合」が設立されて居て、組合員の數も甚だ少なからず好成绩を擧げて居るが之を當村の總戸數の割合から見ると約二分の一にし加當らぬ。して見ると未だ村全般には此の組合のことが能く解らず又必要なることも考へら

れて居ない様である。故に村役場は尙更ら本日この講演會を開催する必要を認め次第である。

扱て或る學者は、人間は『由來利己的の動物』であると断定して居るのである。然れば此の利己的の動物が公共の利益を計らうと云ふのは少しく無理の様に思はれるのである。然らば明星村の改善も望む可くして遂に行はるゝの期が無いものであらうか。否々決して然で無い。利己の動物も之を導く事が巧みならば公共の事が出来ぬと云ふ理由は無い。古來公事の爲めに盡した人の少なからぬ事は之を證して餘りあるのである。然しながら其等の人は英雄とか偉人とかで、凡人は兎角自己の慾に制せられて社會公共の事を思ふ違が無い。之をして村の公事に盡さしめようとするとするの秘決は、箇人の利益と村の利益とを一致せしむるに限るのである。其方法如何と云へば、先づ此村を一の會社の様にするのである。而して村民全部を其會社の株主の如くするのである。然すれば會社の利益は株主の利益、村の利益は村民の利益と云ふ事になつて、一村改善も遂に

容易に之を行ふ事が出来るのである。誰しも己れの利益を計らぬ者は無い。その私利が公共の利益となるとすれば、何人も喜んで之を行ふに違ひない。然らば明星一村を一會社の如くするには如何にすればよいか。予は先づ明星村報徳産業組合に全村民が加入せん事を勧誘するものである。左に少しく産業組合の内容に就いて解説を試みよう。

△利用組合 衣食住は實に人生の主要條件で、此解決は直ちに又町村改善の要諦である。で村を起すには先づ此方面に考慮を及ぼさなければならぬのである。そこで農家の今日の生計と云ふものを見るに、不思議や收支の償はぬ仕事をして居るのである。其證據には、彼の自作農なるものは、晨に星を戴いて出で、夕には月を踏んで歸ると云ふ勸勉の勞働をするに係はらず、一年々々と衰滅して行くでは無いか。されば農家諸君が此儘に今日のやり方を繼續して行つたならば、諸君は遂に立つ瀬が無くなるに相違ない。之は何故であらう、經營宜しきを得ないからである。我國經濟界の發達は明治年代に於て著るしき發達を遂げ、徳川時代と

大正の今日とを比較すれば、實に隔世の感があるのであるが、此間に介在する農業は徳川時代と今日と餘り變つた經營をして居らぬ。他の人は汽笛一聲東京から汽車で走るのに、自分ばかりは彌次喜太式に五十三次をテクヒクと云ふのである。これ收支の償はざる所以で、試みに御覽なさい、一軒の家を建てるのに柱が四本入るとして、二軒續きの長屋ならば六本で済む、此の經濟上の大思潮を知らないで、二十世紀の今日徳川時代其儘の農業經營をして居るのでは損失も亦當然では無か、協同！これ最近經濟界の唯一の成功手段である。協同組織にして區々たる排他心を止たならば、茲に初めて我が農業の收支相償ふ事になるのである。常陸山が如何に強くとも、二三十人も一時に掛つて御覽なさい、こんな者を土俵の外へ抛り出すのは何でも無いのである。二宮先生の教へられた協同助成、團體組織、これが實に勢力集注の最上手段である。そこで之を農家の生産に應用したならば、勞力を省き工程を進め生産費を減少する事はドレだけか知れず、そこに收支の勘定が取れる事にな

るのである。アダム・スミスと云ふ經濟學者の調べた處に依ると、十人の職工が別々に縫針を製造すると、一日一人十本づゝ合計百本しか生産する事が出来ないが、之を十人が協同して仕事をすると、一日合計四萬八千本即ち一人前が四千八百本宛生産する事が出来る云ふ。是れは如何なる理由かと云ふと、第一に仕事の分擔が出来て、専門の得意な部分だけ受持つから、自然工程が早いのだ、一つの仕事から次の仕事へ移る間の考へたり手を慣らしたり道具を代へたりする時間の儉約が出来るので大變に手廻しがよいからである。僅か十人が協同しただけでも四百八十倍の生産が出来ると、之が五百人八百人、一村全體の協同となつたら如何ばかりの効果を擧げ得るであらうか、殆んど想像も付かぬ程である。況して協同の資本で機械を應用する事になつたら、數へ切れぬ程の利益があるに相違ない。針の話は工業の例であるが、農業に在つても共同に耕作し、共同に刈入れ、共同にこなし、共同に貯藏する様な大部分は協同の出来るものばかりであるのを、益にも立たぬ競争心や排

他心から、此協同が出来ぬとは實に慨嘆に堪えぬ事である。利用組合は此生産上の協同を爲さしむる機關なのである。

▲購買組合 我々が日常食つたり着たりする物を買入れるのに、諸君は如何なる處から買入れるか。紙一帖を買入れると、諸君は之を信託會社の小賣店から買入れて居たのである。其信託會社は何處から買ふか、卸商人から仕入れたのである。その卸商人は何處から買ふか、仲買人から買ふのである。而して其仲買人は製造人から買入れて来る。斯くして諸君の手に入る迄には、總ての物が少くとも三人五人の手を経る。甚だしいのになると數十人の手を経て漸く消費者の手に入る物さへある。此途中の介在者が多ければ多だけ、取扱の手續料が殖えるから随つて品物の代は恐ろしく高いものになる。原價一錢の物が二錢にも三錢にもなる諸君は此途中の介在者の手を離れて、生産者から直ちに消費者にと買取る事は出来ないのであらうか。今一例を肥料の共同購買として考へて見よう。元と明星村に於ける一年

平均一戸の肥料買入高は五十圓強に當つて居た、之を八百五十戸の現戸數に乘けると四萬三千圓程になる。之を購買部で一手に買込んだら下ノ位で上がるだらうかと思つて計算した處が、一萬六千圓ならば優に買ひ得る事が判つた。即ち購買組合の制度を利用して協同すれば、肥料だけでも一年に一萬六千圓の利益があるのだ。之は清水市の問屋から買入れる計算であるが、若し此く全村の協同が成立たならば、直接北海道や滿洲の如き生産地から買入れる事が出来るから、尙更安く買入るのである。

此方法は獨り肥料のみならず、日常消費する所の石油、鹽、砂糖、菓子、紙、下駄、傘、呉服、油元結、瀬戸物、農具、養蠶道具、何から何までに應用する事が出来るのであるから、之を以て農家の經濟を助けると云ふ事は急務中の急務なのである。

▲販賣組合 一寸茲に例を用ゐる。茲に一杯の水がある。此物は普通の場合には一厘の價値も無いのであるが、若の砂漠に在つて渴へて死にそ

うな人の處へ持つて行つたらドウであらうか、必ず百圓でも喜んで買ふであらう。凡て物の價值と云ふものは此の如く物に對する人の慾望次第に依つて高くも安くもなるものである。然るに今日の農家で收穫物を賣り拂ふ有様はドウであらうかと思はれるに、繭を持つて居るとすると、グズとして居れば蝶が出る、蛆が出る、それに色々の支拂にも充てねばならぬから、一日も早く賣つて了はねばならぬと急ぐ。そこで村に入り込む仲買人たちは此弱い足元をつけ込んで、態々糞落付きに落付いて安く買倒して了ふのである。それを若し組合の販賣部を利用して、蝶の出をうな繭は共同乾燥場で乾燥して置く、金の入用なものには組合で融通して貰つて置く、此うして悠々と値の高くなるのを見て、而も組合で村中の繭を集めて、品の良いのと悪いのを撰り分けて、等級を付けて、正直に賣り出すとしたらドウであらうか。更に仲買人の手などを經すに、直ちに製糸場へ賣つたらドウであらうか。品物に信用も付き、重みも出来どの位有利の賣却が出来るか知れないのである。

▲信用組合 世に蝦で鯛を釣ると云ふ談があるが、其の蝦さへあれば随分鯛も釣れるものであるけれど、惜いかな蝦が無い爲めに折角の鯛は思か鯛一匹すら釣る事が出来ない人が多し。蝦とは資本である。鯛は利益である。此蝦といふ奴容易には人の手に入らぬもので、之を所有して居るものはソレからソレと子を産ませる事が出来るけれども、然らざる者は生涯決して之を手にする事が出来ぬものである。唯だ茲に一つ之を得るの道がある。それは文明の唯一の原則たる『協同』と云ふものである。その協同の形式を産業組合と云ふので、報徳主義に依る信用組合は、何人にも十分なる蝦を供給するものである。若し村民悉くが此信用部を利用したならば、明星村は數十年ならざるに立派な模範村とする事が出来る事は疑を容れぬ。

以上四種が今日我國に認められて居る産業組合であつて、我が明星村の報徳産業組合は、報徳主義の精神に依つて此四種を兼ね營む所の組合である。この産業組合こそ一村を二會社の如くし、箇人の利益を公共の

利益と一致せしむる所以である。

二宮先生の教へられた報徳教は、吾々に協同一致以て富を成す可き道を示され、同時に、此富を成すの道は決して道徳に背馳せざる所以を示されて、謂はゆる道徳と経済との一致融合てふ大眞理を道破されたのである。

今ま二宮先生の教へられたる處により、道徳と経済との關係を研究するならば、道徳と背馳する様な經濟は眞の經濟とは云へないのである、又道徳も經濟と矛盾する様な事では、眞の道徳と云ふ事は出来ないのである。近い例を採つて云ふと、商人が不正なものを誤魔化して高く賣ると云ふ事は、道徳上より見れば許す可らざる事であるが、我國今日の商業では通例の事として之を咎めぬのである。然らば道徳では不可とし、經濟の上では可とする様に見えるのであるが、之は皮相の觀であつて、若し眞に經濟上の成功を得ようと云ふ商人は、決して賈さず物で顧客を欺くが如き事はしない。一度此様な事をすれば其店の信用は墜ちて、長

い内には次第に顧客を失ふに至るのであるから、これは道徳經濟ともに不可とするのが本統なのである。次に之とは反對の例で、人に物を施すと云ふ事は、道徳上では極めて善事であるが、經濟上では甚だ都合になる。此場合はドウであるかと云ふに、弱者を救ふと云ふ事は社會の病患を除くと云ふ事になるので、結局は經濟から云つても利益になる。又さほど必要でも無いのに無闇に人に生産的に施しをすると云ふのは、施された者をも横着にさせる様な弊があつて、決して道徳上からも賞賛する事の出来ぬ行爲である。以上の例に依つて見るも、道徳と經濟とは一致不難、決して相抵觸矛盾する様なもので無い事が分らう。若し道徳と背馳する經濟があるならば、其は狭い短かい經濟である。一體經濟と云ふのは如何云ふ事であらうか。簡單に言へば人間の慾望を満足せしむる方法である。而して道徳とは、人をして其本分を盡さしめ、社會多數の迷惑にならぬ様にする事である。そこで慾望にも短かい慾望と長い慾望と大なる慾望と小なる慾望とあつて、道徳と一致するの

は大きい長いもので無ければならぬ。即ち慾望を分つて個人的慾望と社會的慾望との二つとする、而して經濟は此二つの慾望、殊に社會的慾望を満たすのが其任務である。

我々の經濟行爲は大體四つに分ける事が出来る。第一を消費行爲と云つて、我々は色々なものを消費して慾望を満たす。此慾望を満たす爲めには其物を作り出さねばならぬ。第二は生産行爲である。第三は交換行爲である。自分の所有する物と他人の物を交換して慾望を満たさんとするるのである。第四は分配行爲で、共同で生産したものを各自に分配して消費に供するのである。以上四つの行爲に就いて考へると、經濟と道德の關係が一層明白になつて来る。

第一の消費行爲であるが、多數の人は個人的に消費する事を心掛けて居るが、之では決して社會の經濟は發達しない。個人として消費する外に成る可く會社として消費する様にしなければならぬ。文明と野蠻の分る所は、此社會消費の多少に在る。例へば諸君が家庭に在つて古い物を

造つて食ふ、これは個人消費であるが、寄席芝居を見聞に行く、之は社會消費である。教育に衛生に土木に美術に産業に、各個人が單獨に消費しないで、共同に消費する事になつたならば、その國は進歩する。教育の事にしても、家庭教師を置いて自分の子供ばかりを教育するのは宜しくない。今日は皇族と雖も公共の學校へお出しになる。是が社會消費の善い實例と思ふ。又富豪などが立派な別荘を建てたりなどして獨りで喜んで居る。是等は悪い個人消費の一例である。それで社會消費が殖えて来る程、一國の道德も進歩して行くし、道德が進歩した國には社會消費が進歩して居る、然し社會消費でも奢侈の風俗などは絶対に排斥しなければならぬ。

次に生産に就いて論じて見よう。此生産をするには自然、人力、資本の三要素が旨く配合せられなければ、到底都合のよい生産は出来ぬものである。それが先づ此の自然に就いて少し述べたいと思ふ。生産に當つては、我々は自然を尊重しなければならぬ。自然の賜であるからと云つ

て不経済に使つてはならぬ。此の自然に人力を加へる事に就いても、我々は矢張り人力を尊重しなければならぬ。是等のものを尊重せずしては到底圓滿なる生産は遂げられない。而して其勢力の多数は今日では雇はれ人と云ふ形式になつて居るが、若しも雇人であるからと云つて雇主が残酷な扱ひをしたら如何であらうか。彼等は生産をする事が出来ない迄に衰弱して、畢竟生産上の不経済となるのである。機械と雖も之を虐使する時は永く續くものではない。そこで工場法と云ふ様な道徳的な法律が出来て職工を保護する。それが矢張り経済に一致するのである。

次は生産の要素の内の資本である。資本は蓄積せられたる勞力であつて、これも尊重しなければ産業の發達は望まれない。然し之も個人蓄積と社會蓄積との二種類があつて、個人蓄積は個人消費と共に野蠻時代の遺物であるから、社會消費と共に社會蓄積の進んだ國ほど文明にして、且つ國民が幸福であると云ふ事が出来る。報徳社の貯金とか、産業組合の資金と云ふ様なものは、皆此社會蓄積である。

我々は森林を保存して洪水旱魃の憂なからしめるとか、學校、病院、道路、鐵道、汽船などを作つて教育、衛生、交通などを完全にするとかに努めなければならぬ。これも矢張り人々の公共心道徳心から生ずるものであつて、又此の社會資本が發達すれば、人の道徳心も必然の結果として發達せざるを得ない。即ち經濟道徳は一致である。

更に分配に就いて研究して見よう。此分配に就いて、或派の學説では自由に放任して置くがよいとなつて居るが、それでは不公平な分配になつて、強い者勝ちとなる虞れがある。此強い者勝ちと云ふ事は、弱い者の所得を極端に減らして、爲に弱者の死滅を招くものであるから、社會經濟上不経済であると同時に、道徳上からも許す可らざる事であつて、社會が之に干渉して正當なものにしなければならぬのである。即ち此分配の方面に於ても道徳と經濟とは決して離れる事が出来ず、社會の干渉力の強い國ほど文明國で且つ健全な發達を遂げて居るのである。産業組合合法が資本に對する利益を配當する事を命じたりして居るのは、即ち此

社會干涉の一例である。

今迄言つた事を綜合して見ると、道德と經濟とは何處までも背馳す可きもので無いと云ふ事が解る。茲に於て我々は經濟道德の兩者を矛盾衝突せしめない様にするには、如何なる心掛を持つて居つたならば可いか。第一に自然の恩を忘れてはならぬ。土地の豊饒肥沃な處に居る人は、其天恵の有難き事を忘れず、益々之を利用する様に心掛けるがよい。之は二宮先生の言はれた事で、山の木はドシ／＼伐つて了ふ、川の魚は捕つて種切れになつても關はないと云ふ様な事は不可ぬ。

第二には社會の恩を忘れてはならぬ。今日實業の方面に於て成功して財産を作つた人は、皆な自分が辛苦の結果であると考へて居るであらうが、勿論自身も骨を折つたには相違ないが、よく調べて見ると、社會が彼を富ましてくれたと云ふ事が大部分である。私が此處で斯く講演し得るのも、決して私一人の力では無い。圖書館があり學校があり人の書いてくれた書物を讀んだりした其結果に外ならぬのである。

第三には祖先の恩を忘れてはならぬ。前に資本とは蓄積せられたる勞力であると云つたが、其勞力を蓄積したのは、現在社會の勞働者で無ければ、其一代前の我が父祖勞働者、然らずんば更に其先代の人達である。即ち資本だけで言つても我々は祖先の恩を思はなければならぬ。況んや我が此の筋肉、この精神皆な祖先の賜であるのだから、我々はよく祖先を尊重しなければならぬのである。

更に之を言葉で換へて言ふならば、人は凡て夢寐にも我身に加はる周囲の恩惠及び之に報ゆる心を忘れてはならぬ。即ち報徳教から離れては人は眞正の充實した生活をすることが出来ぬのである。されば産業組合の如きも宜しく此教への導く處に従つて事を行はねばならぬのである。尙ほ報徳の教へを圖示すれば、其四綱領は左の如き有様となる。

(主) 至誠 分勤 (體) 度勞 (用) 推讓

即ち至誠を以て主となし、勤勞及び分度に依りて體を治め、推讓を用ひて天地人三者の恩徳に報いよと云ふので、産業組合を行ふに此精神を以つてすれば、天下治まらざるの村なく、齊はざるの家は無い筈である。勤勞には最近經濟學の示す處の協同に依つて生産販賣購買の總ての行爲を爲し、其資本は信用部より之を得、而して之が經營も村人の交際も居常一切を至誠に依つて律し、更に分度に依つて儉約の生活を爲すのである。二宮先生の教ふる處に依れば、我々は天地人の恩徳に依つて生活するものであるから、之に報ゆる爲めに推讓の精神が無ければならぬ。推讓とは己れの有する物を周圍即ち自然と社會と人とに分ち讓る事で、遺産としては子孫に讓り、租税として國家町村に讓り、慈善公共事業としては社會に讓るのである。而して全収入の四分の一を此推讓に充てんが爲め、分度を立て、嚴に収入の四分の三以上の生活を禁するのである。此推讓分度の法を産業組合に應用すれば、貯金とか相互救済資金とか云ふものになり、村民は恰かも生命疾病、傷害、養老、教育、徴兵、火災

等の總ての保險に入つたのと同様の結果になり、これ位ゝ安心な事は無いのである。従つて一村は一家と同じく、又一會社と同じく、箇人の利益と村の利益と全く合致して、明星村はイヤでも再興されるの外は無いのである。明星村の改善の鐵案は報徳主義に依る産業組合の普及に在る事を、私は斷言して憚らぬ。唯だ一人でも之に加はらぬ者がある様では、未だ眞に此組合の威力を發揮する事の出來ぬ事を、諸君が充分に理解されん事を私は望んで止まざる次第である。

言々是れ至誠、句々是れ條理、石井の強大なる意志と斷案とは、直ちに村民の肺腑に突入つて、弱きを勵まし、強きは誘ひ、飽くまで此處に近世科學に率ゐらるゝ理想の村を建設し了らでは止まざるべく見えた。來會謹聽する區民の、引締つた覺悟の面色と、愉快げな熱心の姿とを見れば、さながらに早や此場に黄金國が實現された様である。

三、殊更珍らしい熱心の眼

夕月、朝日の講演は益々好結果なので、石井は其戦陣を村の中央なる小川に進めて、此處にも人道上の戦ひを開始した。それは朝日の演説の翌日であつた。

會場の小學校には、定刻前から早くも聴衆が轟々と詰め掛けた。その聴衆の様子にも、小川の人氣が他の部落よりは勝れて居るのを思はせて、自治の中心區たるに一層頼母しい様な感を起こさせる。

小川は今此の會場になつて居る小學校附近一帯が、將來村の中央部とせらるべき豫定地となつて居て、近く其土工も始まらうとして居るので、區民は殊更珍らしい熱心の眼を村治の上に注いで居るのである。その上に、今日の演説會場の世話人たる樋口は其息子の要一と共に、元より頭の開拓されて居る人物であるので、區民を率ゐて新らしい村治の急先鋒とならんとしつゝあるのである。石井は此處で『自治制度と國民の三大義務』なる

題下に例の長廣舌を振はんとして居るのであるが、それは先立つて樋口要一は青年等が拍手の間に壇上に出で、其處女演説なる開會の辭を述べるのであつた。

やがて石井の壇に現はれた時、喝采の聲は又一しきり堂を動かした。

自治制度と國民の三大義務

回顧しますれば今より二十六年前、即ち

明治二十一年四月十七日畏れ多くも、

朕地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ増進スルコトヲ欲シ隣保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益々之ヲ擴張シ更ニ法律ヲ以テ都市及町村ノ權義ヲ保護スルノ必要ヲ認メ茲ニ市制及町村制ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム。

どの實に有難き陛下の御思召の下に、自治の制度が發布されまして以來、既に二十有六の星霜を経過して居る。それであるのに、全國一萬二千四百五十四ヶ町村の中、模範として見る可きものは、僅かに六十有八

を數ふるに過ぎませぬ。其中には自治制度が果して本邦現時の民度に適し居るや否やを疑はしむるが如きものもある。これ實に國家の爲めに慨嘆すべきであつて、如何にして町村自治體の健全なる發達を遂げしむ可きかと云ふことは、苟くも經世に志あるものゝ度外視す可からざる大問題である。自治とは讀んで字の如く、自ら自分らを治める、即ち自立自營、人の厄介にならず、人に迷惑をかけず、人の助けに依頼せず、立派に自分で我が生を營んで行くことを言ふのである。故に町村民としては町村の爲に、市民としては其市の爲に、國民としては國家の爲めに、自ら其本領を發揮し、これが進歩發達を圖る可く、福利の増進を期することである。今や我國は、誠に立派な獨立國であり、自治國でもあるし、又國民の多數が自治自營を行つてゐるが、若し町村と云ふ小なる團體に目を注げば、未だ自治制の精神が完全に會得されて居ない爲めか、寧ろ往昔よりも公共心の缺如たるが如きを見るは、甚だ遺憾に堪へない所である。謂はば町村民は自治の主體であるから、元來公共道德の涵養には

最も力を注がねばならない筈である。然らば斯の公共道德は如何にして涵養すべきかと云ふに、私は二宮尊徳先生の遺教たる報徳教の神髓即ち天地人の徳に報ゆると云ふ、斯の深くして且つ高き處の報恩的觀念を以てするより外は道は無いと信するのである。精神を知らず、意義を解し得ぬ學問は、砂上に建てたる家屋で、些々たる微風にだに動搖を免がれぬ如く、町村民が未だ自治の何たるかも辨へぬ處へ、突然自治制の發布となつたのだから、自治制そのものは完全であるとするも、其の運用上の基礎が築かれて居らぬので、幾多の缺陷動搖が生じて來たわけである。故に自治體の圓滿なる發達を遂げしめんとするには、先づその自治體の基礎たる町村民に、報徳的精神の涵養を圖り、彼等をして眞に自治機關の進歩發展を援助する人たらしめねばならぬのであつて、又自治機關の運用の首腦者たる、町村長、議員、其他の吏員等を選擧するに方つても、深き注意と、慎重なる研究とを要するのである。又是等當局その人に於ても、町村民の代表者となるのであるから、徒ら名譽心に走せたり、或

は物質的慾望に目を眩まされたり、又或は一種の野心を包蔵して輕忽なる動作に出る様な事があつては、嘗に一市町村の自治政を誤まるのみならず、延いて國家全體に悪影響を及ぼすことになるから、個人的利己主義の考へを捨て、公共的自他共利主義即ち報徳推讓的に盡す所が無ければならぬのである。

殊に警む可きは、他町村に屢々見受る黨派争ひや、或は門閥勢力争ひ等である。假令何等かの便宜上黨派に加入する必要があつたとしても、これが爲めに同郷内に於て、感情の衝突を招き黨同異伐の惡風を惹起し相陥擠するやうな場合を生じては大變であるから、町村自治の上にては常に政黨派の外に超然として立ち、町村全體の幸福を謀る上に於ては全く黨派の關係を絶滅する工夫を廻らさねばならぬ。町村自治は國政と違つて、多くの場合、政黨は有害無益である。只管に同郷相親み、人心を融和し、上を尊み下を救ふの所謂公共心、即ち報徳的精神を涵養することゝが肝要である。

今是れが實例として優良なる全國六十八の町村に就いて調べて見るに、是等の町村の多くは協同親和相互扶助の實を擧げて、以て其光榮ある自治體を形作つて居るのであつて、其の茲に至るは畢竟報徳的精神の發露とも見ることが出来るのである。

凡そ町村自治體としても國家としても、彼の教育、納税、徴兵の三大義務が、各人一般に了解され重せられるので無ければ、其團體は鞏固に獨立する事を得ぬもので、此精神が養成せられ、此の義務が完全に實行せられてこそ、立派なる自治體にして又立派なる自治の人と云ふことが出来る。三大義務に就いて尙ほ少しく説明して見よう。

▲教育の義務 人生れて教育を受け得ざる程不幸の事はない。教育の大家グレシアン氏曰く、無識なる人は存在すれども死せるが如しと、眞に至言であると思ふ。實に教育の有無は人生生涯に於ける幸不幸を定むるの分岐點であつて、教育は人生の運命を定むる鍵とも謂ひ得る。それで親たる者の義務として其の子女に教育を授くると云ふことが最も大切なる

は言ふまでもないことである。假令法律規則で強制されなくとも、村役場から催促が無くとも、其子女が學齡期に達したならば、父兄たるものは自から進んで就學の手續をなす可き筈であるのに、再三催促を受けてから不淨無性にヤツト入學の手續をなす様では、是れ自治の人とは云ふことが出来ないものである。

今日最も急務である處の、農事の改良とか農家經濟上の改善とか言ふ事が、容易に行はれぬのも、又各人が生活の困難を啣つのも、それから又我が住む町村の經營が思ふ様に發展することの出來ぬのも、畢竟町村を組織する其分子の多數が無學、無識、無教育者が多いからではあるまいかとも思はれる。又國家としても國民に無學の者が多いと云ふことは國運の發展上大に憂ふ可きことであると思ふのである。さればこそ教育と云ふことが國民の三大義務の一つになつて居るのである。

模範村へ行つて調べて見ると、此教育が老人より嬰兒に至るまで男女夫々階級に應じて能く行届いて居るのである。若し貧困者で入學させる

この出來ぬ様な者のある場合には、有志者とか或は村とか心配して、夫等の者にも遺憾なく教育を受けさせる様な施設もして居るのである。

▲納税の義務 是亦國民の三大義務の一つである。我々お互が納税をす

るのは、國家社會より受ける共同生活の恩恵に報ゆる當然の勤めである。國家は之を以て教育、軍事、衛生、土木、勸業、交通其他種々の設備をなして、國民の安寧幸福を圖る爲に支出するのであつて、府縣に於いても町村に於いても同様である。丁度私共が農業をするとき秋の收穫物を得るには春から夏へかけて肥培が必要なのと同じことである。それを肥を取られると思へば腹も立たうが、肥を遣るのだと思つたならば、僅かな税金が滞はる筈がない。何か我々は納税するのでなく、國家府縣町村から受くる處の恩恵に報ゆるために、税を拂ふのであると云ふ考へを以つて、必ず滞納せぬ様にしたものである。

是も亦模範村などに就いて調べて見ると、役場では納税時期を村民一般へ前以つて告知して置くと同時に、僅かの納税でも時に依ると差支へ

る人があるから、それらの人の爲めには組合を設けて、大抵其人達が納める年額を日割にして毎日一錢なり二錢なりの日掛をさせ、伍長どか組長どかが廻つて歩いて金を集めて貯蓄となし置き、納税の都度その中より支出して、残り金を年末に各人へ割戻す様な實に行届いた方法が行れて居る。又小民側に於ても結局年末になるたけ餘計な割戻を受くる様に常々勉強して日掛をして居る様である。私が考へるには、町村の状態によつては各自が生産する處の物品でも納税が出来る様に役場が世話をし、て遣ると云ふことは、最も望ましい事であると思ふのである。

▲兵役の義務 是亦國民の三大義務の一つである。國家の自營上最も大切なるものは軍備であつて、如何に精功完全を極たる軍器彈藥を有すればとて、若も立派なる強い兵士が無ければ、國の獨立は望まれぬのは當然のことである。殊に我國は兵士が強いからこそ世界一等國の列へ入いつて居る様なものゝ、國の富力と云ふ方面より見るときには、殘念ながら劣等國である。されば男子丁年に達したならば、當然兵役に就く可き

ものと覺悟をして居なければならぬ筈である。然るに『悴も年來は検査に當るが兵隊に取られなければよいが』とか、或は甚しきになると、これらの生臭坊主に頼んだり等して兵隊除けの祈禱をして貰ふ輩がある。實に不埒至極な次第であつて、斯の如きは、兵役に就くのを我が家を守り我が國を守る國民の義務であると思ふ心がないからのことである。言葉を変へて申せば、自治の心が缺けて居るからに外ならぬのである。さて以上述べて來つた如く、此大切な國民の三大義務を怠らぬやう努め、且又協同の利益を進め町村の安寧幸福を圖り、我が住む町村をして富有なる愉快なる處ならしめ、尙又村民各自も相當の資産を作り村に一人の貧に泣き餓を叫ぶ者のなき様に致には如何なる方法を採つたならば其目的を達することが出来るであらうか。それには教育勅語及び戊申詔書の御聖旨を奉體して行かなければならぬ、然らざるには報徳主義を實行すれば自然その目的を達することが出来るのである。今その實例を擧げて見ると、静岡縣伊豆國賀茂郡の稻取村は、故田村又吉翁が村長として、報徳

主義を以て治めたが爲め、模範村になれたので、以前は非常な難村であつたのである。明治維新の當時は種々の打撃から村は疲弊の極に達した。其打撃の一つは、嘉永六年ペルリの來航で、諸大名は皆な海岸の村々に出張して防禦の準備をする。稻取村なども其等の武士の爲めに蹂躪せられ、武士は村民の家に入つて勝手に飲食する、百姓は奴隸の如くに使役せらるると云ふ有様に、職業などは手に付かず、其爲めに村は非常に荒れた。第二の打撃は蒸氣船の出來た爲めで、今までは取れた魚を數十艘の千石船で江戸へ運んだのを、蒸氣船だと一艘でチヨイと搬んで了まふそれが爲めに船夫が職業を失つて了つた。

此の如き打撃の爲めに、入谷と云ふ大字の如きは、明治十一年には滯納千五百圓、以上に達した。調査の結果、實際生活に困つて納められな

いのだと云ふ事を發見した。身代が貧しくなると、人は心までも貧しくなるもので、他人の物を何でも取る、借りた物は返さない。人の懐中にまで手を入れると云ふ様に、人情が輕薄になるものである。田村又吉翁

が明治十三年に戸長になつてからは、寢食を忘れて役場に晝夜詰り切りで村の恢復を計つた。其結果が顯はれて、今日は實に幸福なる村となつたのである。以前は道路は恰も田の如く、或は雨でも降ると泥濘膝を没するど云ふ有様であつたが、今は切石が一面に敷詰られ、雨が降ても止ば直ぐ草履で歩ける様になつた。以前は水が悪いので傳染病が流行して困つた。そこで今は立派な鐵管の水道が村内に引かれた。又立派な病院を建てた。院長は醫學士である。警察事故は數年間一つも無い。離縁も無い。道路に酔つ拂ひを見る事がないと云ふ様になつた。是れ皆報徳主義實行の結果であるのだ。(尙稻取村を研究するには、稻取村本村及び大字濱、大字入谷の三或時田村村長は兵營を見て、軍隊の組織が常備、豫備、後備の三段になつて居るのに就いて非常に感心し、吾人の生活も斯く三段組織にしたなら、敵を撃退するは容易であるとの確信を起した。吾人の生活上の敵とは、借金軍である。そして吾々の日常生活は常備軍であるが、一旦何か變事に遭へば忽ち借金軍に攻め込まれる。其日々の生活と云ふ常備

軍が敗れると、其後に豫備も後備も控へて居ないから、直ちに本丸に攻め込まれ、田地畑山林家屋を賣り身代限りをして落城するに至るのである。若し之が三段組織になつて居たならば、決して本城に攻め込まれる心配は無い。

そこで田村村長は、經濟の方面は日常生活の常備軍の外に、臨時費と云ふ豫備軍を作り、更に永安家資金と云ふ各家の基本財産を積立てて之を後備軍としたのである。之と同時に精神的方面に於ても、常備軍として戸主會と母の會を作つた。戸主會は全村の戸主を會員として毎月集會を催はし、之に村治や一家經營の方法を教へ、協同一致良自治民たらしめるので、母の會は、從來無智の主婦たちを導いて戸主を助けさせる爲め、矢張り村治の大要や一家經濟の道を教へ、以て戸主會の活動を制肘せざらしめるのである。此戸主と主婦とは一村自治の中心、即ち常備軍であつて、更に此常備軍の補助機關としては老人會がある。此老人と云ふものは兎角思想が頑固で、改革とか刷新とか云ふ場合には何時でも反

對する、誠に困つたものであるが、よく之を善導すると、其老熟な經驗は却つて事を爲す参考となるものである。そこで田村村長は耆老會と云ふのを起して、六十歳以上の老人は悉皆會員たらしめ、月次會の節には役場員などが出て大に之を尊敬觀待し、また小學校の先生に頼んで理科の實驗をして見せたり、色々文明に接觸させる事に努めた。それで『今の若い者は何でもよく知つて居る、感心なものだ』と云ふことになつて、それから村治の改革もドン／＼進んだと云ふ事である。

さて次は豫備軍である。常備の戸主や主婦に代つて次の自治體を組織すべき者は、若い男女であるので、之をば青年會、處女會として組織した。そして小學校で習つた學術の補充と新しい自治の智識を與へる事に努め、且つ次代の村民として耻かしからぬだけの腕を與へる事にした。で此の青年會處女會では毎年二人づゝの善行者を表彰するが、又其賞品として處女たちには針箱と花簪で、之を得た者は他町村からまで結婚の申込が甚だ多い。嫁に行く時は村の人が皆見送つて其名譽を喜ぶ。此

善行者を選ぶには母の會で投票するので、従つて知らずくの間には主婦が處女の監督をするに云ふ事になり、處女も品行を慎むのである。以上は稻取村が模範村たるに至つた徑路であるが、其内容を調べて見ると、何れも報徳主義に依らざるものは無い。茲に至つて、報徳主義は即ち良好なる自治村を作るの道と謂つて少しも差支ないのである。之れは當明星村も之を範となし、「村是」の示す處に従ひ、道徳、經濟、政策の三綱に法り、協同助成、報徳主義の實現に努め以て、國民の三大義務を全ふし自治自主の人となられんことを切望して止まないものである。

此時、校堂は一時にどよめいて、喝采拍手の聲は暫しは鳴りも止まなかつた。石井が静々と演壇を降るのを見送つた聴衆人は、斯くまで熱心に我々の爲め思ふ石井の決心を、有難しと、感せぬ者は一人も無い。實に此の二夕の講演は、新興の村に生命を吹き込む神の使ひの劇院たる喇叭の聲かとも怪しまれた。

四、難村改造の型式

小川の講演を終つた翌日、亦秋山區で石井の講演會が催はされた。此日の講演會の世話をしたのは彼の神宮寺勇で、神宮寺は曾て自分が半生の熱血を灑いだ永安社が解散して了つたのを、畢生の遺憾とし、村の爲め大字の爲め、折もあらば今一度一事業始めて見たいと思つて居たのであるが、石井の新村興復に關する意見を聞いてからは、丁度石井と異體同心の如く動いて、孜孜として努めて倦まなかつたのである。石井も固より永安社の破壊を心底から残念に思つて居るものである。そして其破壊が人心の不一致から來て居る——畢竟傘の骨を抜いた様な、天幕の支柱を取つた様な不一致、缺陷から來て居るのであると考へたので、此日石井は會場たる神宮寺家の講壇に上るや、「天幕形の自治」と云ふ極めて適切な題を掲げて、區民の弊習に最も宛て徹つた講演をしたのである。

自から治めぬ者は他から治められる。他から治められる事を屑しとせぬなどは、先づ自から治めると云ふ事に力を致さなければならぬのである。自から治める即ち自治と云ふ事は、他の邪魔にならぬ様に自からを羈束すると同時に、出来るだけ我が生をして幸福ならしめると云ふ事で、生を幸福にするには物質と精神との二方面があり、物質は即ち衣食住の問題で、自治民たる者はよく之を解決して十分に満足なる生活を爲すと同時に、進んでは之を他に及ばさすの心掛が無くてはならぬ。又精神の方面では道德の問題で、自治の民たる者は此方面にも圓滿なる成績を収めねばならぬ。此くして道德にも經濟にも十分に其の力を發揮して幸福なる生を遂ぐる、是れ即ち自治の根本義である。然らば此道德や經濟の問題を圓滿完全に解決するには如何にしたらば可いか。予は報徳の教へに従ふべしと云ふ者である。報徳の教は二宮尊徳先生が我等に遺し置かれたる處の治世の要訣であつて、其教義とする處は道德と經濟を必然離る可らざるものである事を説き、我々が天地人

三者の恩徳を被る事の大なる所以を明かにして、人類として之に報ゆる所以なかる可らずと教へ、而して至誠、勤勞、分度、推讓の四綱領を人間の踏む可き道として示されたものである。

協同と云ふ事は、最近科學の發達せる歐米先進國より輸入された思想であつて、我國には尙ほ渡來して日の浅い所から十分に其効果を知る人が少ないのであるが、經濟上此位有利な組織は無ないのである。而して二宮先生は疾くより協同の必要なる事を教られ、以て報徳結社の端を開かれたのである。

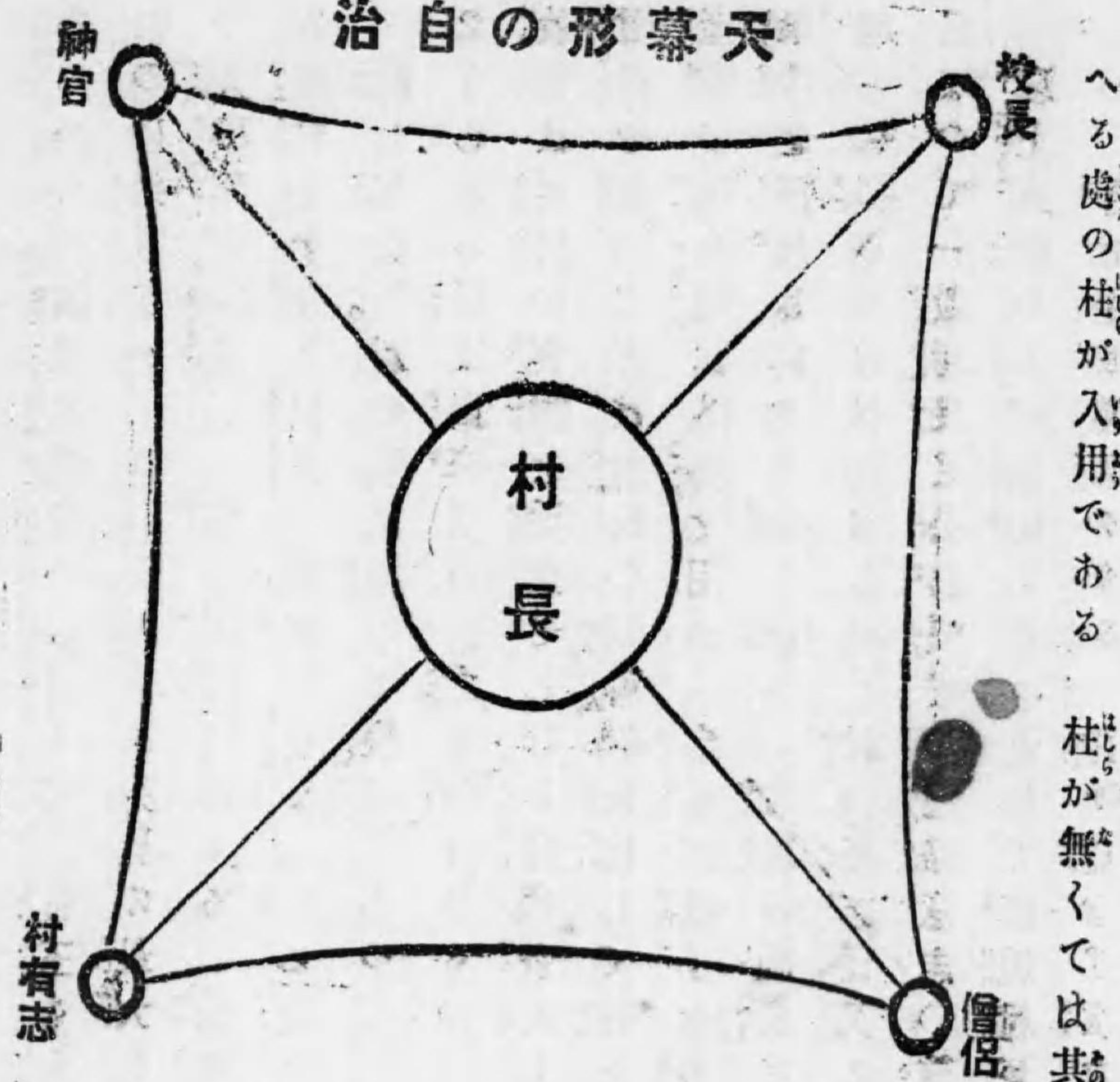
報徳結社の趣意を更に擴充したものは産業組合の方法である。産業組合は西洋の發明に係るもので、我報徳教とは何等の關係も無く創始せられたものであるが、其結果は全く報徳教の教ふる所と同一であつて、其方法に於ては更に一段の進歩したるものである。たゞ其精神に至つては我が報徳の深遠なるに及ばざる事數歩である。されば我日本人は、精神に於ては報徳の教ふる所に依り、手段に於ては産業組合の示す處に従つ

て、世界無比の良い協同を爲すの幸福を有すると云ふ事は、實に天祐の豊かなるものと云つて可い。

此の豊かなる天祐も、之を用ふるの人が悪るれば、遂に何にもなるものではない。私は此「人」を一の天幕——野外に張つて人の休息所とする其天幕として考へて見たい。

今此明星村を模範村たらしむべく改良したいと云ふ事になつて、報徳主義と産業組合制度とを茲に採用しても、之が村内一人や二人の意見では何にもならぬ。村民全體が一人残らず一致するので無ければ駄目である。例へば今言ふ天幕で、五間四方の地に天幕を張らうとするのに一寸や二寸の布では決して天幕は張れるもので無い。又たとひ五間四方の大きな布があつたとした處で、此内何處にでも穴が明いて居たとする、即ち村民の反對者不同意者が一人でもあるとすると、如何であらうか。雨は其地内に遠慮なく漏り込んで、折角の天幕は其効用を全うする事が出来ないのである、然らば布さへあれば天幕は張れるかと云ふと、それを支

天幕の形自の治



へる處の柱が入用である。柱が無くては其下に人間が住む事は出来ぬ。

然らば柱はドンナ風に要るかど云ふと、先づ中央に「村長」と云ふ大黒柱を立てねばならぬ。そして東西南北の四隅に、小學校長、神官、僧侶、村有志と云ふ四本を打立てねばならぬ。是れが一つ缺けても決して天幕は完全に立つて居る事は出来ない。雨風を防いで其村を安全にする事は出来ないものである。

村長は村民を統治する役で

あるから、其根本精神から言へば、帝王も大統領も村長の任務を擴張したのに過ぎない。されば村長は男兒の最大榮譽として、飽くまで其決心の大事業を完成し、名を不朽に傳ふるの覺悟が無くてはならず、村民たる諸君も十分に村長の職務を全うし行る様に助成せねばならぬ。然し乍ら一村の事は極めて複雑であつて、村長一人の手のみで模範村たらしめる事は出来ない。之を助けるもの一は小學校長及教員である。教員は村民の智識を増進せしむる様に教育しなければならぬ。又神官や僧侶や牧師などは村民の精神を教化して善を勧め惡を誡め、又た物質上産業の改良等にも心を用ひ、宗祖が紙子を着ても一簣一笠東奮西走して、衆生を濟度されたる昔を思ひ、村民の師表となり靈肉兩方面より村民の指導に努めなければならぬ。村の有志は又これらの各職の人と異體同心となつて一般村民と公務員と連絡意志の疏通を計らねばならぬ。以上五種の人が協同して、それで模範村が出来ぬと云ふことは斷じて無い。予は是等諸君の奮發勉勵を望むと共に、一般村民諸君に向つては、

報徳教なる經と産業組合なる緯とを織り合せて速かに一大堅固なる協同體を作られん事を望むのである。

と、結論したとき壇上に立てる石井のその面には熱誠が溢れて紅を潮し、そが顯髯には小さき波を打たせて居た。熱し切つたる聴衆は、あたかも一杯の醇酒に酔うた如く「天幕形く」と繰返しつゝ、己が家路へ歸り行くのであつた。

五、感激の涙

連日の戦ひに倦まず疲れず、英氣を百倍して、石井は更に其翌日春日に於ける講演會に赴いた。

村長も助役も収入役も校長も、新たに青年會長に就任した樋口要一も、宗泉院の和尚も、奥田神官も、宮田ドクトルも、初日以来必死の應援を吝まなかつたのであるが、此日も大舉して會場たる寺院に其雄姿を現はした

熱心には、春日區民は固より、他の區の人まで感激の涙を揮つて、一日は一日より、新村勃興の氣運は動いて來た。

石井が壇上に立つた時、急霰の如き拍手は早くも堂を揺がした。此日の演題は「報徳と致富の道」と云ふのであつた。

報徳と致富の道

報徳とは何ぞやと云ふ問題から、以下少しく此教

義の要領を述べる。報徳とは天地人の恩に報ゆるに自分の徳行を以てすると云ふ一の完全圓滿なる道德說兼經濟說である。之を圖に示すると、報徳は丁度日輪の如き十全なるものである。



而して報徳の内容には二つの者が含まれてゐる。道德經濟の二者がそれである。

(徳 報)



その二者は一の報徳てふ圈内に在つて、渾然として融和して居る。道徳とは善事を爲る事、經濟とは金を作る道である。

世の中には随分公事の爲めに働いて財産を減らすと云ふ人がある。又村の事などには一向見向きもせず金に溜める人もある。これらは何れも報徳教を知らざる愚人であつて、財産を減らして盡す公事は決して永續さはず、又道德を顧みしずて作つた財産も遠からず分散して了ふ

それは子孫に善心が植ゑて無いから自然にそうなるのである。報徳教は巧みに此二者を調和して、箇人の爲めにすれば公事に宜しく、村の爲めにすれば自分も富むと云ふ、頗る有難い教へなのである。

此の道徳と經濟の一致は左の三行となつて現はれる。

(行 三)



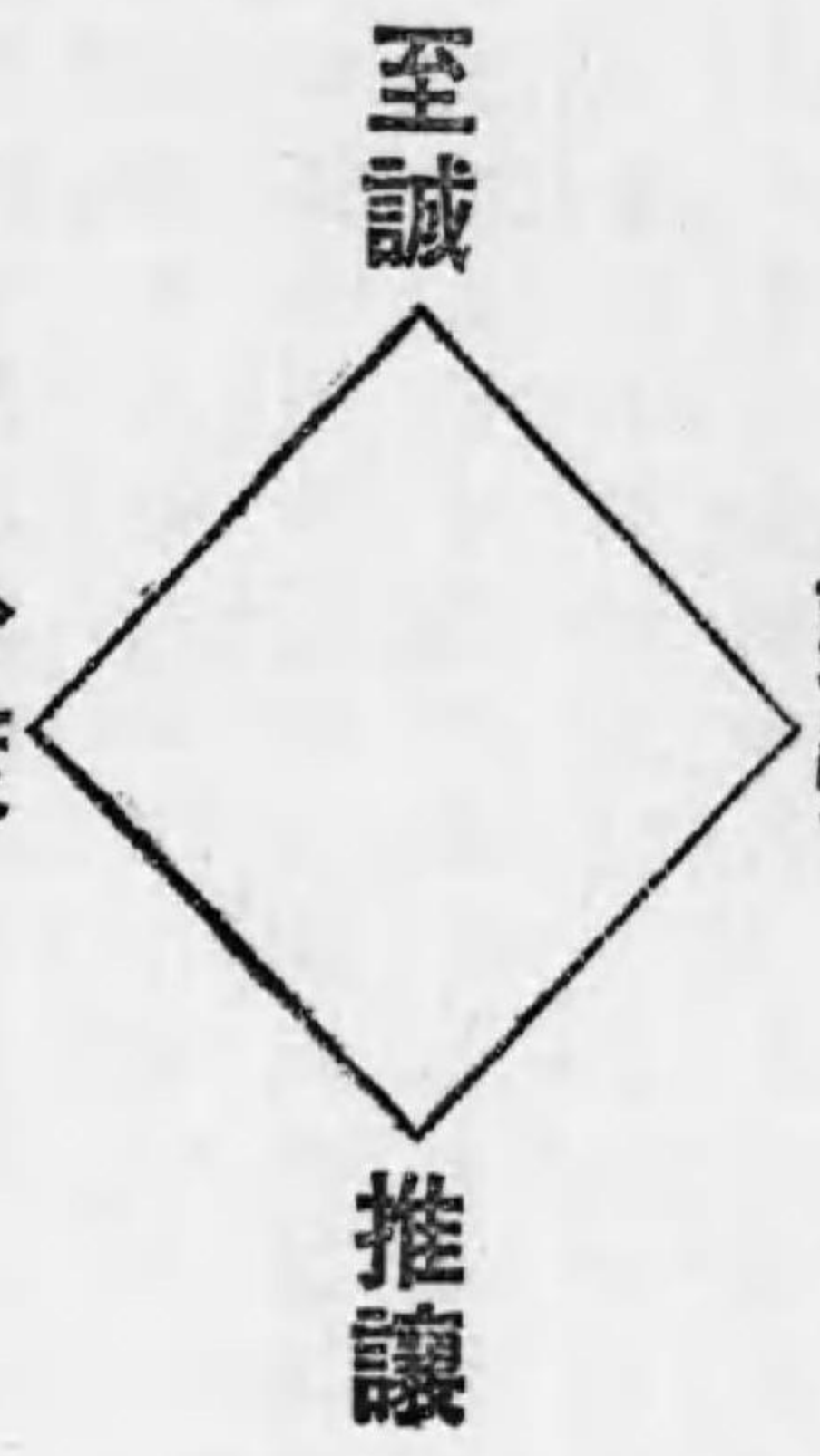
此の三行は人間處世上極めて重要なもので、一を缺いても完全な人とは言はれないのであるが、報徳教を實行すれば之を兼ね備へる事が出来るのである、何と結構な事では無いか。

三行は次に四徳を産む。即ち左表の通り。

至誠を以て本となし、推譲を以て用となし、分度を立つるを以て體となし、勤勞を以て主となすのである。この四徳を日夕煎じて服用すれば、

何人も前の三行に達せられるのである。さて至誠とは眞面目である。彼の岐阜縣の蛭川村が模範村となつたのも、明治の初年に村の戸長となつた、林隆平と云ふ人が大層眞面目な人であり、且又、代々の村長が何れも至誠な人であつたからである。又彼の千葉縣の源村、この村が今日

(綱 四)



範村となつたのも矢張り明治の初年以來の戸長であつた並木和三郎と云ふ人が至誠を以て事に當つたからである、其他廣島縣の廣村の藤田氏、三重縣の玉瀧村の木津慶次郎氏、愛媛縣下餘土村の森恒太郎氏、東京府下三田村の小澤作重氏等を始め、全國六十有餘の模範村の治績を研究して

見ると何れも村長其人が至誠以て村事に當つたからであつた。勤勞とは己れの爲す可き義務職業に勤勉なる事である。抑々富は働くに依つて生ずる、勤勞の主要なるは勿論である。

然し働く計りでは宜しくない。分度と云ふものを立てなければ、幾ら働いた處で焼け石に水である。分度とは分限の事で、収入より少ない消費をして生活する事である。富を造るの秘傳は是れである。五百圓の収入ある人が五百五十圓を支出すれば其人は貧乏であるが、四十圓の収入しか無い人でも三十圓で暮らしを立てる人は十圓の餘裕のある富者である。若し借金があるならば、借金の有るなりに分度を立て、少しづつ償却して行けば、貧困の苦境から脱する事は、必らずしも難事では無い。二宮先生は借金を無くする法は、借金高を書いて神棚に貼つておけ、而して毎日之を拜んで、一枚づゝ割がす事の出来る様にせよと言はれた。借金と云へば、我國の戸數一千萬戸の内農家の數が五百四十九萬餘戸であつて、この五百有餘萬戸の農家は總計九億四千二百三十萬圓強の負債

を背負うて居るのである。之を一戸當りに平均すると約百八十圓弱となる。此借金の内には随分止むを得ざる事情よりの分もあらうが、又中には親達や女房にも明しかぬ様な借金も含まれて云るであらうと思ふ。併し當明星村の諸君にはこう云ふ種類の借金は決して無いと云ふ事は堅く信じて居るのである。が、世間には莫大な借金で苦しんで居ながら、我が最愛の女房にも知らせず、又年寄達にも隠して置いたりして、爺父が死んで葬式を出と云ふ間際にそれが世間へ知れる等と云ふことは珍らしくない。それも先代のした借金ならば止むを得んが、そうではなくて現在の戸主たる人が作つて居たのだから堪らない。全體借金を我が女房に隠して居ると云ふことは大いなる間違である。予の考ふる處では、或る程度までは我が家の經濟の内容は家内一同のものに能く心得させて置く必要があると思ふ。それを主人は我家の經濟状態を家族のものに知らせないのみか、少なからぬ借金の有る癖に身分相應に服裝を飾るので見様見まねで息子もやれば娘もやるのである。斯の如く主人たる者が不

心得であるときには、一家の繁榮は愚かなこと、遂には祖先以來の家株をも廢滅させる種になるのは當然である。

先刻も申した通り、全國五百六十萬の農家が有する九億四千萬圓——

一戸當り百八十圓の負債も、要するに農家はその經濟の調節を誤つたからである。今日は農家の經濟も餘程昔とは趣きが異り、日にく復雜となつて來つゝあるのだから、農家の諸君は大に研究を要す可き事と考へ

る。それで予は豫て諸君の御手許へ廻してある『村是』表にも載つて居る通り、稼業經濟にも家事經濟にも産業組合を利用し又各自が分度經濟を實行されると云ふことが、最も肝要なことであらうと思ふのである。

推譲とは他に推し譲る事である。己れ獨りよい事をしないので、人に譲る。博愛衆に及すので、人、社會、天然、これらに對して、我が報恩の

微意を志するのである。推譲は徳の王、この反對の掠奪は惡の王である。芋種は冬期は之を收め、一陽來復の春を待つて之を畑に植える。此の

冬季の收藏は貯へるのであつて、春に蒔くは即ち與へるのである。され

ば收藏貯藏は推譲の生るゝ處である。

推譲と云つても、得る所全部を人に施すのでは、それでは推譲では無くて浪費である。雅譲は收入全體の四分の一だけを之れに宛つるもので、

今四百圓の收入のある者ならば、其内三百圓を自分の所有とし、百圓を他の所有とす事のである。而して此自分の消費の内にも、亦四分の三を

日常の生活費に宛て、四分の一を備荒貯蓄として萬一の變に備へる。又推譲の方も、四分の三を自譲として自分の子孫後世に傳へ、四分の一を

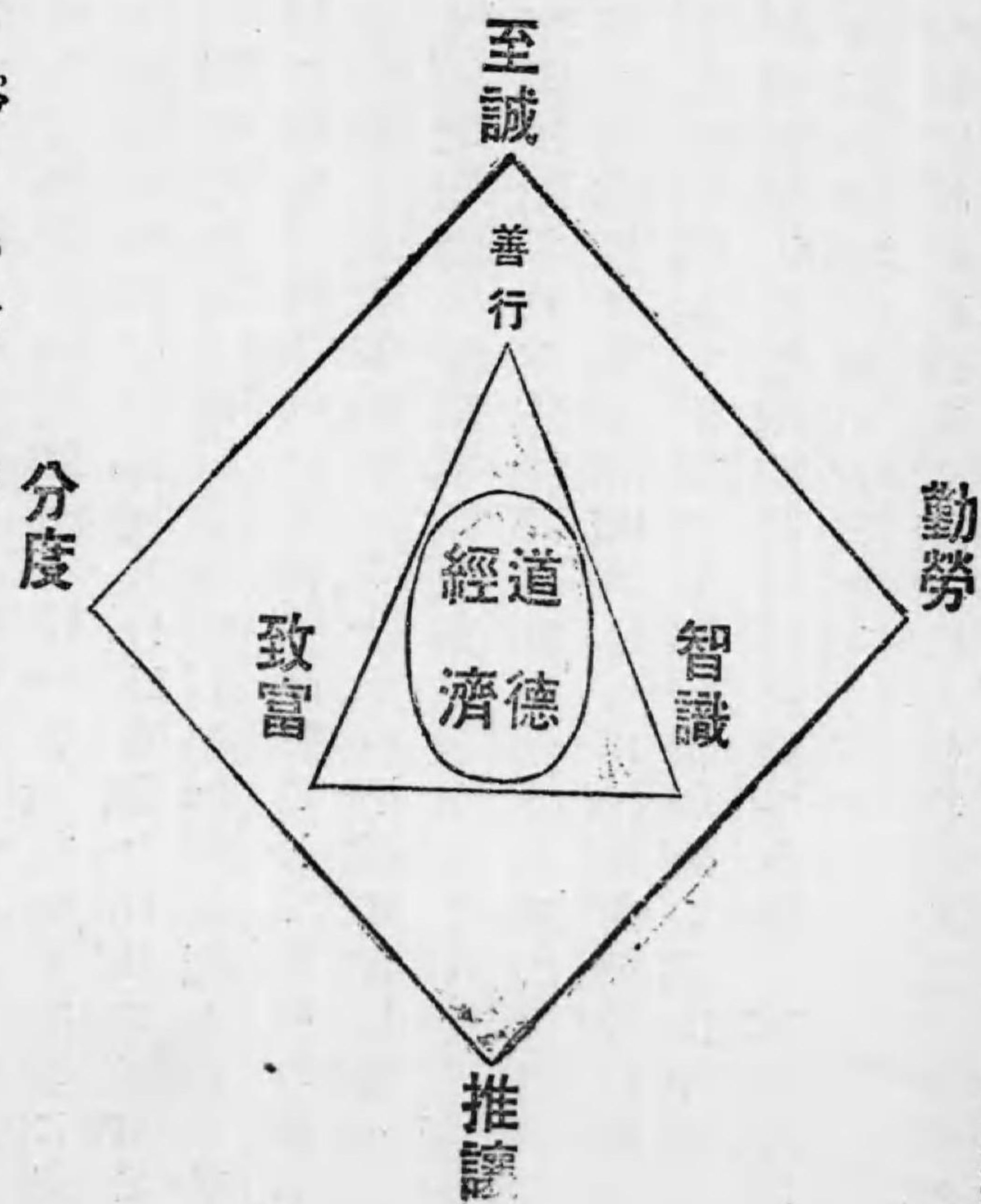
他譲として社會公共及び慈善等に費すのをよしとする。此程度を越えては推譲も其効果を全うする事が出来ぬものである。

以上の説明を總括すると、報徳の教へは丁度左の圖の如きものになる。これを忘れずに行けば、箇人は立派な人になり、村は模範村

となり、國は名實備つた一等國になれるのである。而して之を遺忘する時に、國家家庭の破滅は來るのである。

茲に一本の木があるとする。此木は上の枝葉と下の根と相當の割につ

(報 德 教)



り合はねば、僅かの風雨にも倒れるものである。それで木の成長するに
従つて根もそれ相應に延びて行く。財産の大きくなる場合にも此木を手

本としなければならぬ。即ち富の大きくなるにつれて、多く公共の爲め
に財を散じ、以て善根を下ろして置かなければならぬもので、苦し之を
怠つたならば、子孫の内に怠け者を生ずるとか、人の怨みを招くとかし
て、決して永遠の富盛を得る事は出来ぬ。然るに根があれば、一朝事が
あつても能く之を支へて難關を無事に通る事が出来るものである。
以上に説いた報徳の教が解つたならば、予は村民諸君が今よりして十
分各自の富を作られん事を望むものである。而して其の富を作るの秘決
は全く此報徳主義に依る事で、目下我明星村に實行されてある、報徳産
業組合こそ、此報徳主義を實現せんが爲め、吾々の組織した至誠の一團
體である。

産業組合は近世科學の示す處の協同一致てふ法則を採用して報徳主義
を實行しようとする組合であつて、吾々平民が富を爲すの道は是れ以外
には求む可らず、求めても得難いのである。然らば則ち報徳産業組合は
諸君を富まし、村を富まし、吾人の今日の苦境を救つて、極樂郷に赴か

しむるの最捷徑である事を信じて疑はぬのである。諸君は須らく一致して本組合に加盟せねばならぬ。是れ諸君の利益にして、同時に又一村利益なのである。道德と經濟の一致これ報徳主義と産業組合の偉大なる所以では無いか。

天地と皇と親との恵にて

世をやすくふる徳に報えよ。

なに事もこと足り過ぎて事ならず。

徳に報ゆることを知らねば。

最後に石井が示した此の報徳の道歌を、聴衆は皆味ひ得つ、今更に二宮先生の教義が新らしい意義を有する事を、深く思ふたのである。

六、特殊部落の爲めに

譬へて云へば、大きな家の片かげの、日の光線さへも充分には映し込ま

ぬ處の地面に、根を下ろした大和撫子の、惻れにヒヨロ／＼と細長く延びて、少しでも日の目を見ようと、口當りのよき南の方に一生懸命其の葉莖を傾げて居る様に田中の一部落を組織する新平民は、其の名も陽氣な花澤村てふ自治區の中に在り乍ら、大きな花澤の家の蔭を憂きものとして、招きもせぬ明星の光りを戀ひ慕ひ、そが通學の生徒を數年來此村の學校に託してからは、モウ田中區は明星村の一區になり濟ました様な心地で居たが愈々此度明星村が新興の理想を以て、自治の旅は上ると聞いた時には、田中の人々は、その眷々たる思ひを眞心から披瀝して、未はドウしても明星村に加はると云ふ意志を發表したのであつた。

去る者は追はず、來る者は敢て拒まざる寛大の理想を抱懐する、此の新興の巨人は決して田中區の來り加はるを否み排斥するが如き心は少しも無つた。況してや花澤に合してから以來と云ふものは、一日と雖も繼子扱ひを受けぬ日とは無かつた、此區民の心の中を推測れば、常に正義を愛する明星村の人は、滿腔の同情を彼等に寄せずには居られぬのであつた。石

井が或日田中區に赴いて、そこに深零せる區民の境遇に一掬の江涙を潑いだのも固より其の處であつた。石井は明星村に其熱辯を揮ふた如く、此の特種部落の爲に亦其縦横の長廣舌を揮つて、憐む可き彼等を激勵すべく試みた、石井の講演は實に次の如くであつた。

自治の能力と新平民

我が敬愛する田中區民諸君、諸君は我が六千萬の同胞でありながら、諸君は新平民なりと云ふ故を以て世間から侮辱せられて居るのであるが、諸君は定めて不満不平に堪へないであらう。けれども吾々明星村民だけは諸君の友である、少くとも諸君の同情者であると云ふ事を了解せられたい。

世間は何故に新平民なるものを侮辱するであらうか、誠に謂はれ無き事である。新平民なるものが果して其侮辱する人達よりも劣等なものであるかど云ふに、吾人は決して然では無いと斷言するものである。此田中區に就いて見るに、一般に此田中區を下等入種の集合の様に見下

して居るのであるけれども、彼等の其實質は却つて此田中區の方が花澤本村よりも優つて居るのである。今まそれが一例として花澤本村兒童の就學歩合を調査して見るに本村の九分二厘に過ぎぬのに對して、田中區は實に九分九厘と云ふ良好の成績を示し、區内には殆んど無學の者が無いと云ふでは無いか。本村に租税の滞納者が少なからぬのに、田中には一人でもそれがあつたものでは無いのである、徴兵検査の成績に見ても遙かに本村に優つて居て、彼の不品行病の如きに罹つて居るもの又トラホームの如きも殆んど皆無と云つて好いのである。それから隣保相助の方法の整つて居る等とも本村の及ぶ所では無いのである。斯く言へば或は諸君に向ひお世辭でも云ふ様にも聞えるが事實は之を證據立てゝ居るのである。此の如き優良なる自治民を遙かに下等なる花澤本村民が侮辱する資格は無い筈である。然るに之をすると云ふものは唯人々の偏見に過ぎないのである。

由來人間と云ふものは兎角我が同類のみを庇つて、異人種を迫害する

と云ふ癖があるもので。西洋人が昔からあの猶太人を迫害するその有様の残忍なのは、アレでも自ら神の子を以て任じて居る基督教國民かと思はれる程であつて、識者をして覺えず聳聳させるのである。近くは又北米合衆國の排日問題などもあり、偏見は仲々に急には失せぬ次第である。然し同じ日本人種でありながら、新平民だからと云つて排斥するなんてうことは、歐米に於ける異人種の排斥よりも更に偏狹千萬なる、人道を捨て置く可らざる大罪惡である。

吾人は地方巡回先に於いて幾多の事實に之れを見て居るものであるが最も甚だしき偏見の事實を見聞して居るのは、埼玉縣入間郡高萩村のことで同村生れの所謂新平民で、其後東京に移住したが、元來中々の才物である處から着々成功して、今では東京市政に參與する名譽の市會議員にまでなつて居る龜岡淺之丞と云ふ人がある。或時、郷里の小學校が新築されると云ふ事を聞き、愛郷の念禁じ難く、建築費の内金一千圓の寄附を同村村役場に申出でた、然るに時の村長鈴木藤四郎は、甚だしき愚

人と見え、新平民から寄附を受けるのは村の名折れであるとして體よく之を拒絶した、龜岡氏は大に腹を立て、村長を捉へて嚴談に及だので、村長も止むなく村會へ諮問する事にしたが、村會と云つても、何れも愚蒙なる議員共ばかりの寄り合ひであるから、遂に之を拒絶する事に決議した。實に別らぬにも程のあつた次第ではないか。

是等は畢竟無智と非常識の生産する所であつて、吾人が社會教育の緊要なることを叫ぶのもその一因である。で將來今少しく教育が進み人々の間に權利思想が發達したならば、謂はれなく侮辱する者も無くなり、又甘んじて侮辱を受ける者も無くなる譯である。昔、歐洲に覇を稱へた羅馬帝國には其初めに當つて二箇の種族が別れ争つて居たものである、其一つはパトレスと云ふ貴族で、他はプレプスと云ふ賤族であつた。此二者が分立して居る内は羅馬も其全盛には達せなかつたが、國民の思想が發達するにつれて、プレプスの勢ひは漸次強大となり、遂に貴族を壓制する迄になつて、兩者は打つて一丸となり、よく此の羅馬大帝國の盛

時を形作るに至つたのである。

されば我が日本帝國も、少にしては一村一自治區の繁榮を望むにも、新平民の孤立などは極めて望ましからぬことであるから、我等は此偏見に囚られざる様なさねばならぬ。

諸君の内には、其新平民たる故を以て、自から卑しと思ふ人があるかも知れぬ、けれども我れまづ自ら卑しめて人後に之を悔るのであるから之は大なる心得違ひである。で、新平民の賤しからざる事は、尙ほ彼の新華族の賤しからざると等しい。殊に其根本を探つたならば、益々然る所以を發見することであらうと思ふ。抑々新平民は如何にして出來たかと云ふに、歴史家の言ふ所に依ると、戦争の結果捕虜となつた者が苦役を課せられて、遂に今日の新平民の祖となつたもの多く、又支那朝鮮の歸化人が一の部落を造つて居たのが、遂に之になつたのもあると云ふ説に一致して居る、然らば新平民たるものは、古昔の勇敢なる戦士の子孫若くは純日本人よりも文化の度の高かつた外國人の子孫で、其中には疑

ひも無い多數の貴族王族等を含んで居るのであらう。現に埼玉縣入間郡に高麗村及高麗川村南高麗村女影等と云ふ村落あり、舊幕時代に朝鮮より歸化したる高麗王及其一族の遺族が澤山住んで居るのである、斯く觀察し來れば諸君が自ら屈する理由は少しも無く、周圍からも之を侮辱すべき理由は一つも無いのである。而かも因習の久しき諸君が今日の境遇に對しては、吾人は衷心よりの同情を禁せざる者である。諸君の中には、定めて世人の侮辱に對し、憤慨の念に堪へざる場合もあらう、けれども充分持重し隠忍して、輕々しく感情に動かさるゝ事なく、冷靜なる頭腦を以つて益々社會上の位置を高め、普通民以上の實力を養ひ功績を擧げて遂には兩者の差を絶滅するの覺悟が肝要であるのである。

進化論の示す處に依ると、團結力の強い者はほど優等な進化を遂げる事か出來る、今諸君は花澤村民中の最も團結心に富めるものであるから、諸君は將來遂に花澤村の主權者となる事は疑ひも無いと思ふ。否、今日すら既に有爲な人物を輩出して其兆候を示しつゝあるではないか。若し諸

君か來つて吾が明星村に投せらるゝならば、明星村は諸君の團結力と優
 良なる新人物とに依つて、利せらるゝ處が尠少ならぬ事であらうと思ふ
 二十世紀も今や酣にして、海には潜航艇あり、空には飛行機飛行船あ
 り、此の如き文明の照代に於て實に笑ふ可き僻見を持して、人種の異同
 を云ふが如きは、野蠻の甚だしきものである。死んや同人種の日本國民
 の中に、異を立つるが如きは思はざるの甚しいものと謂ふ可きで、吾人
 は斷じて之を否認するものである。諸君も其特有なる堅忍の心と團結力
 とを益々研磨し來たて、科學の示す處に依つて理想的自治民とならなけ
 ればならぬ。

説き去り説き來る石井の顔には、同情の熱誠が滿ち溢れて、頬は若々し
 く血の氣に燃えて居た。之に反映する聴衆の目には、怪しや露の玉さへ宿
 つて、石井が斯く演じ終つた時は、咳拂い一つさへする者は無かつた。

七、責任ある人の膝詰手合せ

村の顧問なる石井洋は此うして全村五區と田中の特殊部落を廻つて、六
 回の大講演を試みたのであつたが、その反響は忽ちに顯はれて、此六日間
 に、『報徳産業組合』へ加入を申込むものが續々と踵を接し、今までは人數
 こそ多けれ、戸數から見れば割合に振はなかつた組合が、今は全村總戸數
 の十分の九強と云ふものを組合員に收容する事が出來たのである。別段戸
 毎に勧誘して歩いたと云ふ譯でも無いのに、此意想外の好成绩を收め得た
 のは、一に石井顧問の熱誠を籠めた講演の賜のとは言ひながら、一面また
 時勢の要求の然らしむる所であらうか。彼の『村是』が發表されてから、
 未だ幾日にも經たぬ今日此頃、既に斯くまでの好景氣であるので、大和村
 長以下の喜びと満足とは、言葉にも盡されず、益々之に力を得て、天晴れ
 大成を期せばやと、強き決心をしてゐるのだ。公共心の權化たる石井は又
 村内の巡回講演を一順済ました其翌日、新たに村内の戸主七百八十七人當

村に本籍の在るもので、出稼或は失踪約八十名と田中區の戸主三十三人とを、小川の明星小學校に招いて、責任ある人の膝詰手合せと云ふ覺悟の集會を催はすのであつた。午後一時と云ふ時間さへ早や能く守られて、漏なく來り會した、小學校の講堂に滿ち渡つた人々の前に、石井は例に依つて其丈高き姿を現はすや、『分度經濟と物品積立』と題し、一々數字を掲げ來つて、次の様な最も切實なる一場の講演を試みるのであつた。

分度經濟と物品積立

吾人が既に勤勞に依つて收入を得て居る以上は相當の節制を加へて無益の浪費と身分相應以上の贅澤を避けねばならぬ。是れ天地人の恩に報ゆる爲めの善行を爲すに必要缺く可らざる所で、是は個人も團體も皆同様である。

『分度』とは何を基礎に解かれてあるかと云ふに、分とは天分を守る事であつて、度とは人の道を立つを事である。即ち分度とは己の天分を能く辨へて、その適度を過さぬ様にすることである。元來自分は如何なる

資質を有するか、自分は何を職として社會に立つて居るか、と云ふ事を辨へるのが、即ち己を知る所以である。此の道徳を經濟の方面に應用されたのが、二宮先生の分度經濟說である。即ち人は各々能力を異にするので、各人が社會に寄與する功勞も差異があるから、各人の受くる報酬にも等差のあるのは當然のことである、ゆえに其の身分財產收入等に應じて生計の限度を定むると云ふことは最も肝要なことで、之を立ると否とは實に貧富の岐るゝ所である。二宮先生が我が家の再興を圖られたのも、小田原の武家服部某の家政改革を始めとし、彼の櫻町の復舊の如きも、小田原の武家服部某の家政改革を始めとし、彼の櫻町の復舊の如きも、其他相馬、下館、鳥山、細川等の藩政改革も、又個人とは伊豆國菲山村の多田彌次右衛門を始め數人の爲め仕法を立與へられたのも、皆この分度經濟を應用して、之が救濟の効果を擧げられたのである。

二宮先生語録に曰く「天下には天下の收入があり、一村には一村の收入があり、一家には一家の收入がある。是は自然の天分である。併し天分と言

つても決して動かす事の出来ぬと云ふ意味ではない。只その現在に於ては之を標準として見るより外は無いと云ふ意味である。故に天分は確定不動のもので無い。今一年一反歩十四圓の收穫があれば、それは今年の天分であるが、明年之を取り増して十五圓得れば、それは又明年の天分である。要するに天分は開拓伸縮の餘分があるもので、其の以上を能はざるに望むものを非望といふ。此の天分に依つて用度を節するのが分度である、分度の國家に於けるは、家屋の基礎に於ける様なものである。土臺があつて家屋は始めて建てる事が出来る如く、分度を制して始めて國家を経営する事が出来るものである。苟くも分を守り度を謹んだならば餘財日に生じて、國を富し、民を安んずる事が出来る。苟くも分度を守らないなどは、大國を有つて居ても用度が足らぬ、否、分度を知らないならば四海を有つて居ても其不足を補ふ事が出来るのである。云々』とある。

是に依つて見れば分度は歳入によつて歳出を計るものであつて、而か

も其歳計は毎年之を變更する事を許さず、過去數年間の平均數を基礎となし、一定の年限間之を繼續するものである、されば分度とは換言すれば節約と稱する事を得るものである。けれども之を節約と言はずして分度なる新名稱を附したのは實に先生の一大卓見と云はなければならぬ。これを單に節約と呼ぶ時には其標準漠然として一定し難いけれども、是を分度と呼ぶときは直ちに應じて生計の標準を確立することに思ひ至るからである。そして此の分度經濟說なるものも矢張り天地自然の道理を基にして、主張されたのである。即ち一年は春、夏、秋、冬の四季に分れ居るから、これを標準として四分分度法を立てられたのである、即ち春は物を生じ、夏は之を育成し、秋は結實し、冬は之を藏めて翌年の種となす。故に春、夏、秋の三季に當る分を分度内として使用し、冬の季に當る分を分度外とし貯蓄するのである。たとへば茲に月收四十圓を得る人があるとして、其人が三十圓を生活費に使ひ、あとの十圓を貯蓄しておく、これが能く分度を守ると云ふ事になる。然るに此人が四十圓